唐土名勝圖會 京師 三

唐土名勝圖會第一集卷之三

目次

内城總圖　目録
八旗　正陽門
正藍旗居址　讓白旗居址
正白旗居址　讓黄旗居址
讓藍旗居址　讓紅旗居址
正紅旗居址　正黄旗居址

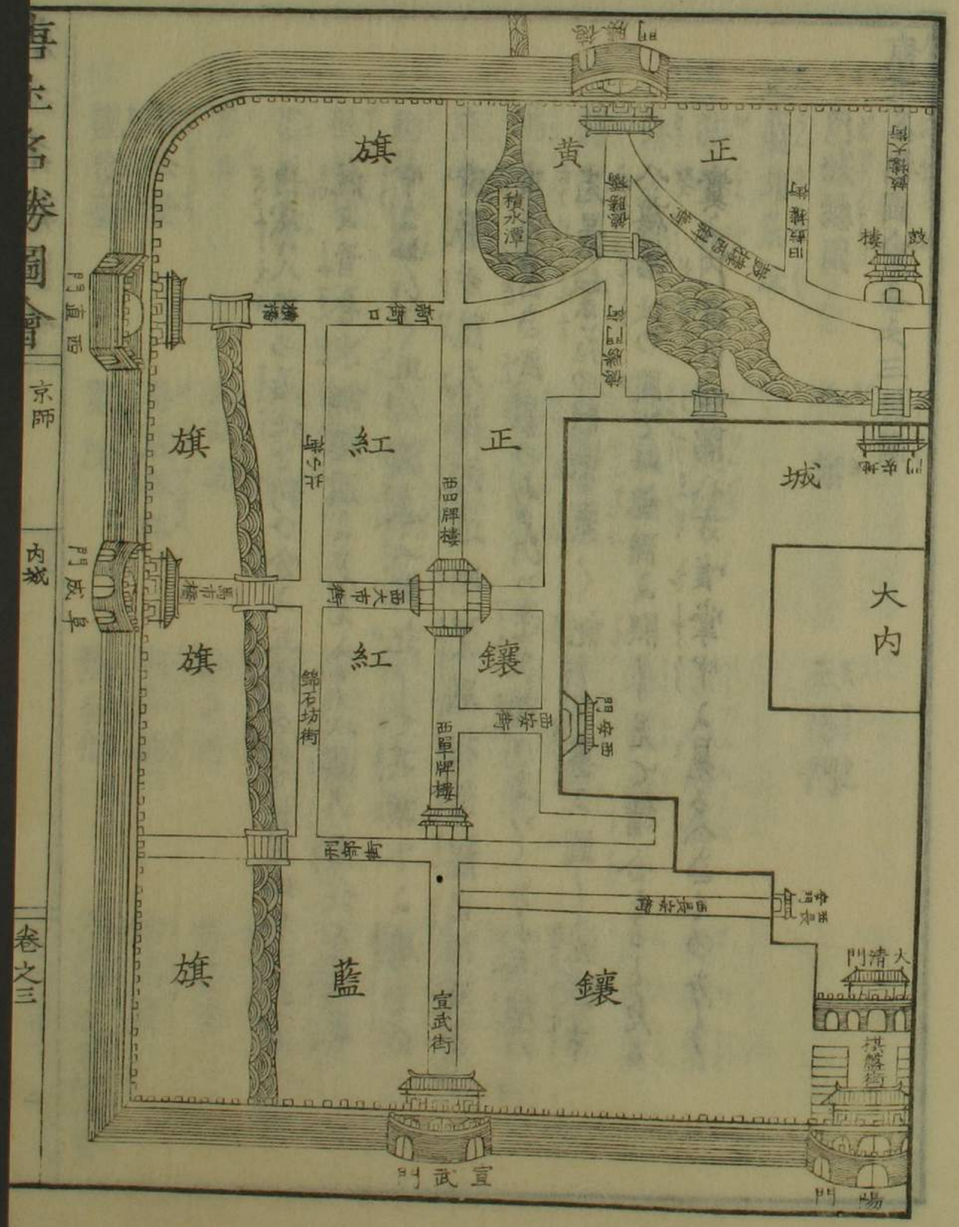
特別
ル5
4025
3

皇城

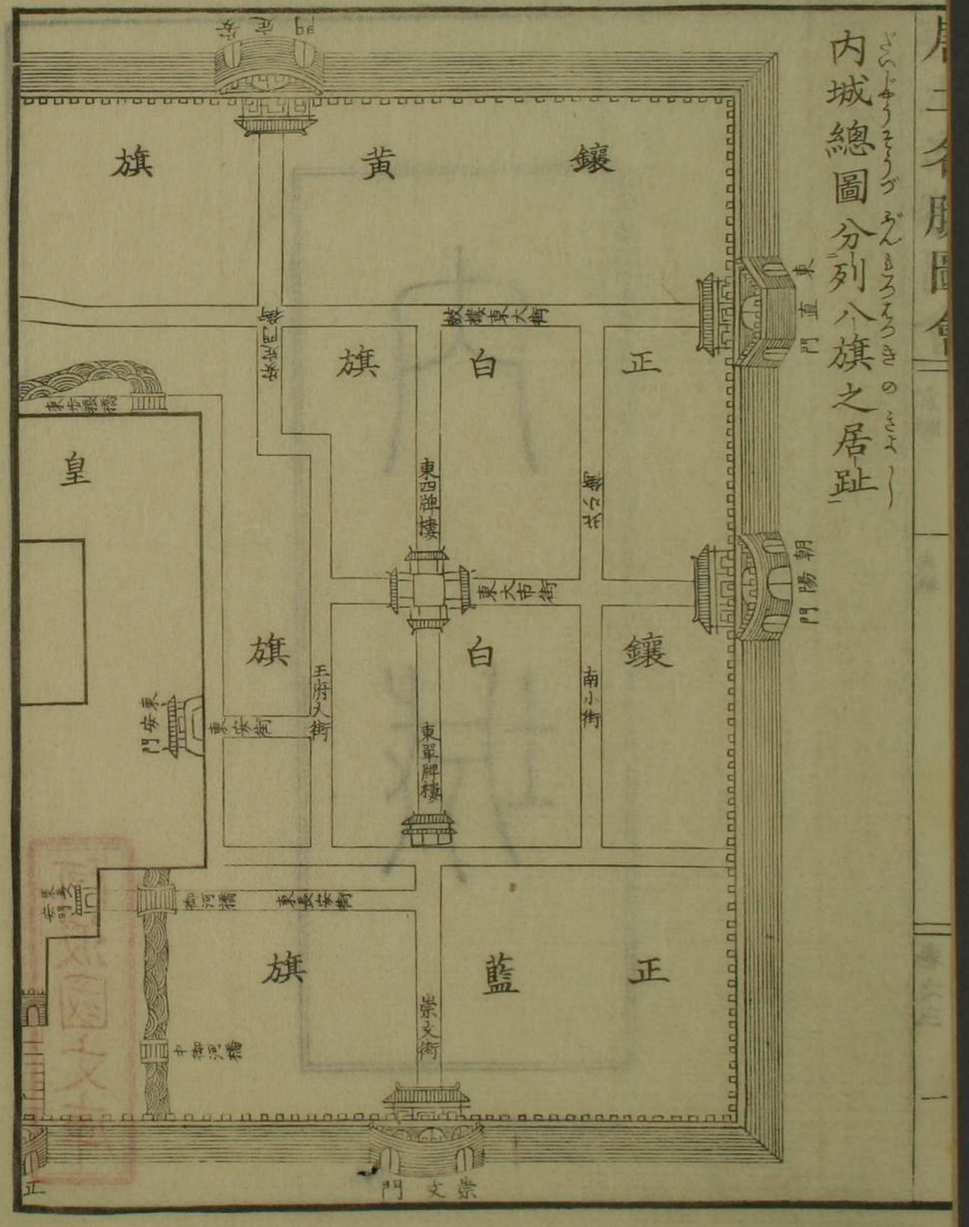
阿波國文庫

JL5
4025
3

<99-182>



內城總圖分列八旗之居址



内城八旗の居址を列ぬ分ㇾ五城を分てハ五城の分列ㇾ
既ㇾ首巻京師總圖ㇾ八旗の居址を此巻
中ㇾ挙ひく再び旗毎ㇾ圖記ㇾて其旗下ㇾ屬ㇾ
府署寺院大街河道園墓廟祠僧観。及び
市の置き民家のあらひ連り或いまばらなる土地の
光景緊要の形勢悉く記ㇾ審ㇾ圖ㇾ九巻中
八旗居址の圖を此總圖ㇾ照ㇾ見て綱領ㇾ
實ㇾ内城の口隅八方唯掌中ㇾ見べきものㇾ

唐土名勝圖會巻之三目錄

内城總圖

八旗

正藍旗居址

旗盤街
許公祠
禮部署
鴻臚寺署
鹿常館
翰林院署
照忠祠
肅親王府
苦井
呂公堂
觀象臺
敷文坊
水鏡堂
兵部署
欽天監署
四夷館
鑾儀衛外駕庫
裕親王府
崇文門
大石橋
華嚴禪林
貢院

正陽門

宗人府署
藤花廳
楊繼盛祠
太醫院署
玉河橋
理藩院署
安郡王署
靈藏觀音寺
泡子河
関帝廟
聚奎堂

吏部署
戸部署
工部署
怡賢親王祠
詹事府署
堂子
右僕寺署
總督倉場公署
慈雲寺
太清宮
正藍旗護軍統領署

鑲白旗居址
王府街
正藍旗覺羅宗學
鑲白旗蒙古都統署
正白旗蒙古都統署
正藍旗滿洲蒙古漢軍三都統署
二郎廟
鑲白旗官學
清泰寺
正白旗官學
正白旗居址
大隆福寺
正白旗覺羅宗學
朝陽門

會同館
嵩祚寺
成壽寺
正白旗漢軍都統署
東西院
雙忠祠
關帝廟
智化寺
證因寺

豫親王府
賢良寺
燈市
鑲白旗護軍統領署
龍翼宗學
恒慶寺
正白旗護軍統領衙門
順天府儒學
五嶽菴
六倉

寧郡王府
崇真萬壽宮
法華寺
龍翼弟子統領衙門
鑲白旗滿洲都統署
正藍旗官學
維摩菴
祿米倉
光君堂

文丞相祠
大慈延福寺
慧照寺

鑲黃旗居址
鼓樓
顯佑宮
文昌宮
宣泉苑西殿
天心堂
安定門
宣泉苑
先師廟
五岳觀

鑲黃旗護軍統領署
鑲藍旗居址
振武坊
刑部署

纛樓
步軍統領衙門
圓恩寺
法通寺
劉猛將軍祠
鑲黃旗漢軍都統署
鑲黃旗蒙古都統署
文廟
石觀音寺

萬寧寺
萬寧橋
鑲黃旗官學
慈隆寺
靈椿坊
大興縣署
兩儀寺
雍和宮
石翼磯

慈善寺
福祥寺
千佛寺
順天府署
鑲黃旗滿洲都統署
鑲黃旗覺羅宗學
國子監
柄林寺
東直門

鑾儀衛署
白雲樓

太常寺署
太理寺署

都察院署
工部製造庫

通政使司署　西城察院署　南城察院署　象房　右祥寺　鷲峰寺　鑲紅旗護軍統領署　鑲藍旗官學　鑲紅旗居址　萬松老人塔　石佛寺　関帝廟　善壽寺　正紅旗官學

辦理回人佐領事務處　中城察院署　右翼宗學　鑲紅旗官學　天仙廟　雙塔寺　顯應觀　大能仁寺　真武廟　右翼炮廠　歷代帝王廟

河南道署　東城察院署　宣武門　承恩律寺　正紅旗漢軍都統署　鑲藍旗滿洲都統署　鑲藍旗漢軍都統署　鑲藍旗蒙古都統署　鑲黃旗覺羅宗學　都城隍廟　鑲藍旗護軍統領署　右翼前鋒統領衙門　右翼稅署

小城察院署　時憲局　鑲紅旗滿洲蒙古漢軍三都統署　圓通禪林　善恩寺　大德顯靈宮　寤燭寺　護國関帝廟　正紅旗蒙古都統署　弘慈廣濟寺

納檀寺　白塔寺　正紅旗居址　朝天宮　十方禪院　大德真君廟　正黃旗居址　大覺寺　藥王廟　雄勇祠　廣化寺　玉皇廟　千佛寺　正黃旗蒙古都統署

関帝廟　正紅旗覺羅宗學　正黃旗官學　阜成門　宝禪寺　正紅旗護軍統領署　聖祚隆長寺

火神廟　漢壽亭侯廟　宛平縣署　龍華寺　小藥王廟　華嚴禪廟　正黃旗滿洲都統署

柳巷　崇國寺

三旗參領署　賢良祠　海子橋　心華禪寺　雙寺　德勝門　水関

積水潭　半藏寺　銀錠橋　十刹寺　妙緣觀　德勝橋　觀音庵

古平巷　崇元觀　永泰寺　西直門

金剛寺　龍王廟
正黃旗護軍統領署　正黃旗漢軍都統署
萬佛寺　崇壽寺

唐土名勝圖會卷之三

編述　法橋　岡田玉山尚友

故兼葭堂木世肅先生遺意　岡　熊岳文暉　仝　畫

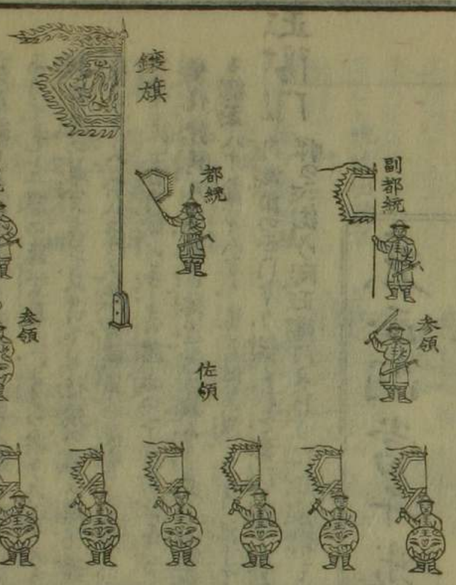
大原東野民聲

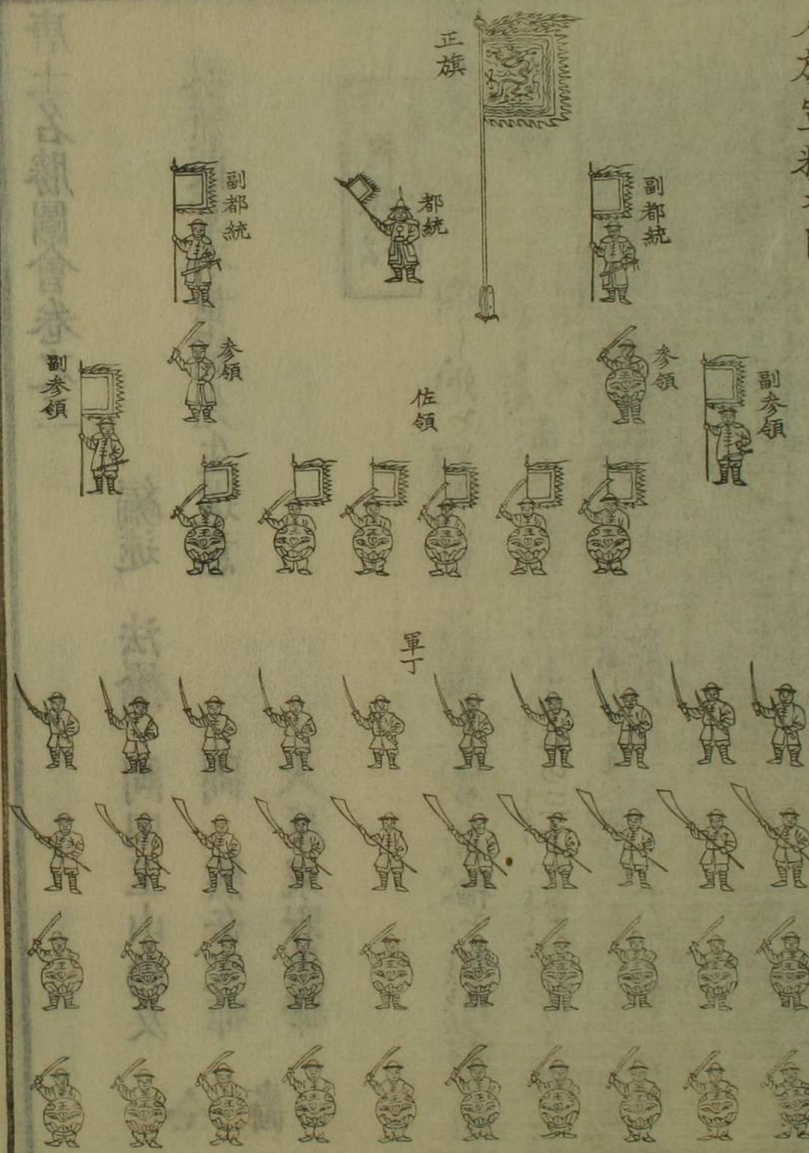
○内城

崇禎承襲を大内と稱し、外を皇城と号く。皇城を包める曲輪を即内城と稱し、又包城ともいふ。圖圍凡十里高三丈五尺あります。南より三の門あり、東小西の三方に各二門あり、凡そ九門なり。西南を正陽門といふ。先帝を崇文門、右を宣武門といふ。共に朝陽門、東直門あり、西草廠門西直門あり。○京師の街を制するや、南北を經とし、東西を緯とし、其大街と稱するもの凡そ二十に歩小街と稱するもの凡十二歩あり。大巷三百六十に街通二十九あり。○京師の人巷と呼で衢術といふ。蓋京師の方言なり。今其實畫を按て、概略を述ん。

八旗　清朝開國の時、諸部を統一して、八旗の軍旗と分ち、八旗を以て軍隊の編制とせり。後ち漸次に増加して、其數の國々に八旗の軍と頒ち、之を天下國家の護衛とせり。姫初八旗を以てし、合せて八旗といふ。八旗を濫洲八旗、蒙古八旗、漢軍

八旗軍粧之圖





八旗あり。色を合せて二十に旗ふ。右漢軍鑲黄旗・鑲白旗・正白旗・鑲紅旗・正紅旗・鑲藍旗・正藍旗の八旗となり。其正黄旗・鑲黄旗・正白旗と上三旗と称し。其餘を下五旗と称す。其旗幟の色を以て分門・牆垣等に押す。正黄旗は安定門の内と護国門の内より西直門の内と護国門の内より東直門の内と安定門の内より東直門の内と護国門の内と護国門の内より西直門の内と安定門の内と護国門の内より東直門の内と安定

正藍旗居址之圖

○濁洲當石漢軍の三正藍旗の北壕の北旗し歟を接し其東の單牌樓より崇文門の大街に至る水橋より東内城の根まで凡そ其中を濁洲當石漢軍の參領佐領の居址を分てり長安街の牌樓より西濁洲の東長安門の内金水橋まで凡そ濁洲の二參領の屬せる佐領十七人の居址にして此内玉河橋より崇文門の大街に至るまで凡そ濁洲の三參領の屬せる佐領十七人の居址にして此内玉河橋より小長安街の牌樓まで凡そ濁洲の二參領の屬せる佐領十七人の居址にして此内玉河橋より崇文門の大街に至るまで凡そ濁洲の頭參領の屬せる佐領十六人の居址にして此内玉河橋より南の部の國國まで凡そ濁洲正藍旗の參領二人佐領三十人の軍丁九百人なり

○單牌樓より崇文門に至るを當石の頭參領の屬せる佐領十人の居址にして此内玉河橋より南の部の國國まで凡そ濁洲の頭參領の屬せる佐領十七人の居址にして此内玉河橋より小長安街の牌樓まで凡そ濁洲の二參領の屬せる佐領十七人の居址にして此内玉河橋より崇文門の大街に至るまで凡そ濁洲の三參領の屬せる佐領十七人の居址にして此内玉河橋より崇文門の大街に至るまで凡そ濁洲正藍旗の參領二人佐領三十人の軍丁九百人なり

○單牌樓より崇文門に至るを當石の頭參領の屬せる佐領十人の居址にして此内玉河橋より東水磨胡同に至るを漢軍二參領の屬せる佐領七人の居址にして此内玉河橋より東水磨胡同の西に至るを漢軍三參領の屬せる佐領十人の居址にして此内玉河橋より東水磨胡同の西に至るまでを濁洲當石漢軍の正參領の屬せる佐領十人の居址にして此内玉河橋より東水磨胡同の西に至るまでを濁洲當石漢軍の二參領の屬せる佐領七人の居址にして此内玉河橋より東水磨胡同の西に至るまでを濁洲當石漢軍の

宗室名勝圖會

長子 郡王適子若未恩封授照鈴子例考授二等鎮國將軍	貝勒	降襲貝子	降襲鎮國公	降襲輔國公	仍襲輔國公	降襲不入八分輔國公	降襲三等鎮國將軍	二等鎮國將軍	一等輔國將軍	奉恩將軍
二等鎮國將軍	貝子	降襲鎮國公	降襲輔國公	仍襲輔國公	降襲不入八分輔國公	三等輔國將軍	一等鎮國將軍	一等輔國將軍	奉恩將軍	
一等鎮國將軍	鎮國公	降襲輔國公	仍襲輔國公	降襲不入八分輔國公	三等輔國將軍	二等鎮國將軍	一等輔國將軍	奉恩將軍		
一等輔國將軍	輔國公	仍襲輔國公	降襲不入八分輔國公	三等輔國將軍	二等輔國將軍	一等輔國將軍	奉恩將軍			
二等輔國將軍	不入八分鎮國公	降襲不入八分輔國公	三等輔國將軍	二等輔國將軍	一等輔國將軍	奉恩將軍				
一等奉國將軍	不入八分輔國公	降襲三等鎮國將軍	三等輔國將軍	二等輔國將軍	奉恩將軍					
二等奉國將軍	三等鎮國將軍	降襲三等輔國將軍	二等輔國將軍	一等輔國將軍	奉恩將軍					
三等奉國將軍	三等輔國將軍	二等輔國將軍	一等輔國將軍	奉恩將軍						
奉恩將軍	均封奉恩將軍	均封三等輔國將軍	均封三等奉國將軍							
仍襲奉恩將軍	閑散宗室									
降襲奉恩將軍										

○棋盤街　正陽門の内、大清門の前にあり。東西皇城大清門の左右に沿ぜり。○數文坊　棋盤街の南にあり。東江米巷の西にあり。

宗人府署　國の宗支清門の紅墻より、敷家巷の西に沿て、斜に北へ向ふ。

の後ろ明代の石碑二玉牒庫實錄庫銀庫の三あり。凡宗人府署の監る所、皇族の屬籍と學校とを掌る。歲時を以て玉牒を修め、昭穆の次第を辨じ、爵祿の等差を序て、其恩養をいとしくし、教令を布施して、その總宜を宣べ、以て宗室、覺羅の籍を考覈し、以て其進退を掌る。凡宗室、覺羅の罪を議するの法、皇族の屬籍と學校とを掌る。

欽定封爵表

適子 恩封襲封均照鈴子例考授	親王 仍襲親王	郡王 仍襲郡王
餘子 考授	側福晉側室子 考授	別室所居妾勝子 考授
不入八分公	二等鎮國將軍	三等輔國將軍
一等鎮國將軍	三等輔國將軍	三等奉國將軍
三等鎮國將軍	三等奉國將軍	三等奉國將軍
一等輔國將軍	三等奉國將軍	
二等輔國將軍		
一等奉國將軍		
奉恩將軍		



藤花廳之詩

手種來藤已七年
長條緑架每相纏
只看葉密清陰覆
忽報花多紫粉懸
風下掉頭嫌一老
雨餘舒眼眄三賢
從今堆字詩還和
寫入當時草木篇

吳寬作

鳴門録

吏部署

清朝國号を立るのそよめ古祖皇帝の天命年間より八の和碩貝勒を立て國政を約しむ。此ての朝會燕饗の節よし。他の宗室とは其礼を異うして。天皇より八分の一とは下らず。其後皇の天徳年間宗室の内より特恩の封ぜられし親王の御女の郡主。郡王の息女の縣主。郡君を封ぜらる。○親王世子。郡王の妻の封号と福晋とよび。妻を稱して側福晋とよび。次下滿洲蒙古軍の妻を滿人とよび。奉恩鎮軍の妻を恭人とよび。次下滿洲蒙古軍の妻を恭人とよび。奉恩鎮軍の妻を恭人とよび。○親王世子。郡王の妻の封号と福晋とよび。妻を稱して側福晋

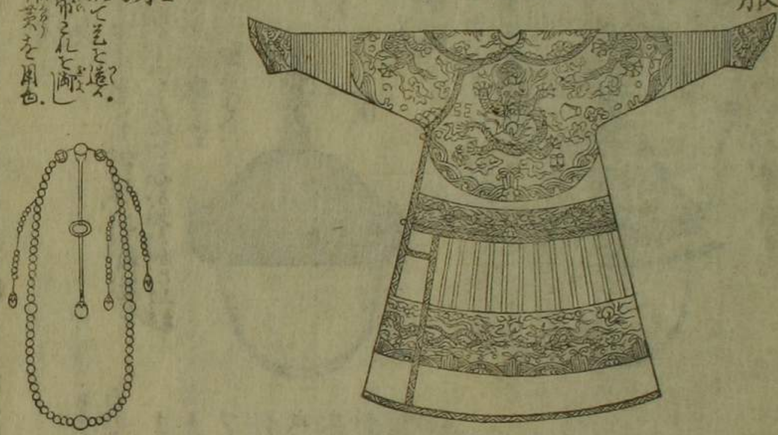
戸部署　厨の東、吏部署の南にあり。九式経邦ところ人額あり。雍正帝の宸翰也。署の東小門を入、各一人づゝと戸部の總官として、番天下の五田戸口財穀の政をつかさどり、出納を糺して部繳をひとしくす。又山東濟東司、山西濟東司、河南河北江西江南各甚外江蘇江寧蘇州福建浙江湖廣陝西川廣東廣西雲南貴州各一濟東司の官濟人蒙古漢人

皇帝夏朝服

三月十又日。祈穀于上帝。服之。

皇帝朝珠

赤珠百有八。以間金珠。大典禮。則皇帝冠服。各從其類。

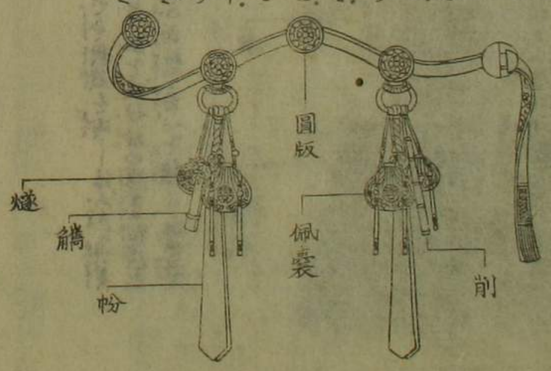


皇帝朝帶

色以黃。以金爲之。龍文。有圓版。紅寶石或藍寶石及珠飾之。

皇帝朝靴

色以黃。以金爲之。龍文。有圓版。紅寶石或藍寶石及珠飾之。



皇后冬朝冠

冠以青緞爲之。上綴朱緯。而綴以珠。冠頂三層。下層綴珠二十有四。中層綴珠十有六。上層綴珠十有二。頂上有大珠一。飾以金鳳七。周綴各色寶石。珍珠滿飾之。後垂青緞帶二。綴珠各一。末綴各色寶石。



皇后夏朝冠

冠以紗爲之。周綴珠寶。其制與冬朝冠同。



皇后金約

朝服之下。以束腰。後垂二。各綴珠十三。末綴各色寶石一。兩端各綴珠三百二十。其間約以珠三百二十。兩端各綴珠一。

皇后耳飾

左右各三。各綴龍一。其下綴珠各一。

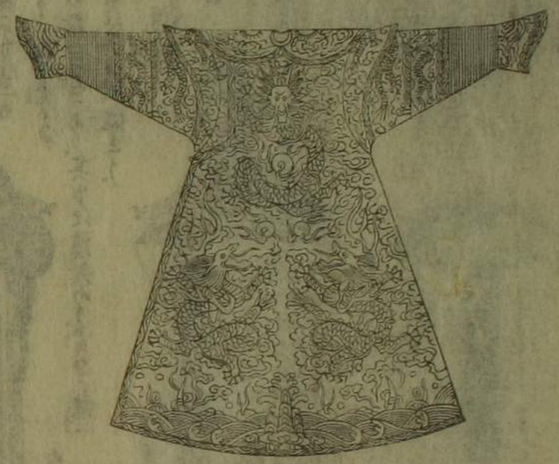


皇后朝褂

色以石青。片金爲緣。後垂二龍。各二。前綴一。下垂各層。寶珠飾之。

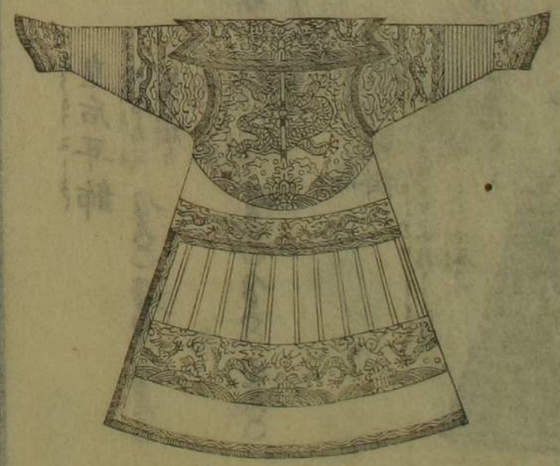


皇后冬朝服之前式



色の明美を用ひ裾脇と袖の際より右まで金刺繍の雲を其間に加へ表裏ともに金龍九を縫ひ表裏ともに同じ表ゆかは繧繝にして八寸巾水の文あり裾より雲に龍二疋ツヽ裏は彩龍二疋後の明美の繍を省く

皇后夏朝服之後式



色の明美縫の行金刺繍繧繝あり裾脇袖口等は其餘は單裳をのぞく其餘はさきの朝服の制のごとし

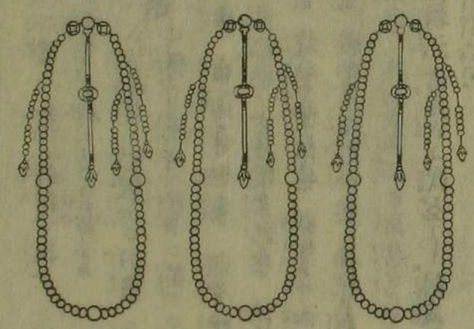
皇后朝珠

皇后朝服の時は朝珠三連にして冊禮の時は朝珠二連の時は朝珠一連にして珠實石間に金石間に琅玕を貫き帛帶を用ゆ

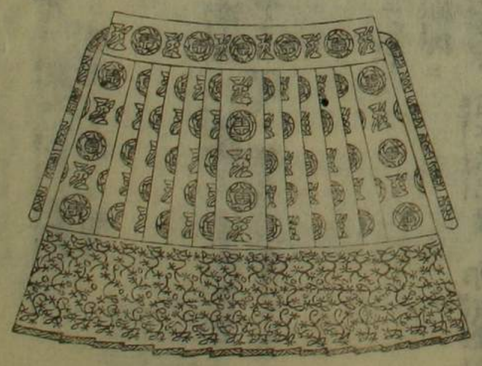
皇后綵帨



朝服の時掛ケ後ろ左の縫ひて五彩の雲の圖ありのごとし



皇后朝裙



皇后の朝裙は片金にて海龍縫上は金寿字の紋服を用ひ下は各彩龍の袍服を用ひ皆正幅にて襞積あり

裳の朝裙は片金にて縫ひ上ひ餘よりは朝裙と同じ

樂器

○朝會中和韶樂　○麾一　○搏拊二　○編磬十六　○特磬十二　○編磬十六　○琴一　○瑟二　○簫一　○笛八　○篪二　○笙一　○塤二　○敔一　○搏拊二　○柷一　○敔一

○朝會丹陛大樂　○鼗一　○方響二　○雲鑼二　○篴一　○簫二　○笛一　○笙一　○大鼓二　○杖鼓一　○拍板二

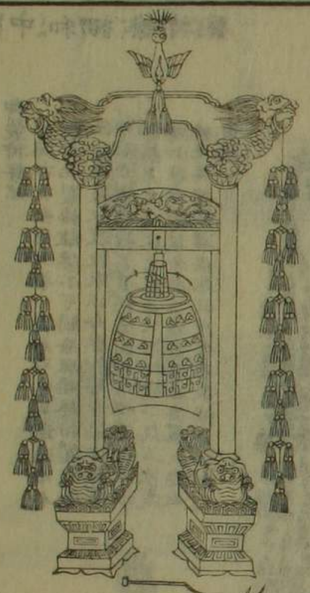
○古廟奉先殿朝日壇享歲壇等祭祀樂　編磬十六　○麾一　○柷搏二　○編鐘十六　○特磬一　○琴十　○壎二　○敔一　○搏拊二　○柷一　○敔一　○節一　○于六　○羽六　○篴二

○凱旋凱歌樂　○方響一　○雲鑼一　○羽振一　○鐃二　○篴二　○簫二　○笛一　○笙一　○杖鼓二　○拍板二

鹵簿鼓吹大樂　鹵簿導迎樂　巡幸鼓吹樂　天祐擁護祭祀樂　方澤擁護祭祀樂　地祇擁護祭祀樂　採桑桑歌樂　燕饗丹陛大樂　燕饗宴樂　燕饗茄吹樂　燕饗食番部合樂　燕饗食番部樂　燕饗用緬甸國樂　燕饗用安南國樂　燕饗用緬甸國樂各以上樂器ごとに奏しるしとなり　此より下は朝祀番國式を載す　・剃除を行ふ時奏樂　・陸大樂・大廟祭祀樂　凱歌樂のことなり　國民

中和韶樂鎛鐘

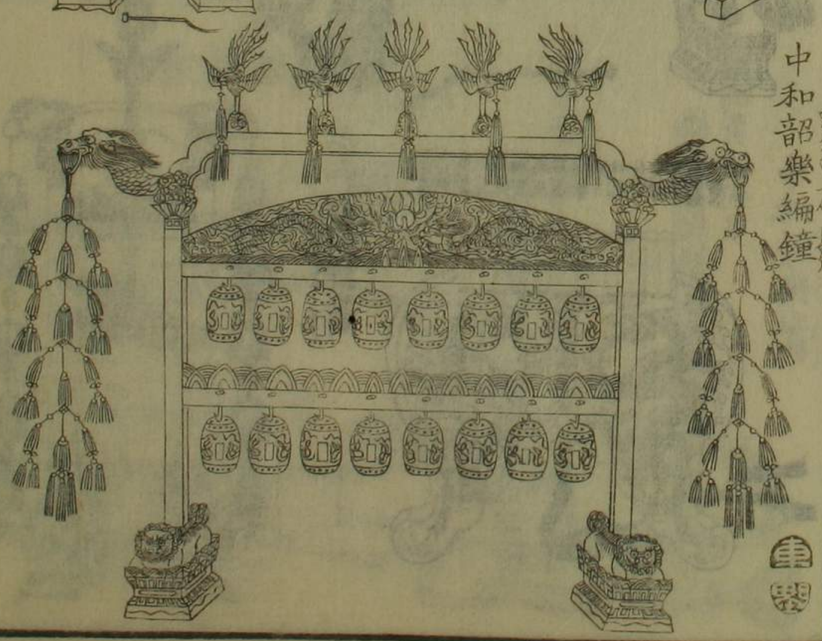




御製鑄鐘銘

自古在昔功成作樂辨物消吉鑄此鐘鎛　皇祖睿音中和大備詎独是遺或存深意績底西放瑞出西江考制奏器協和万邦一襲特縣用起律首編鐘繼奏簨虡成九寛横架奏必考必精慎遵　前憲敢或損増宣陽導陛立均出度万事本根百王規模繁余小子蒙業　重熙類　天者定惟曰際時範器識年慈新已盛銘無溢辞懋乾懋敬

中和韶樂編鐘

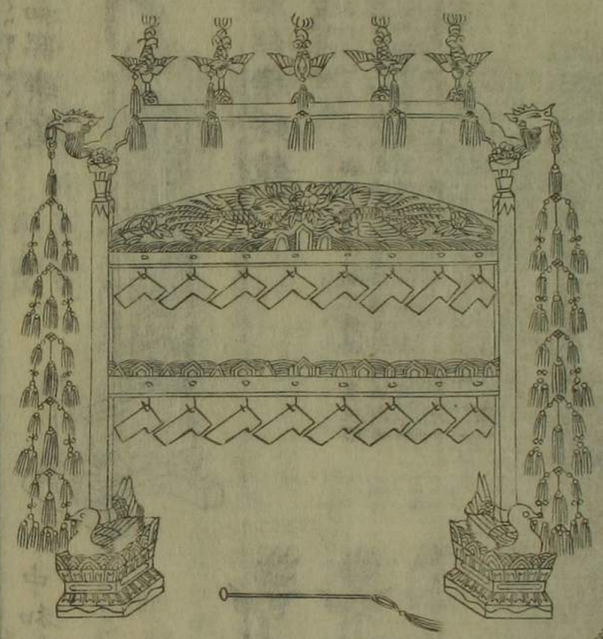


中和韶樂特磬

中和韶樂編磬

御製特磬銘

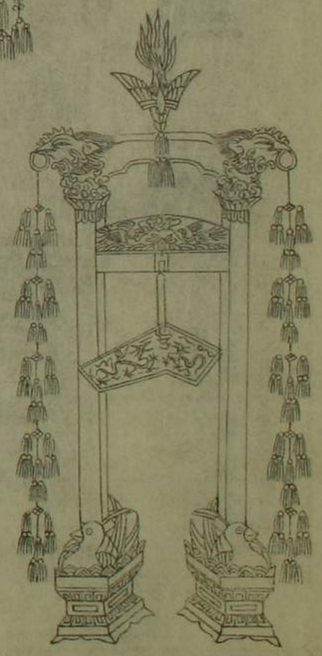
子輿有言金聲玉振一虡無双九成遍進准今酌古既製鑄鍾磬不可闕倫理始終和聞我疆玉山是爰依度採取以命磬和警音協律咸備中和洄濱同拊其質則遥囿桓所傳浮沓涇水詎識見之鳴球之此法天則地股二鼓三依我繹如歟舞雩冀考樂惟時乾隆祖德翼々遞孟撫是萬国咸凛保泰敢或伐功敬識歲吉辛巳乾隆





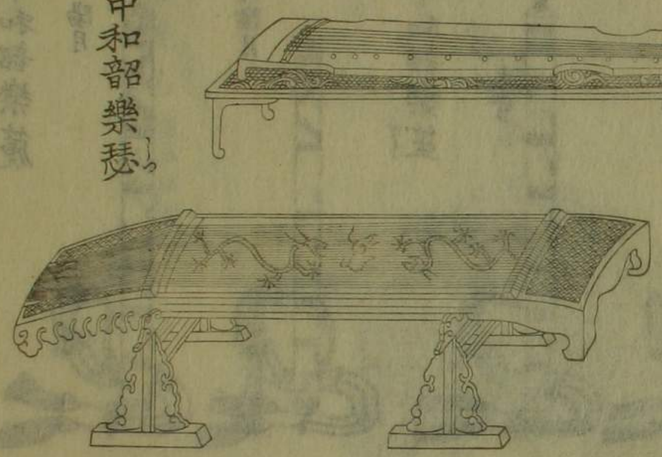
倍夷則　倍無射　黃鍾　大蔟　姑洗　蕤賓　夷則　無射　應鍾　南呂　林鍾　仲呂　夾鍾　太呂　倍應鍾　倍南呂

中和韶樂排簫



中和韶樂琴

中和韶樂瑟



中和韶樂笛

姑洗笛用陽月



仲呂笛用陰月



仲呂簫用陰月

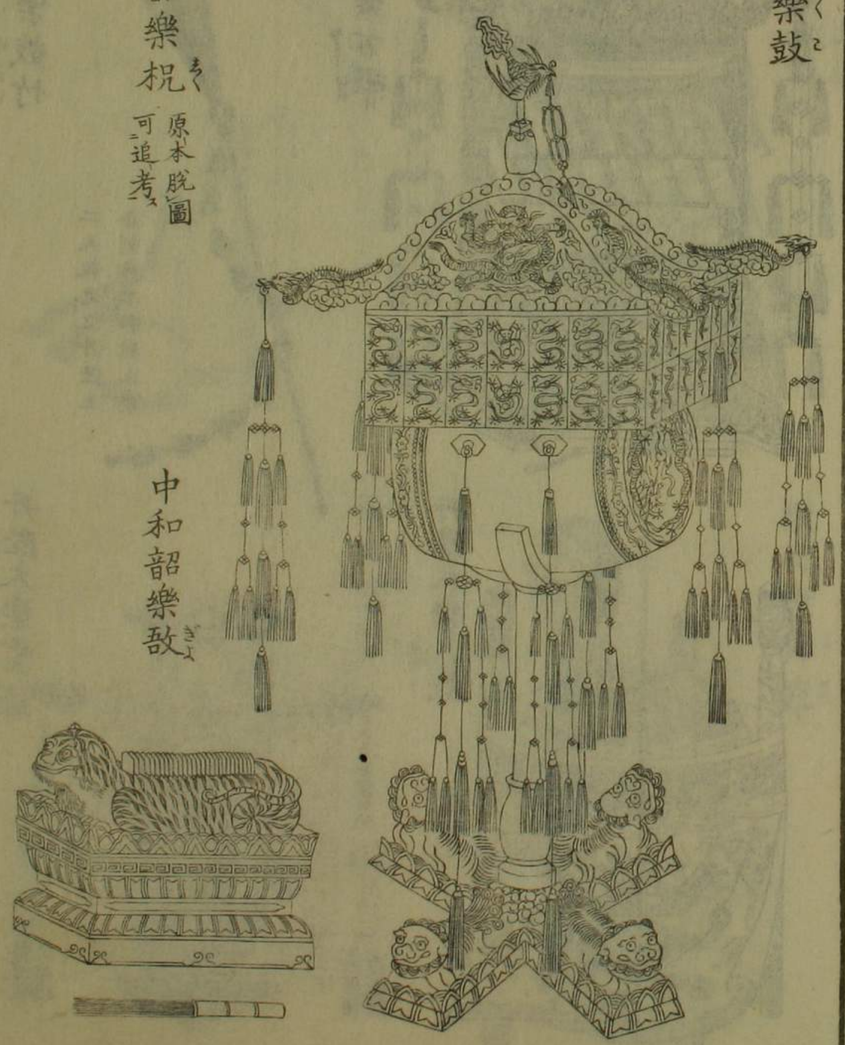


中和韶樂簫

姑洗簫用陽月



中和韶樂鼓



中和韶樂柷　原本脫圖可追考

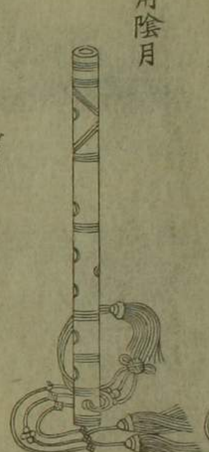
中和韶樂敔

中和韶樂篪

姑洗篪用陽月



仲呂篪用陰月

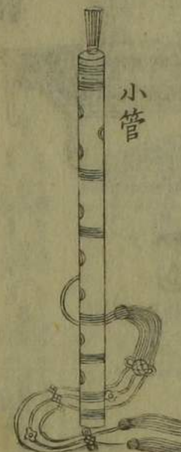


中和韶樂笙

大管



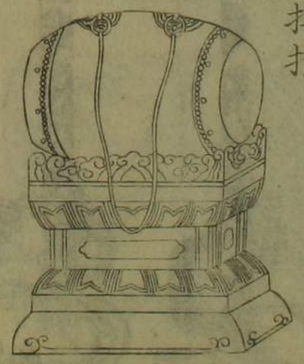
小管



中和韶樂壎

黃鐘壎用陽月大呂壎用陰月

中和韶樂搏拊



黃鐘壎前式



大呂壎前式



黃鐘壎後式



大呂壎後式



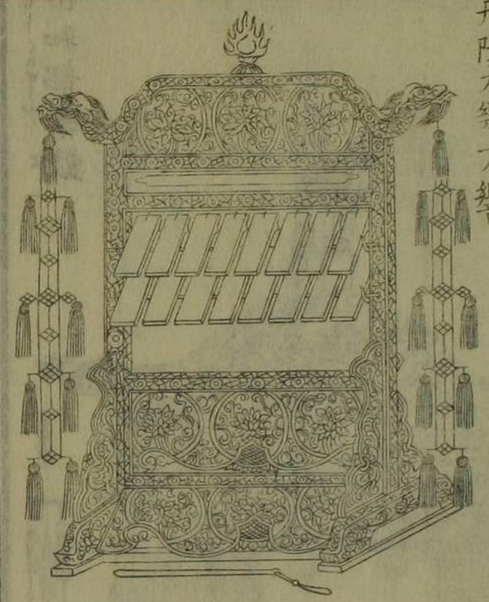


丹陛大樂戟竹

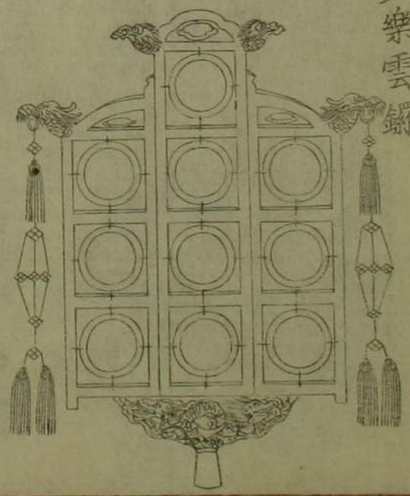
二人執之立丹陛上合則作樂離則止樂



丹陛大樂方響



丹陛大樂雲鑼



丹陛大樂大鼓



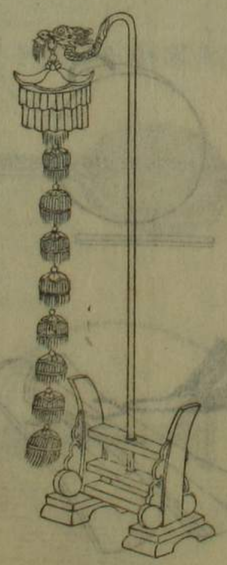
丹陛大樂杖鼓



丹陛大樂拍板



祭祀樂舞節



祭祀樂干



番部合樂胡琴

番部合樂二絃

回部樂塞他爾

回部樂喇巴卜

安南國樂弓彈弦子

安南國樂弓彈胡琴

安南國樂弓彈雙韻

以下ハ蕃國回部ヲ燕饗セル樂器ノ内ヨリ形ノ異ナル物ヲ抽テ附錄ス

祭祀樂舞戚

祭祀樂舞羽

祭祀樂舞簫

凱旋凱歌方響

凱旋凱歌樂星

凱旋凱歌樂鍚

凱旋凱歌樂鈸

凱旋凱歌樂拍板

後部署の儀制もこれに倣ひ許羅ふ數あり。今これを拾ふ。此本寛歳己丑八月より始めて冬を周きてこれを終ふ。その実のもとより容蓮蓮のごとくうてその成るをまつ。しかるのち佛一體あり。

兵部署

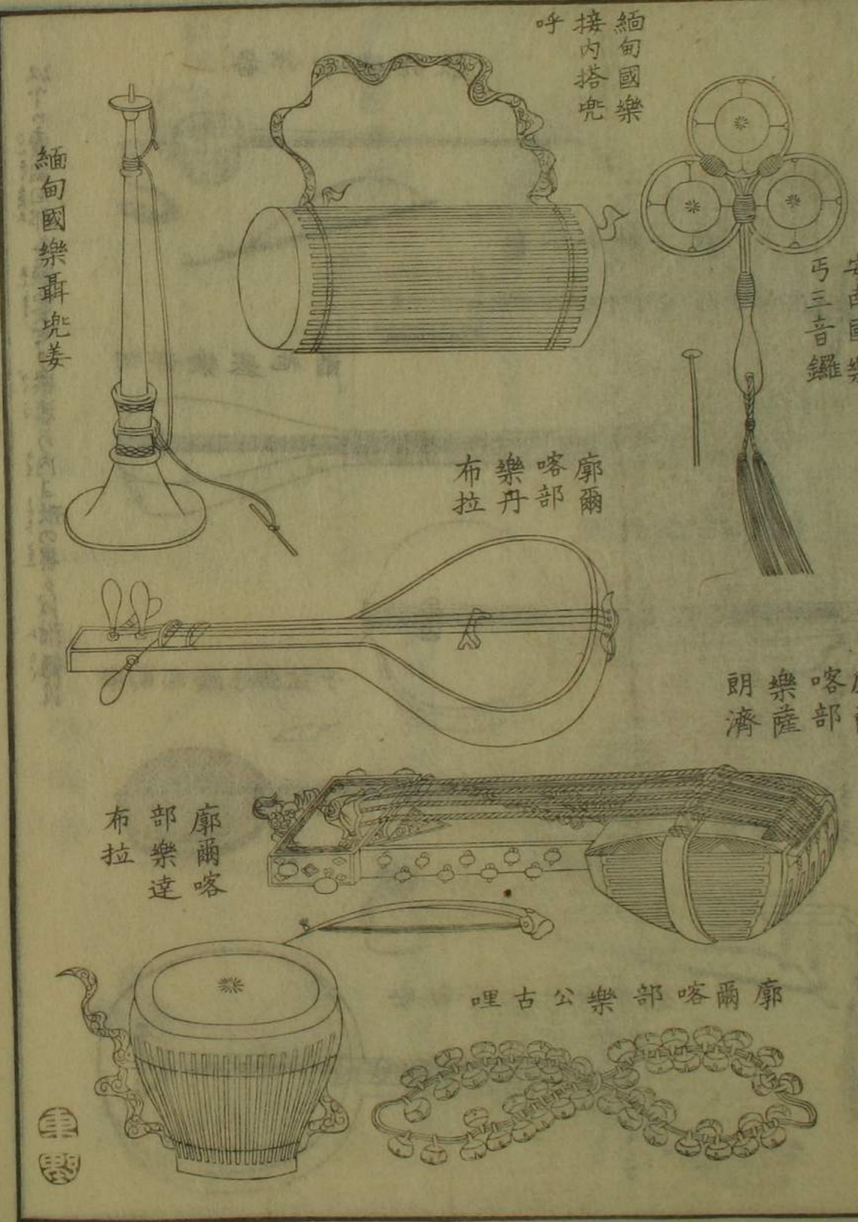
○國の東。もろもろ人廂の後東にあり。直衛さあり。

二堂の職掌は、周禮大司馬の法一則を列朝代の舊物あり。○尚書官濃一人漢一人左右の侍即。濃人漢人各一人兵部署の總官として。中外武職の銓選軍実の簡要を掌る。以て邦政を助く。屬る本武選選吏司あり。乗ら武職の除選封廕及び征伐の訓誥を司り。其政令を頒ち。車駕清吏司あり。驛傳の郵符及び馬の政と掌る。職方清吏司あり。天下の輿図と掌る。其險要を審く。もろもろ功を叙し。過を正す。○武庫清吏司あり。兵籍戎器御禽武群及び戒軍と編查すと掌る。以上の屬せる本兵部と。○揚鑣廟 兵部署武選司の屬せる本あり。

祖徳霊長日孤臣報國年九原終不改両蹄到今傳異
代還祠廟明神儼豆邊關西二夫子家学仰前賢
王士禎
鳴門録

工部署

○國の東。兵部署の南さあり。西さむく。堂の額と敬飾百工さつかさ雜正帝の御書あり。○尚書官濃一人漢一人左右の侍即。濃漢各二人工部の總官として。九天下の工虞器用と掌る。物と制し。材と度り。以て邦事と節屬する本官。營繕司虞衡司都水司屯田司あり。其営繕清吏司。廣儲官。廉政倉。廉政官房の經治過恤と掌る。其外百工と集うる。材木の可否と掌る。陶冶の可否と掌る。孤獨窑の窑器。つつさごく。材木の可否と掌る。陶冶の可否と掌る。孤獨窑の窑器。



度

ものさし
古尺

容量の制のほと律よう変革の変さなんてこれを度りて古尺いまの様を究て分毛様黍十とおくすこれ其十すい前一天なり。今うるいまの様の変こと分毛様黍十を一すとしたがう天の尺すこと古天の一又ふ強今又の七すこ分九釐と古又の九すふ強即黄鐘の長なり工部つぎと制造し忠哲の布政使司ふ頒つ甚厚をる卅縣ふ頒し造し諸準となりて制造し諸天下ふ布施せり。

今尺

權

分銖なり其形圓くして釜のごとをを制其重さ一両なりもの錘様一百に十七分又十八釐八毫二十に毫中但七分に釐に毫又絲に忽九微八纖面但二八分二釐又毫七絲七忽九微二纖高三分又釐又毫八忽二微二纖。

量

即まことなり。陰すほとをを。
容様をこえび。
九一升の方様三十一すふ百分面底方尺す。深一すふ分七釐九毫なり。

○一斗の方様三百十六すふ面底方八すふ深に尺すふ分三釐七毫九絲。

斗

升

嘉量圓制

斛の様八百六十すふ百三十尺分尺百二十釐容斗二升深七すふ二分九釐冪一百十釐容斗九分六十釐冪二百十八すふ九分六十釐二毫。

○斗の様八十六すふ九十三分尺百尺二釐深七分二釐冪九毫。冪一百十八すふ九分八十釐容一又二すふ二分六釐二毫。

○升の様八ふ六百有九分三百四十四釐二百毫深一すふ八分二釐二毫。冪尺百七十二分三十九釐二十毫容一すふ二分六釐二毫。

○合の様八百六十分九百三十尺分尺百二十毫深一すふ九分有九釐二毫冪十七分六十三釐九十分毫容一すふ。命の様冪深の合の半なり。冪と様と分毫なり。

斛

升

合

勺

嘉量方制

すふ法製をなて此ふ器尺工部図方の嘉量各一を制造し一ごとを厳遵の陳様多く厳ふ垂憲尺。

○嘉量の制前を載しを鈔を準とし斗と升とし右の耳とを命とふ其重さ二鈞其多く黄鐘の容一ふ當る。

○一斛乃方様一ふ又百八十すふ口の方二すふ六分底の方一又六すふ七分工部とれを準ふ造ふ鐵をなて様て浮濫の總額と直当布政引ふ頒布政使すふ本なて式のごとく制造し。

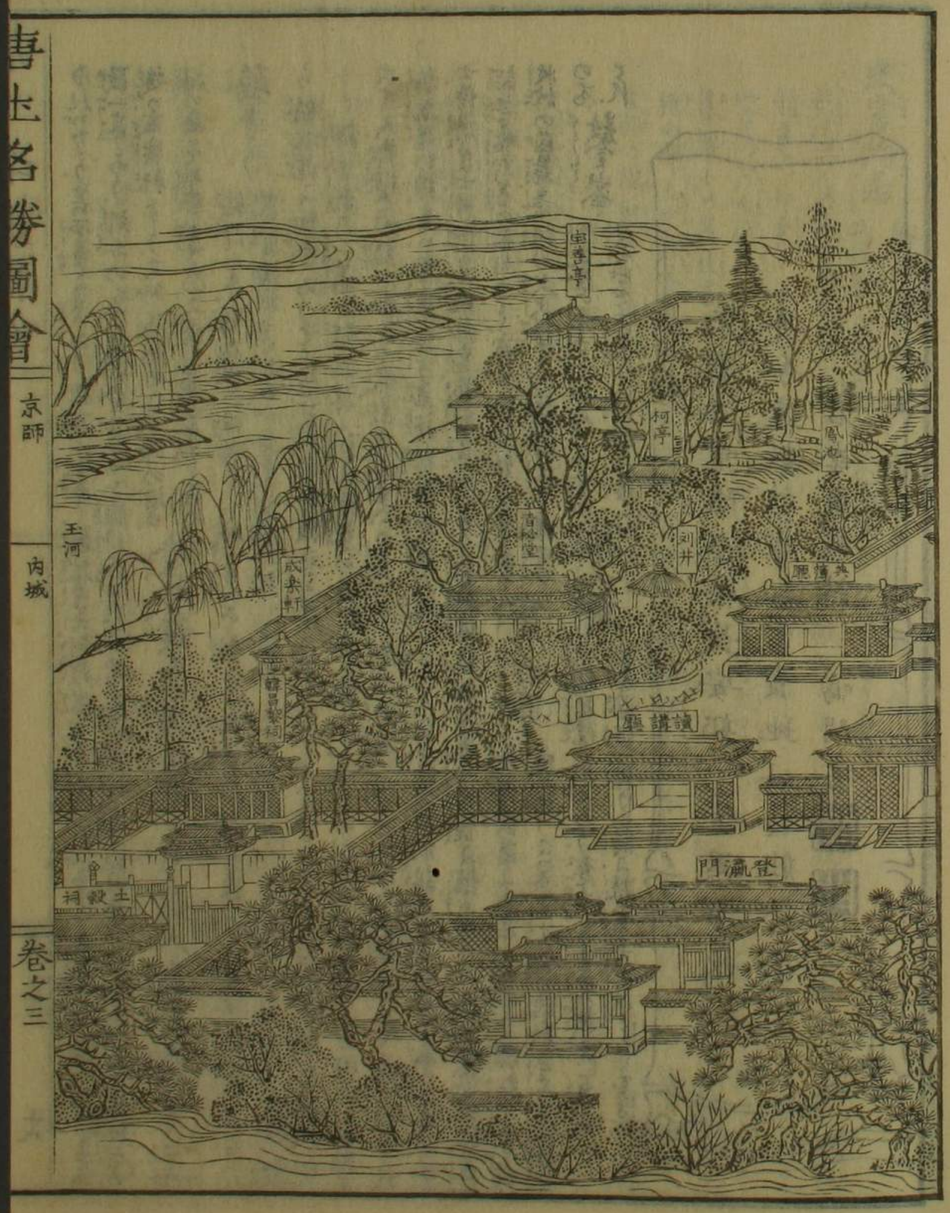
屬ふる府の州縣ふ頒。

倉ふ量の出納ふ用ふる。

斛

二斛を石とふ又石の方様三ふ一百六十すふ。

掌る。都水清吏司、郎中一員、員外郎一員、主事二員、河防橋梁、船政を掌る。其下司吏、筆帖式、庫使、庫副、庫掌、庫守、倉大使、倉副、倉掌、倉守、倉斗級、倉攢典、倉攢、倉夫、倉役、倉匠、倉庫、倉廒、倉基、倉場、倉場侍郎、倉場總督、倉場衙門、倉場衙門官員、倉場衙門官員俸祿、倉場衙門官員俸祿表、倉場衙門官員俸祿表、倉場衙門官員俸祿表



翰林院署



采菜王堂陰分蚕長安郭一勞累百枚
再分連數箔寧知富貴地此物能沃若
右李東陽詩 鳴門書 陽

史館所居

翰林正廳の西にあり。いにしへこれを第三廳と稱し。翰林院を統理の司とせしとぞ。

乾隆癸巳の年に庫貯書の籍を開き。翰林院を始めとして。武英殿と縮写の不足を補ひ。殿板の籍。館書の外。普く天下に訪ひ。翰林院を始めとして。歴代の逸書を集め。此書の中。明代永樂を專ら出て。今乃世に絶えたる。奮輯しめ。其の佳書は類詞を編ひ。其卷の首に冠らしむ。且此部の條目は。歴代の增異まり。經の部。九十數。易書詩禮春秋樂。各經に書總經解小學等なり。其の數の中。歴代の儀注をもちひ。又小學數の中。八法をかけ。各々部の義例を入。史部十三數。正史編年詔令奏議別史雜史傳記。史鈔載記時令地理職官政書目錄史評等。子部十四數。儒家兵家法家農家醫家天文算法術數藝術譜錄雜家類書小說釋家道家等。集部五數。楚詞別集總集詩文評詞曲等。各部次第。圖書の文淵閣盛京の文淵閣等の庋に庫ありて。其の中より。抜きむれて。大内と圓明園とより抽きむれて。編纂十二年を經て功を

○雍儀衛外駕庫 東長安門の外。小營の東。

雍正帝御書の額を宣化遞方とす

尚書侍郎滿人二人左右侍郎滿人二人。額外侍郎蒙古一人。漢人二人。掌儀衛外駕庫。

不旗纛鼓吹鳥槍弓矢刀楯甲冑等の封貯。會同四夷の供張。各部院衙門の陳設。及び內外官員の公服朝珠等の造辦。及び內廷供奉の鞍轡。凡國家の儀制。

○鑾儀衛外駕庫 東長安門の外。小營の東。

雍正帝御書の額を宣化遞方とす

尚書侍郎滿人二人左右侍郎滿人二人。額外侍郎蒙古一人。漢人二人。掌儀衛外駕庫。

不旗纛鼓吹鳥槍弓矢刀楯甲冑等の封貯。會同四夷の供張。各部院衙門の陳設。及び內外官員の公服朝珠等の造辦。及び內廷供奉の鞍轡。凡國家の儀制。



堂子

堂子滿洲用
神之祀所也
滿洲之風俗
國家事天之
禮與拜天之
禮不異堂子
有二門一門
内大臣奉安
玉祀一門武
職官員各隨
其品級而入
内大臣堂子
之祀殿之後
祝詞跪讀如
儀滿洲用國
語祝詞之後
又滿人譯漢
文祝詞而讀
之其詞曰
天生
聖主
統理
萬邦
誕膺
景命
敬
天勤民
文武
兼資
德威
並著
中外
一家
薄海
内外
咸來
臣服
謹
率
王公
大臣
恭
祀
天神
伏
祈
垂
祐
聖躬
萬福
金
甌
永
固
國
祚
延
長
云
云
祝
畢
行
三
跪
九
叩
禮
禮
畢
皇
帝
還
宮
王
公
大
臣
各
退
出

長安左門の外玉河の東にあり　順治元年こゝを建る街門小さゝかに内門は西に向ひ中に殿一宇南に向ひ大内致祭の立杆石座を設く其前後両翼に各六杆の石座とあり其次く親王郡王異動更代の時祭告の礼を行ふ凡歳に元旦并に朔日大内より皇帝を奉迎して此に至り祝文を読む

○照忠祠　玉河橋の東南にあり

○雍正帝御製の碑あり

○安郡王府　墓基

○裕親王府　照忠祠の西

○慶郡王府　墓基殿あり

○太僕寺署　橋の東にあり　勤字天育と云る額あり　雍正帝の御書なり

卿官滿人漢人各六名　卿滿漢各一名を總管として両翼牧場馬と掌営哨の政を総べ

齊ふ廳あり左右の二司あり左司は駝載騾駒牝牡の別を掌り右司は牧場馬匹の盈虧を稽察し印牘をつかさどる

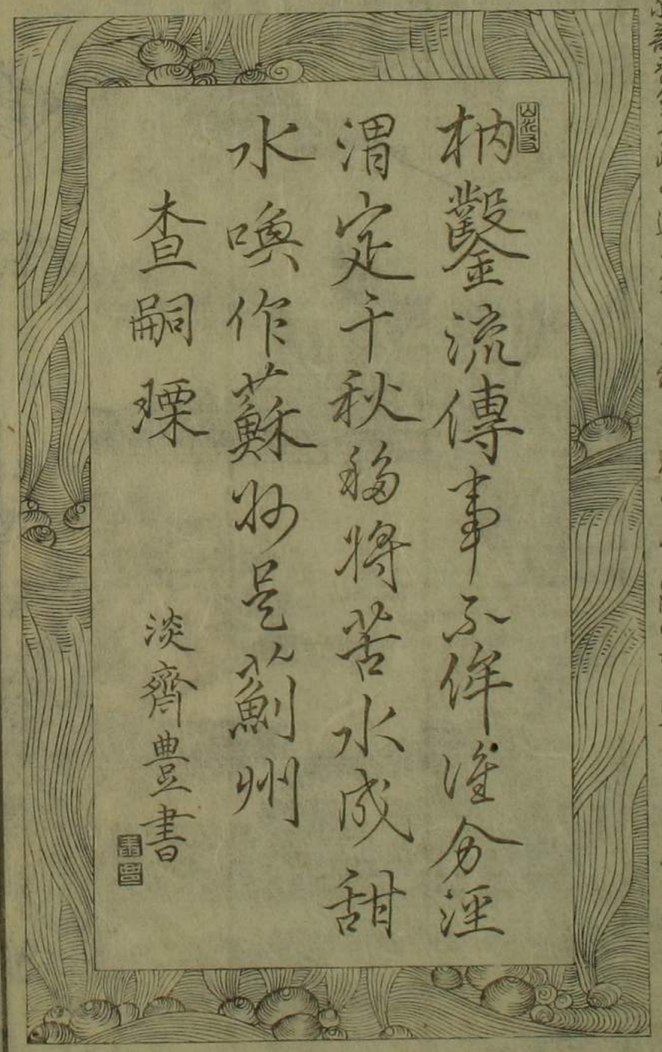
○肅親王府　南玉河橋の東にあり

崇文門　内城南面左の門なり　元代文明門と云ふ　哈達王の府あり　依て名く　門の正統間重修し即隊文華が碑あり　寺内又後門の滄漸親書の像あり　明代内府より出

○靈濟觀音寺　観音寺の額あり

○總督倉場公署　張滿胡同にあり。雍正帝御書の額あり。濮儲九數ふ。

○苦井　蘇州胡同の内、麻線胡同三元巷の右にあり。此水の若き味を泡せんとて、正月元日の晨、此水を汲みて、俗の謂ふのみと汲易やうく此を汲て、井の中へ、酬水をこの井の中へ、酬ふるふ詩するうる此の通り書して、酬ふるふ詩するうる此の通り書して、



○大石橋　崇文門内の東南にあり。其ふるい泡子河橋なり。○泡子河　崇文門の東城溝にあり。○流水汗れ雨うとうたがひいろくへる裙の裳をとりやくへ心糸師の歌の若きふ。徳勝河より二三里が間車の塵土の数の置きも見聞と閑寂な情地なる小猟客の此と駕を駐るの稀なるぞうふれ柳泡子河の風色なり。まろぐ小を顧ればと天墓雲深く峰々、河の両岸なる巨樹垂柳いやうえ生茂り、清き流との澄きたる小舟の数艘を浮べて、蓼蘆のむらしとそりやまてお呂ふ者の神と祈りて、蓼をもふ其蓼のさまようふ、吾幼をひくよ累へて弱へありとひ給へふれ、よりて歳の終りの日、都下の男女老幼皆こ泡子河に浴で、垢を祓ふ者路群をなせりいふるの爰をやらんと欲ぐ。○華厳禅林　呂公堂の南にあり。○関帝廟　呂公堂の南にあり。○大清宮　呂公堂の南にあり。即ち内府の

つくり。

めり濁へ、岬の多層の回廊仰望靡流ふ。

肉蔚ふ金を鍍ひ獅子の三皇の像を祀り岬を安置へ、額をを掲ぐ。

○観象臺　城の東南の隅楼端のよふあり。観象臺の如きふ。

了孫要すしが年月を経るや脆み欠へ、通儀地平経儀地平緯儀紀限儀等の六儀を御製あるふ舊儀より歩て基よふうふ且其舊儀より歩て基やふ納て今ふ在せり。同五十二年又地平経儀を制へ、乾隆九年又機衡撥辰儀を制へ、共り基上つふ祢て天度と測量ふ。又天同半あり。一名順風旗。其制玄象の上ふ濫施二十八宿あり。天の二十八宿ふ象ふり。元測候の法。漢の張衡漢候者ふ。人天文せすんば人基の仁方ふ考て天象を考観風雲気流星ふの消息を察へ、乾象と称へ、乾象と称へ、乾象と称

泡子河源

泡子河居八旗之後人家無多物而甚潔向北稍折而東長一弓餘泡子河之水面之濶大約如是深淺不可測兩岸楊柳夾植其間

觀象臺

關帝廟

呂公祠

王皇閣

十方寺

泡子河

河源有二南源出自南苑一出京西玉泉山諸泉匯流而東北行至海淀與北源合流東北行至高梁橋西折而東北行至德勝門西水關入城

不逐市塵外
泓然別有天
石橋將盡岸
春雨過平川
双關晴分影
千樓夕起烟
因河名泡子
悟得海無邊
明陸啟

泡子河橋

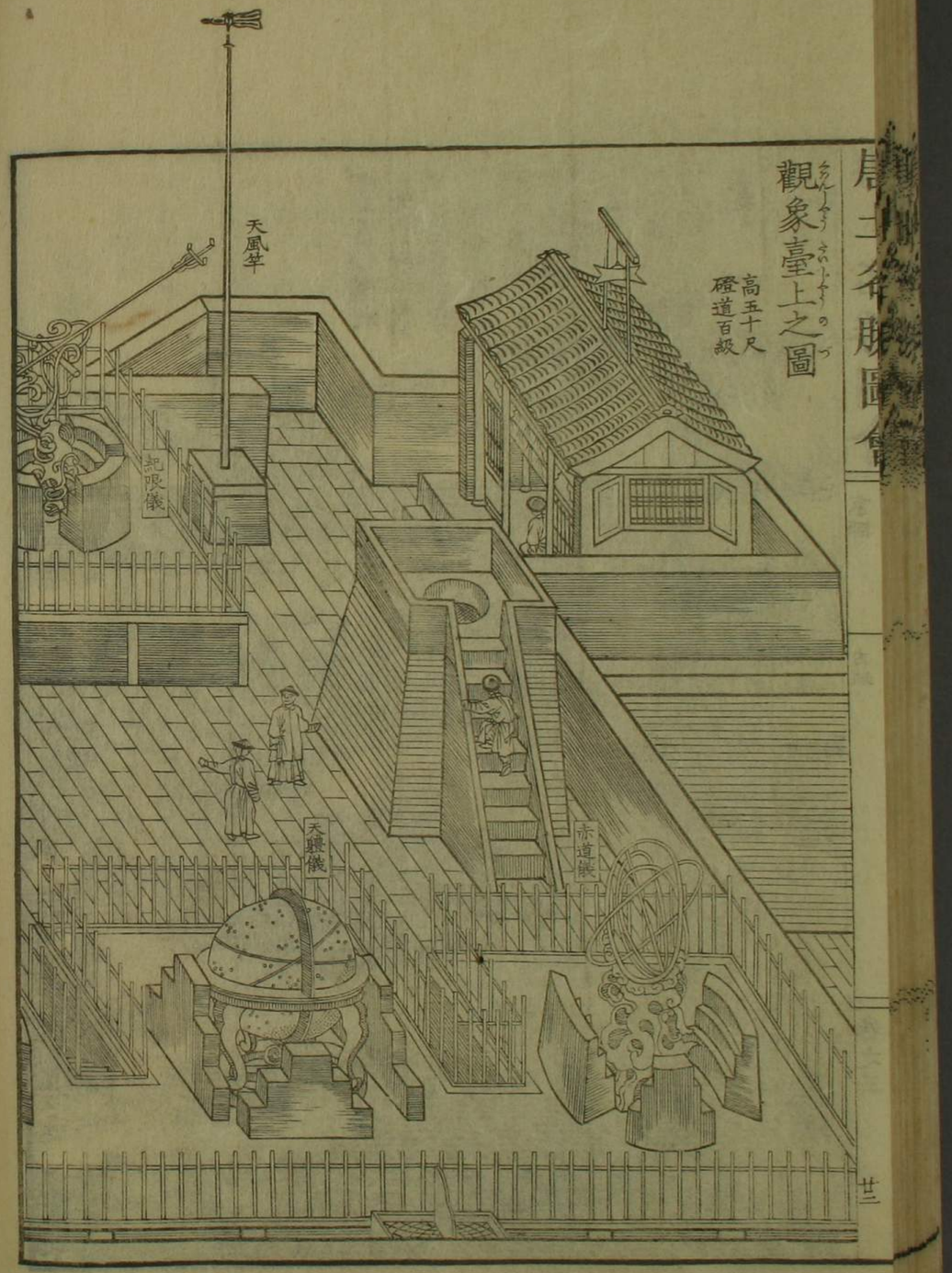
華嚴寺

居家園

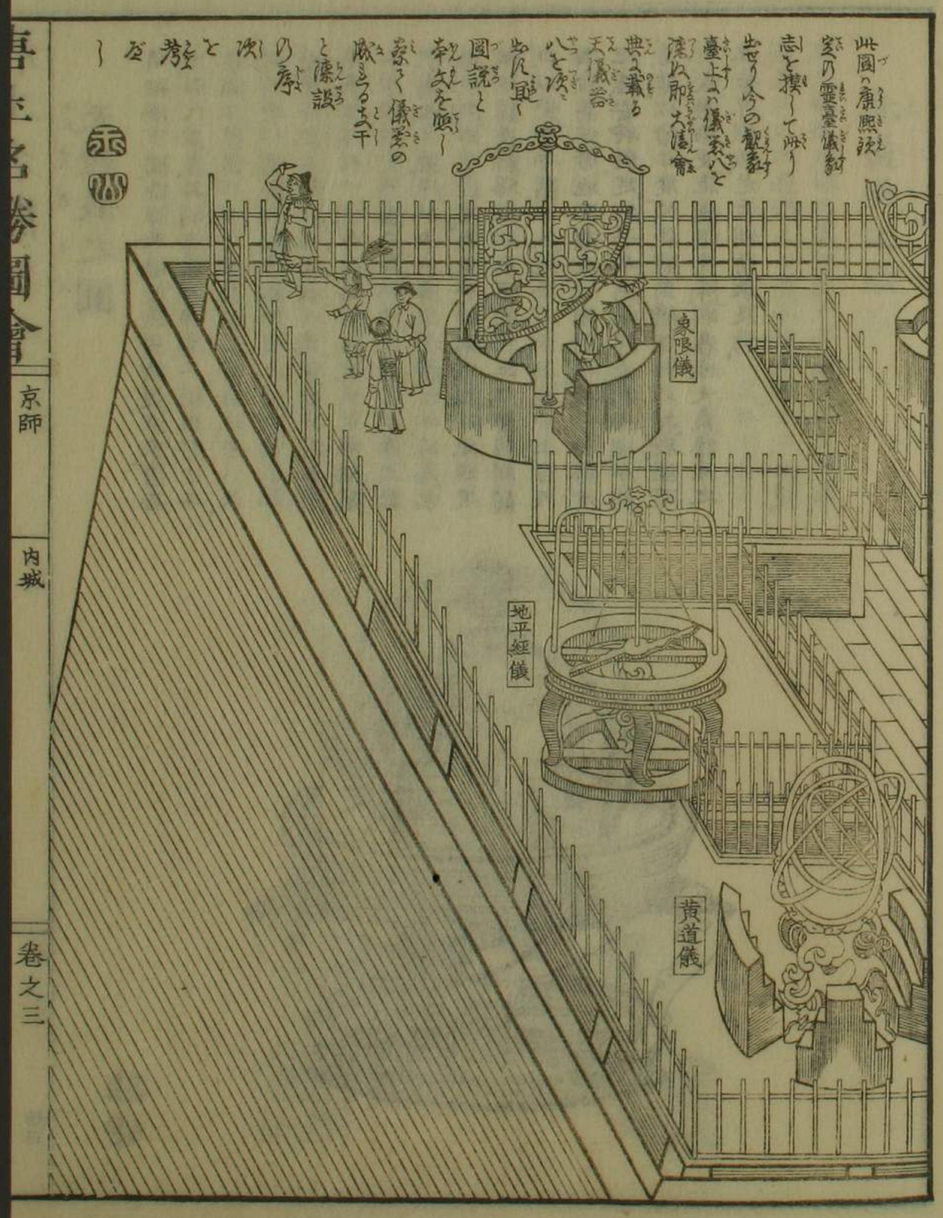
觀象臺上之圖

高五十尺
磴道百級

天風竿

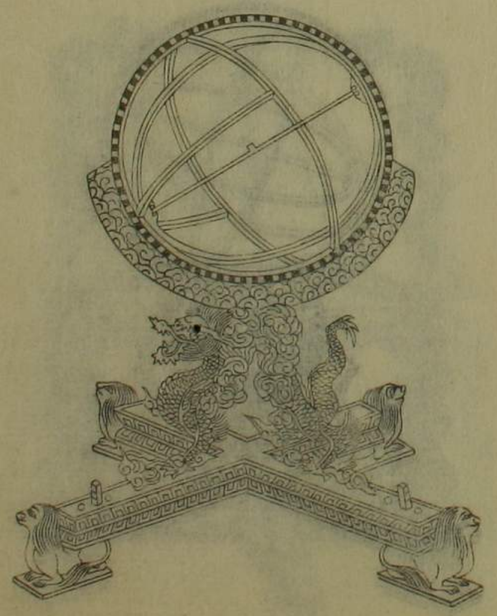


此圖の康熙汝
窓の靈臺儀制
志を摸して作り
出せり今の觀象
臺上の儀器心と
深く即大漢會
典の義ち
天儀器
心を淡く
出だ題
圖說と
本文を照
察く儀器の
成らるを干
と深設
の序
次
と
考
ふ



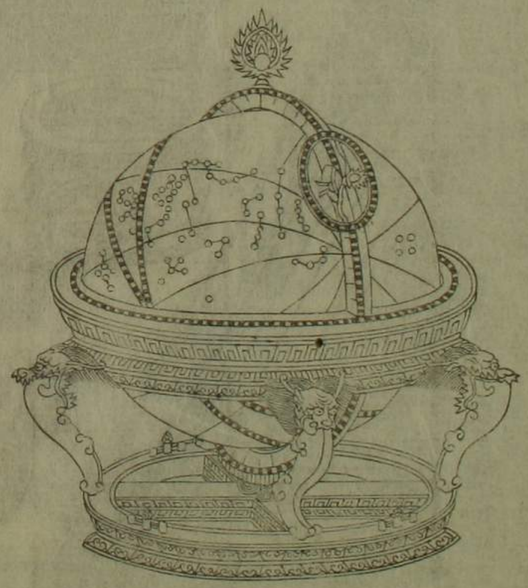
赤道儀之圖

渾天儀制為儀三重外曰六合儀次內曰三辰儀最內曰四遊儀凡七圈本朝康熙十二年製赤道經緯儀三重凡三圈蓋合三辰於六合而又省一地平圈也其外正立為子午圈外徑六尺一寸兩面皆刻去極度數京師天頂距北極五十度五分北極出地南極入地各三十九度五十五分兩極側面各安鋼軸以半圓合而固之距兩極各九十度橫直赤道緯圈外徑五尺九寸內規面及上側面刻周天時刻外規面及下側面刻周天度分又自南極兩旁承以兩象限弧使不傾墊次內為赤道經圈外徑五尺六寸四面刻赤道緯度貫於南北極之兩軸其內又為通軸徑一寸中半安橫表長三寸赤道上設遊表對直軸以測赤道緯度經圈上設遊表對橫表以測赤道緯度其下為半圓雲座以龍架承之



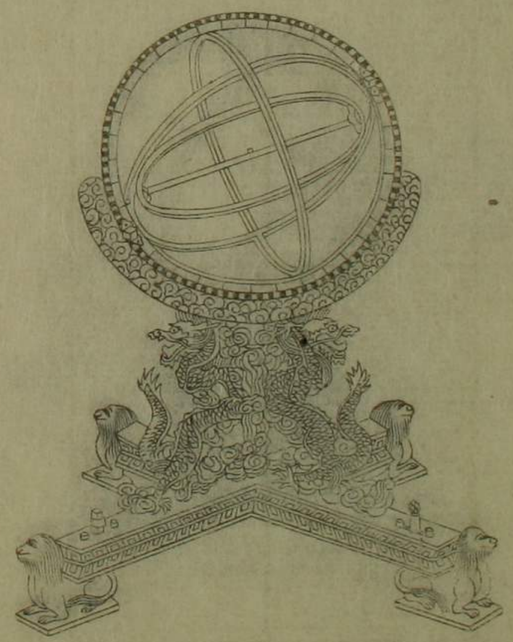
天體儀之圖

漢初洛下閎造渾天儀後漢張衡製渾象隋志云渾天象者其制有機而無衡本朝康熙十二年製天體儀即古之渾象也鑄銅為球徑六尺兩端中心為南北極以鋼軸貫之面刻黃赤二道平分十二宮布列星漢以肖穹象其外為子午圈徑六尺一寸兩面刻去極度東面兩極開半圓孔以受天體之軸列以半圓合而固之其下為地平圈徑與子午圈等面濶七寸用為水渠外刻四象限度及地平時刻方位下施四足承以圓座設螺柱以取平南北正中嚮西開闕口以受子午圈半入地平下半出地平上自天頂設高弧帶地平遊表以■諸曜地平經緯度北極安時盤定於子午圈設遊表於極樞令能自轉以指日度又能隨天體旋轉以指時座下又設機輪使北極能升降則各地天象隱見之界皆可瞭然尤古制所未及焉



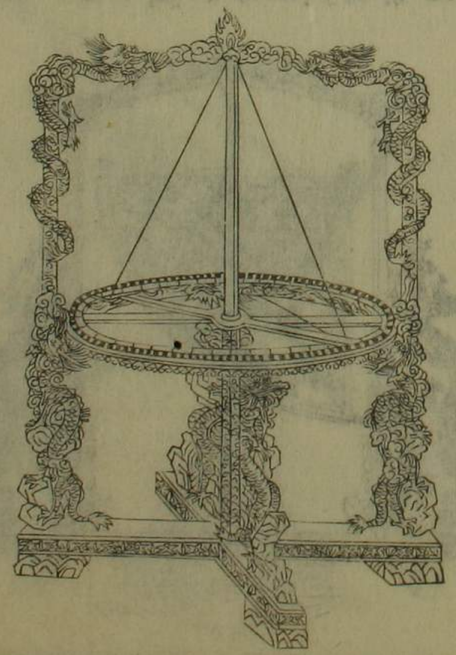
黃道儀之圖

渾天儀制有黃道緯圈而無黃道經圈本朝康熙十二年製黃道經緯儀三重凡四圈其外正立為子午圈制與赤道儀子午圈同次內為過極至圈外徑五尺五寸規面濶二寸三分側面厚一寸一分兩面皆刻去極度數貫於南北極之兩軸以象天之左旋距赤道極二十三度三十一分三十秒為黃道極距黃極九十度橫置黃道緯圈其徑及濶厚皆與過極至圈等四面皆刻黃道經度以象七政之右旋又次內為黃道經圈外徑五尺一寸四分規面濶九分側面厚二寸三分四面皆刻黃道緯度以鋼軸貫於黃極以象黃道之四遊而極安直軸徑一寸中半安橫表長三寸緯圈上設遊表對直軸以測黃道經度經圈上設遊表對橫表以測黃道緯度其下為半圓雲座以龍架承之



地平經儀之圖

渾天儀制有地平圈能測三辰當地平之經度而不能測地平上之經度本朝康熙十二年製地平經儀平置地平圈外徑六尺二寸濶二寸四分厚一寸二分上面側面皆刻四象限度上面自南北起初度側面自東西起初度東西設通徑下設圓盤四面以立龍承之地平圈之下中心安立柱高與地平圈等適當地平圈之圓心上出圓軸地平圈之上東西植二龍柱結為橫梁中心開孔下與圓心相直中間安立表長四尺四寸上應天頂下應地心立表之末結十字橫表與地平圈相切長與地平圈全徑等立表中空上下設倒正小圓柱頂開一孔旁開二孔中結直線斜貫於橫表之兩端成兩三角形凡測日月星無論距地平上若干度但將橫表推轉令三線與所測參直視橫表所指度分即得各曜之地平經度焉



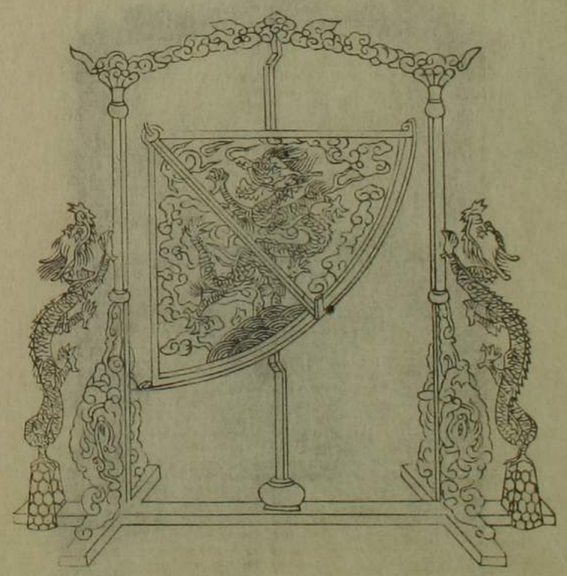
紀限儀之圖

諸曜在天之度。赤道經緯。以南北二極為宗。黃道經緯。以黃極為宗。地平經緯。以天頂為宗。至於兩曜斜距之度。古無測器。本朝康熙十二年。製紀限儀。亦名距度儀。其制一弧一幹。弧為圓周六分之一。通弦六尺。面濶二寸五分。中至兩旁。各列三十度。幹為圓之半徑。長亦六尺。幹末安柄。以便推移。半徑上端為圓心。設立柱以安遊表。長與半徑等。遊表之末。設立耳為測一曜之用。弧背左右各設窺表。為別測一曜之用。又於幹之兩旁。設兩立柱。相距應弧背之十度。以為借測之用。儀面聯以流雲。背安樞紐。可使低昂。承以半圜周施輪齒。可使平側。其下立柱。入於儀座。可使轉旋。而凡兩曜相距之度。皆可測焉。



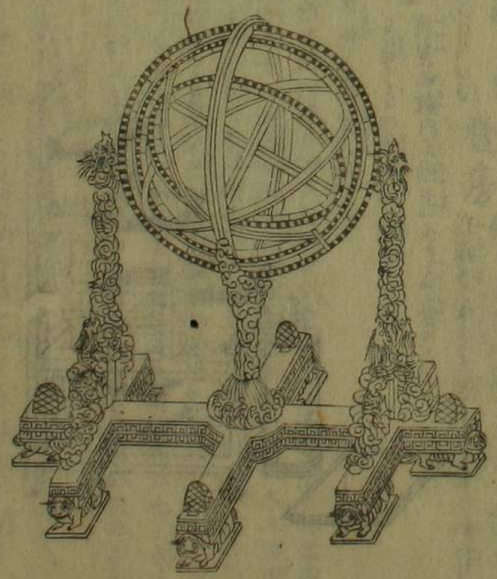
象限儀之圖

渾天儀制。有地平圈。而無地平經圈。元郭守敬簡儀。設立運圈。以測三辰出地之度。即地平經圈也。本朝康熙十二年。製象限儀。為全圓四分之一。亦名地平緯儀。其制上正方角。為圓心縱橫兩邊。皆為半徑。各長六尺。濶二寸一分。厚一寸一分。象限弧濶二寸六分。厚一寸一分。正面刻九十度分。外規面刻度數字。其數自上而下者。以紀地平高度。自下而上者。以紀距天頂度。中間聯以雲龍。背面正中。為立軸以運之。立軸與儀之直邊平行。長九尺七寸。濶二寸一分。厚一寸七分。圓其兩端。東西立柱。高九尺四寸。上下為橫梁。濶七尺八寸。飾以雲龍。正中設圓孔。以受立軸。東西運轉。圓心安橫軸。長一寸三分。軸本安遊表。濶二寸一分。厚三分。長與半徑等。遊表之末。設立耳。以測地平緯度。較之全圓尤便焉。



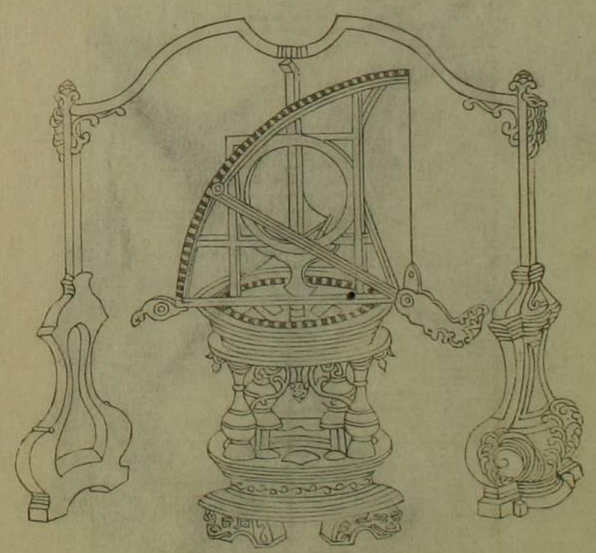
璣衡撫辰儀之圖

虞書舜典在璿璣玉衡以齊七政孔疏曰璣衡者王者正天文之器漢世以來謂之渾天儀者是也乾隆九年御製璣衡撫辰儀徑六尺其外即古之六合儀而不用地平圓正立子午雙環為天經兩面刻去極度數以雲座承之北極出地三十九度五十五分天頂距北極五十度五分距而極九十度結赤道單環為天緯兩面刻周日十二時九十六刻以龍柱扶之次內即古之三辰儀而不用黃道圈兩極綰赤經雙環兩面刻去極度數中要結遊旋赤道兩面刻周天度分以象七政之運行最內即古之四遊儀通徑設直距中心施窺衡以測七政之經緯架座施螺柱以取平天頂施垂線以取正體制仿乎渾天之舊而時度倍為整齊運量同於赤道新儀而重環更能合應至用遊表窺測則上下左右無不宜焉



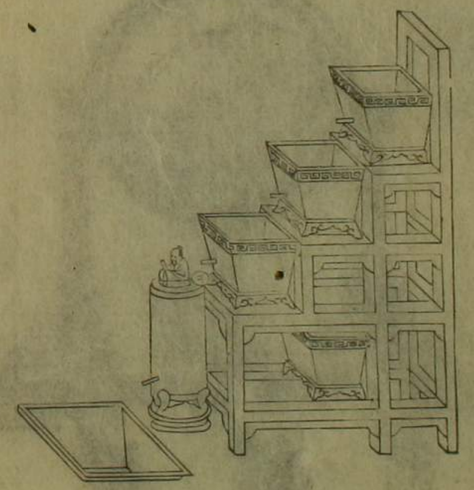
地平經緯儀之圖

康熙五十四年聖祖仁皇帝命監臣紀利安製地平經緯儀合地平象限二儀而為一其制平置地平圈外徑五尺濶七寸七分周圈刻四象限度下設四柱以圓座承之地平圈之中心倒安螺柱上出立軸東西安立柱高一丈一尺上結曲梁正中開孔以容立軸之上端中間安象限儀圓心在下半徑六尺弧濶二寸七分正面刻九十度中聯方圓及弧矢形背面結於立軸以運之圓心安遊表長八尺本設橫耳末設橫柱以備仰窺凡測諸曜將象限儀推轉又將遊表低昂令與諸曜參直則橫半徑所指即地平經度遊表所指即地平緯度是一測而經緯悉得矣



漏壺之圖

隋志云黃帝創觀漏水制器取則以分晝夜其後因以命官周礼挈壺氏則其職也宋志有求壺覆壺慶壺建壺及平水壺之制本朝因前明舊制播水壺三形方承以木架上名曰天壺即宋之求壺水欲常滿上濶一尺九寸下濶一尺三寸高一尺七寸次名夜天壺即宋之覆壺次名平水壺高濶皆遞減一寸分水壺一如平水壺之度置於平水壺後稍下即宋之慶壺受水壺一形圓徑一尺四寸高三尺一寸置於架前地平上名萬水壺即宋之建壺播水三壺前面近下皆有龍口以次漏於萬水壺平水壺後面近上開孔洩於分水壺以平其水而均其漏萬水壺蓋安銅人抱時刻漏箭下安箭舟浮於水面水長則箭上出周日水盈箭盡則啓其下口洩之於池而時刻復起午正壺安室內各設水蓋龍口小管以玉為之



尚委く考ふるに齋漏〳〵てこれを委ぶ其の餘の細事ありて冊子に記し〳〵て納る而已嘉平二月朔日上諭之儀。

歲元日寅の魁罡の刻をもて祝る方角をとるし皆司天監官人をして方角を考て奏聞せしむ。其祝る方を考ふるに其年の干支の偏旁を許てこれを定め又彩ある外圍を冊封をとる例なり。

○京師直省及び蠻方の郡縣朝鮮等の日月出入の時刻小極出地の度數を計節氣乃平晷八表の圖晷景を測るの圖を除て其製と記を。

周礼考工玉人土圭尺有五寸以致日宋史云何承天始立表候日影前明觀象臺下設晷影堂南北平置銅圭於石臺上長一丈六尺二寸濶二尺七寸周設水渠以為平準南端植銅表高八尺上設橫梁用影符以取中影清朝加二尺表高一丈上端安銅片中開圓孔徑二分午正太陽之影自孔射至圭面成橢圓形南界為日体上邊之影北界為日体下邊之影北界為月体下邊之影京師夏至之影長二尺九寸四分八厘是為最短過此則漸長冬至之影長一丈九尺九寸四分是為最長過此又漸短因圭長不及長影之數又於北端設立圭高三尺五寸冬至之影上立圭二尺七寸四厘用以比例太陽高亦同於平圭之比例焉。

○貢院 俗の系隅貢舉甚の西ゆえあり。科舉の間貢擧とよぶ多曆ゆえありて地名となれり。

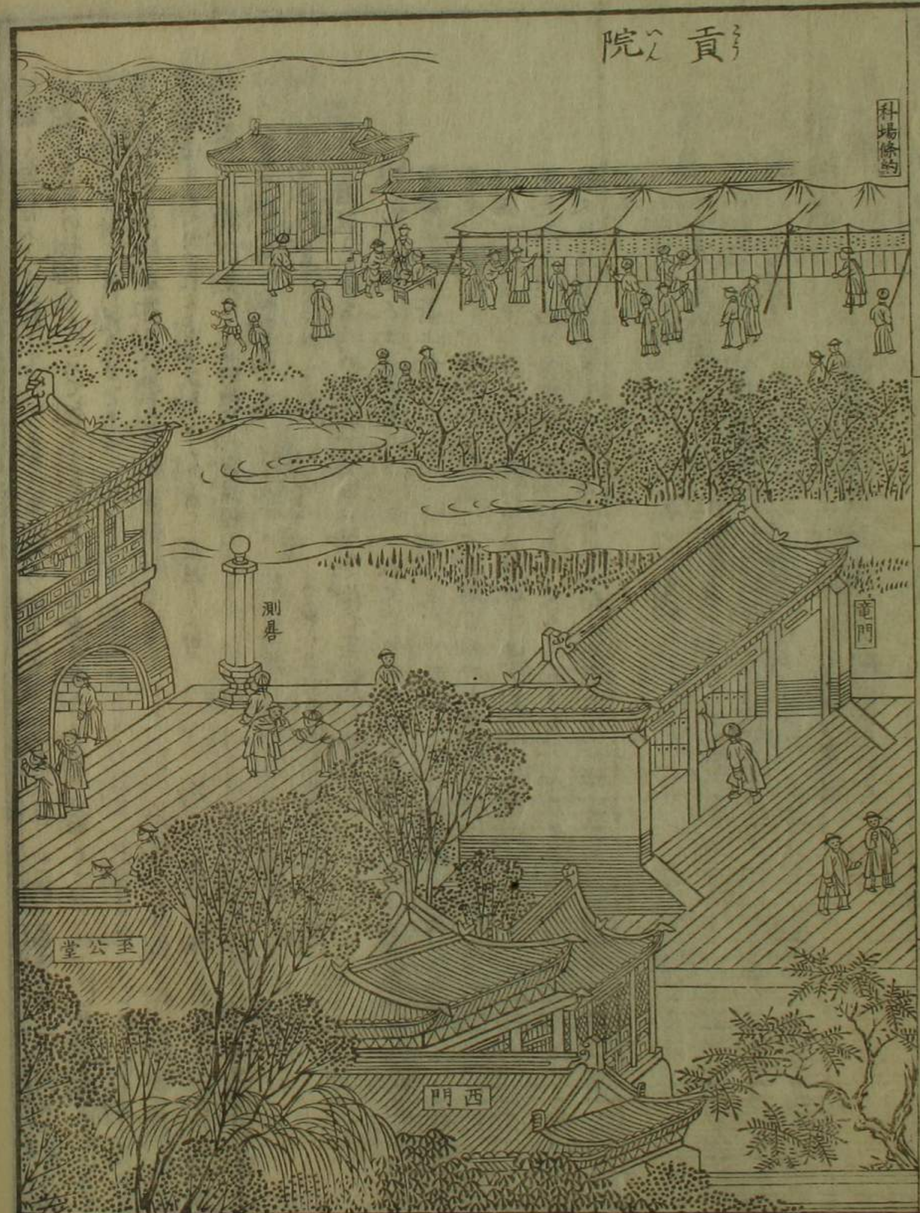
九年帝貢院に御幸ありて士子に詩賦を試給ふ。今其題を傳ふ。

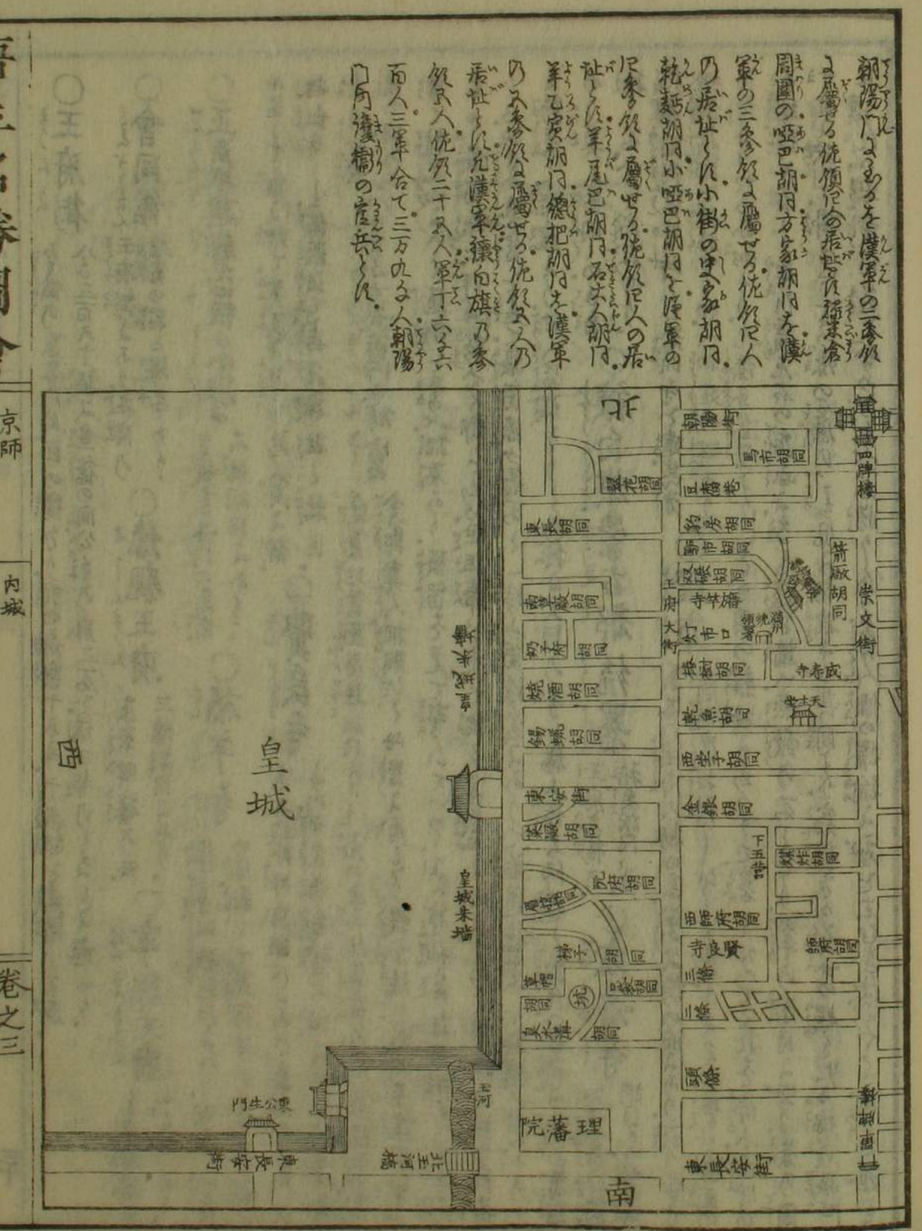
路に石を敷〳〵て刻ざるのうちに物さむ。

て石徑の間に刻ず。

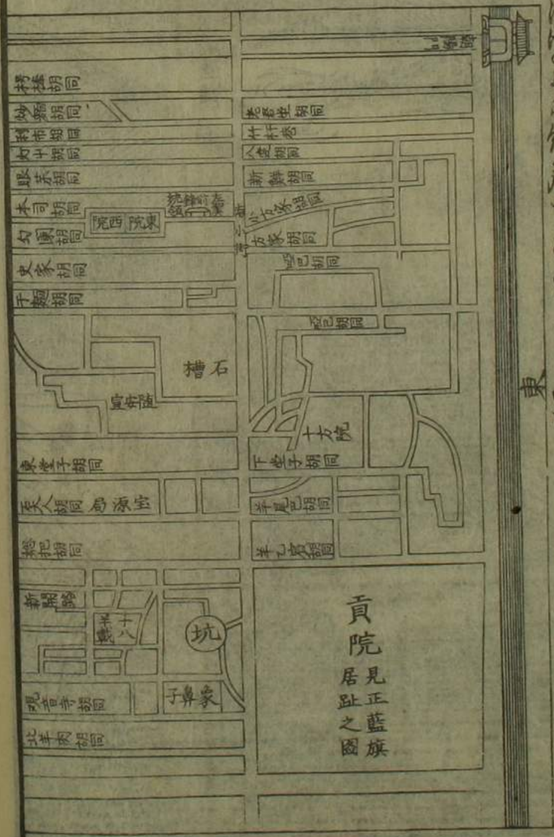
○正藍旗護軍統領署 内城鎮撫司の西にあり。


明遠樓
官學


貢院
升場條約
測量
龍門
至公堂
西門



翻陽門よりもろを漢軍の二參佐
と屬する佐領七の居址なれど漢家者
周圍の噉巴胡同方多胡同を漢
軍の三參佐と屬ぜる佐領八人
の居址なり小街の東多胡同
靴廠胡同小噉巴胡同を漢軍の
正參佐と屬ぜる佐領八人の居
址なり羊尾巴胡同石大人胡同
羊毛寶胡同鏡把胡同を漢軍
の二參佐と屬ぜる佐領八人の
居址なり元漢軍鑲白旗の參
佐領八佐領二十五人軍丁六千六
百八三軍合て三万九千八人翻陽
門内護衛の官兵なり



以上五ヶ大門内正藍鑲邊の界なり以下と翻陽門内鑲白旗の漢軍の居址なり

鑲白旗居址　この旗を撫ろ者城の根よりもろもろ

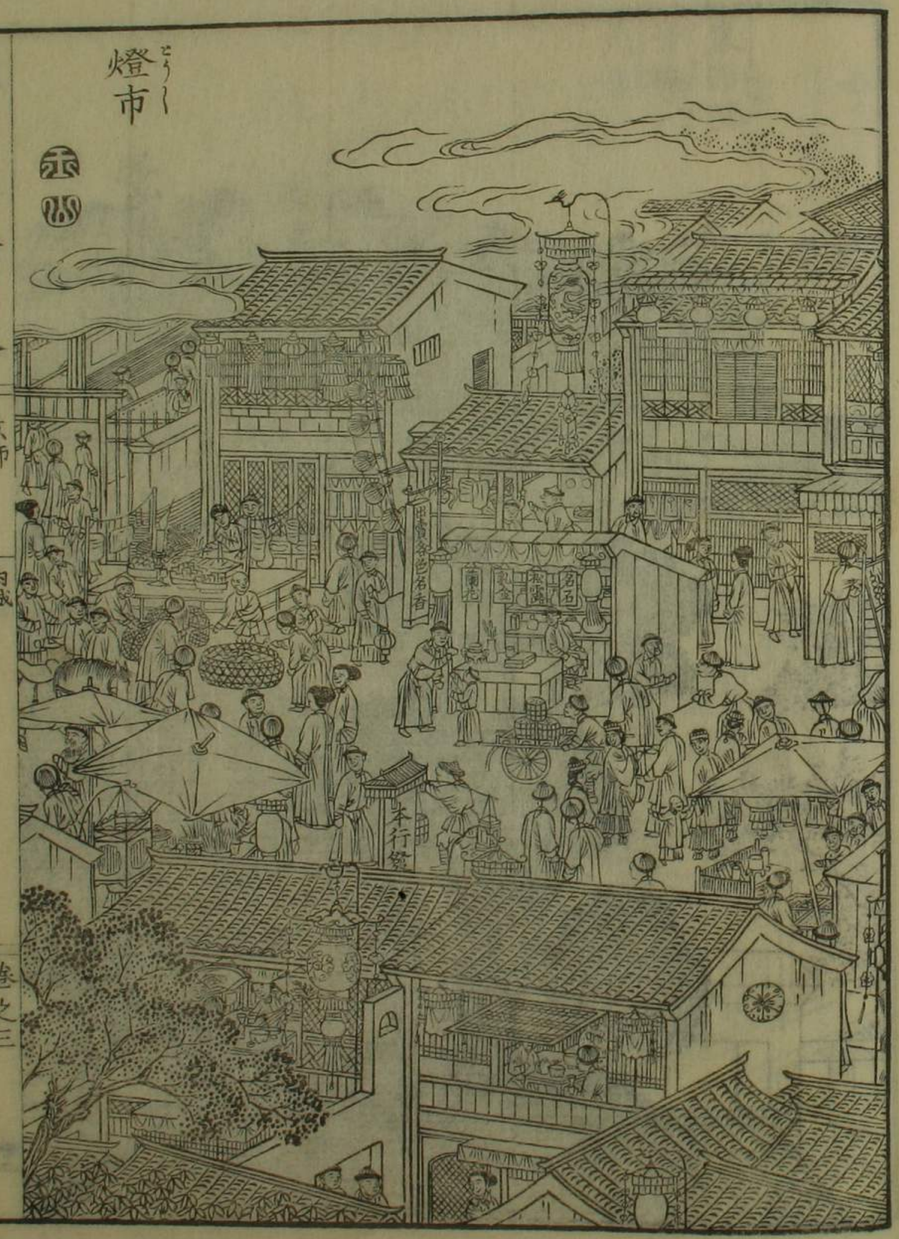
佐領の居址を分てり。東長胡同より大街まで
佐領十七人の居址なり。統府胡同より長安街牌樓
東長安街の南迎壁前胡同まで兩胡同は、東長胡同
佐領十八人の居址なり。長安街牌樓より東向
北へ燒市口大街の西口より永定門牌樓大街を南へ
府胡同頭條二條三條の胡同を濱洲の二參領と屬ぜる佐領十二人
上に八軍丁三万六千三百人分
○定門牌樓より南へむひ大街
と沿ひて東へ曲る胡同はよつて東
と、當右の四參佐と屬ぜる佐領
十二人の居址なり。曲る胡同より
單牌樓まで西へ曲るまでと燒市口
の二參佐と屬ぜる佐領十二人
の居址なり。元當右の濱洲の二參領と屬ぜる佐領十六人の居址なり。
參佐二人佐領二十五人軍丁七
千三百人なり
○定門牌樓より東へ曲る小街
まで。漢軍の領參佐と屬ぜる佐領八人の居址なり。小街より

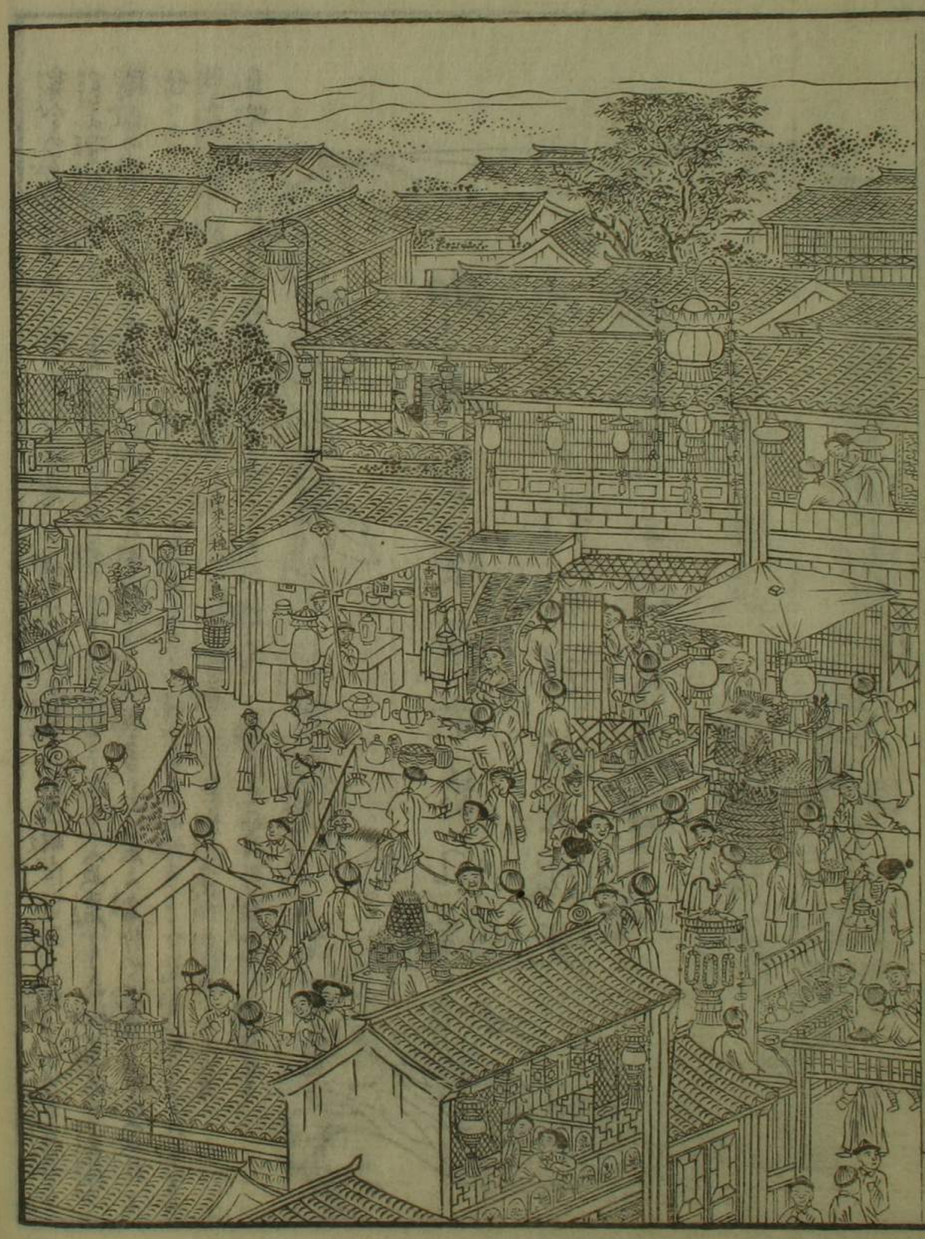
○王府街　皇城の東安門外、南の衙より、府の永樂十五年、十王邸を建遷じ給ふ屋八百三百八十棟、又皇徳の同公主の府三所を、諸王邸ありしころ建つ。

○會同館　王府街よりあり、在京の藩客の宿る驛亭なり。○豫親王府　東單牌樓の西、三條胡同よりあり。○寧郡王府　東單牌樓の北大街にあり。

○正藍旗覺羅宗學　皇城東安門の東南、大院胡同よりあり。○黄良寺　東安門外、柳巷胡同よりあり。雍正十二年、世宗憲皇帝御製の碑、及び乾隆帝御筆の心經あり。○燈市　東安門王府大街の東、北の方より西へ、二里許が間、両廊にお粥・雜物・ひやし物売の店あり。○燈市口用の雜物、ふるまでを悉く備へてこれを鬻ぐ。東門の北、燕飲の石ころ橋を構へ、燕飲の石ころ橋を構へ、燕飲の石ころ橋を構へ

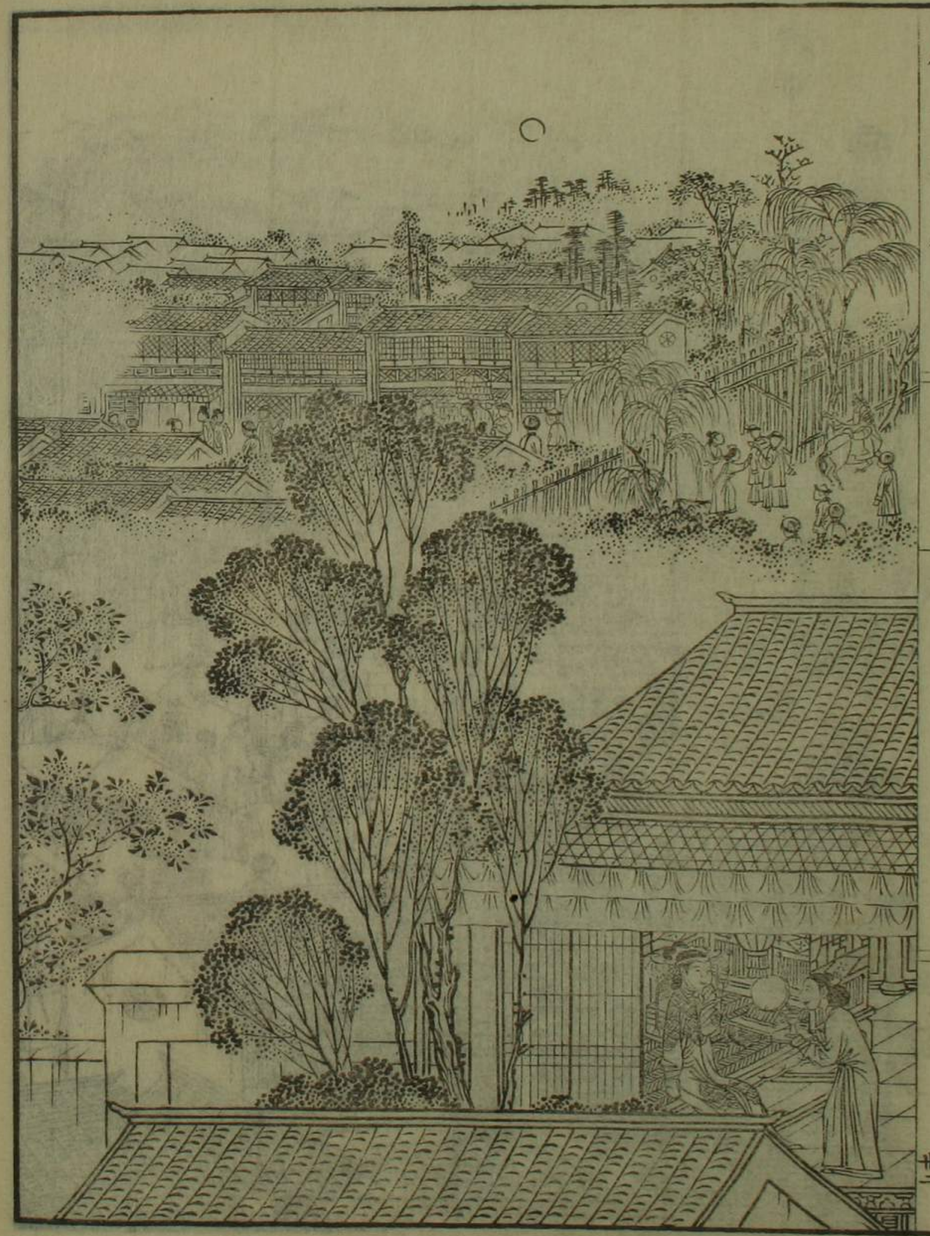
燈市（とうし）





東西院青樓之光景





○法華寺　豹房胡同のあり。明の景泰年中大監訓通らの奉命ら宅地を捨て建る所之天啓間発行置書と編入の学士葉向高の碑あり。

都統署　○正白旗漢軍都統署　共の部房胡同のあり　○鑲白旗護軍統領署　磚市胡同のあり　○鑲恩寺　磚市胡同のあり。寺内之大鐘一あり。昭宗寺のまと称る天啓の間寺号と昭宗寺といふ。大鐘の其ころ鋳る小鐘一あり。鞍鼻胡同のあり　○鑲白旗漢軍都統署　○左翼宗学　炸子胡同のあり　○正藍旗漢洲学古　葉赫坊之東院本司胡同のあり。本司ら北数坊之永陽の倡家那月あり。○東西院　東西院編めて数坊之謙し。色の宣泰院の遺えなり。其東院の妓女の隠れ名て藉と。西院の妓女琵琶ころあり。燕飲のる者と月く燕飲をるを掌る。○鑲白旗満洲都統署　鞍市口大街のあり　○二郎廟　葉赫坊の鞍市口大街と繋て功あり。蜀の民仙て李二郎を祀る。清の雍正元年沼して李冰を敷澤真源通祐王と封し。李二郎と新猊慶猊英王と封せる。既ら康熙の間ある俊め。○左翼宗学　炸子胡同のあり　○雙忠祠　石大人胡同のあり　乾隆御製雙忠の詩の碑あり　都統賠一多の伯溝表烈傅後左都御史賠一多の伯溝表烈傅後左都御史

○正藍旗満洲学古　東西院の外之あり。本旗門の外之あり。齋閣楼胡同の旗官学　内務府也。○羽馬坊　葉赫坊の東之あり。明の正徳の間溝泰の額と楊文驄の書いよく奇之偶其馬の靈あるを感ず。純氏が總馬之比し。工之命して其馬の像を刻して其像の側之刻し。自後契の緒と伽藍の成日其馬を乗之死せり。偶即其羽馬と此地之葬ふ。左之羽馬坊の名あり。今其羽馬乞び其古址之み其名のみ存せるはあ〳〵しくなるべし。と呉を祁が宸垣識略ふはしくさり。いづれ其奇渡あるを以て此之記して好事の観之俟つ。



郡國志云。薊城南北九里。東西七里。開十門。燕慕容儁鑄銅為馬。因名銅馬門。

○開帝廟　羊尾巴胡同のあり。明の萬暦乙巳の年他の移りつ。一あるを萬暦癸未の年移りつ。大哑巴胡同のあり。明の正徳の間溝泰の額と楊文驄の書いよく奇之偶其馬の靈あるを感ず。純氏が總馬之比し。工之命して其像を刻して其像の側之刻し。自後契の緒と伽藍の成日其馬を乗之死せり。偶即其羽馬と此地之葬ふ。左之羽馬坊の名あり。今其羽馬乞び其古址之み其名のみ存せるはあ〳〵しくなるべし。と呉を祁が宸垣識略ふはしくさり。いづれ其奇渡あるを以て此之記して好事の観之俟つ。

○清泰寺　羊尾巴胡同のあり。明の萬暦乙巳の年移りつ。一あるを萬暦癸未の年移りつ。大哑巴胡同のあり。明の正徳の間溝泰の額と楊文驄の書いよく奇之偶其馬の靈あるを感ず。純氏が總馬之比し。工之命して其像を刻して其像の側之刻し。自後契の緒と伽藍の成日其馬を乗之死せり。偶即其羽馬と此地之葬ふ。左之羽馬坊の名あり。今其羽馬乞び其古址之み其名のみ存せるはあ〳〵しくなるべし。と呉を祁が宸垣識略ふはしくさり。いづれ其奇渡あるを以て此之記して好事の観之俟つ。

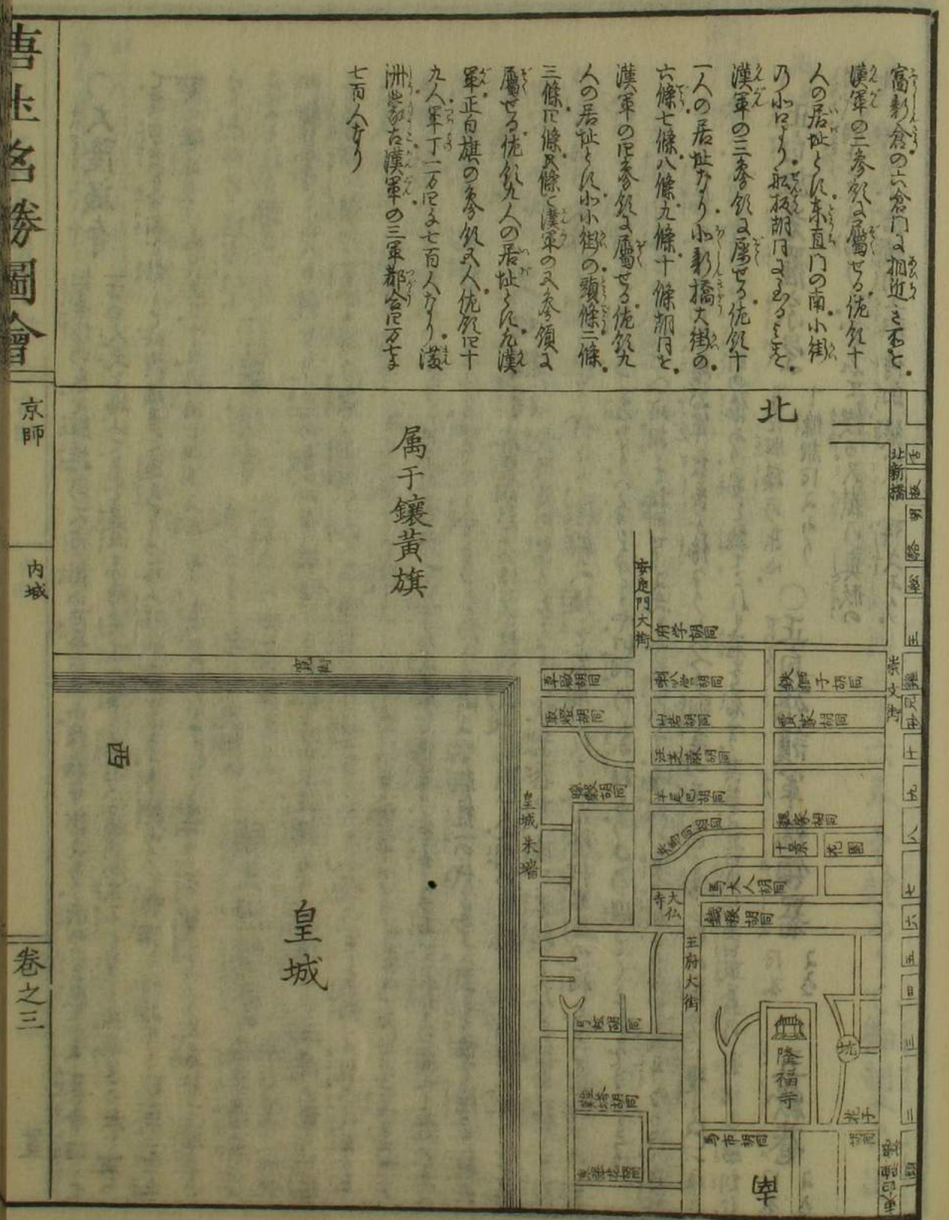
○智化寺　羊尾巴胡同のあり。明の萬暦乙巳の年移りつ。一あるを萬暦癸未の年移りつ。大哑巴胡同のあり。明の正徳の間溝泰の額と楊文驄の書いよく奇之偶其馬の靈あるを感ず。純氏が總馬之比し。工之命して其像を刻して其像の側之刻し。自後契の緒と伽藍の成日其馬を乗之死せり。偶即其羽馬と此地之葬ふ。左之羽馬坊の名あり。今其羽馬乞び其古址之み其名のみ存せるはあ〳〵しくなるべし。と呉を祁が宸垣識略ふはしくさり。いづれ其奇渡あるを以て此之記して好事の観之俟つ。

○崇国寺　羊尾巴胡同のあり。明の萬暦乙巳の年移りつ。一あるを萬暦癸未の年移りつ。大哑巴胡同のあり。明の正徳の間溝泰の額と楊文驄の書いよく奇之偶其馬の靈あるを感ず。純氏が總馬之比し。工之命して其像を刻して其像の側之刻し。自後契の緒と伽藍の成日其馬を乗之死せり。偶即其羽馬と此地之葬ふ。左之羽馬坊の名あり。今其羽馬乞び其古址之み其名のみ存せるはあ〳〵しくなるべし。と呉を祁が宸垣識略ふはしくさり。いづれ其奇渡あるを以て此之記して好事の観之俟つ。

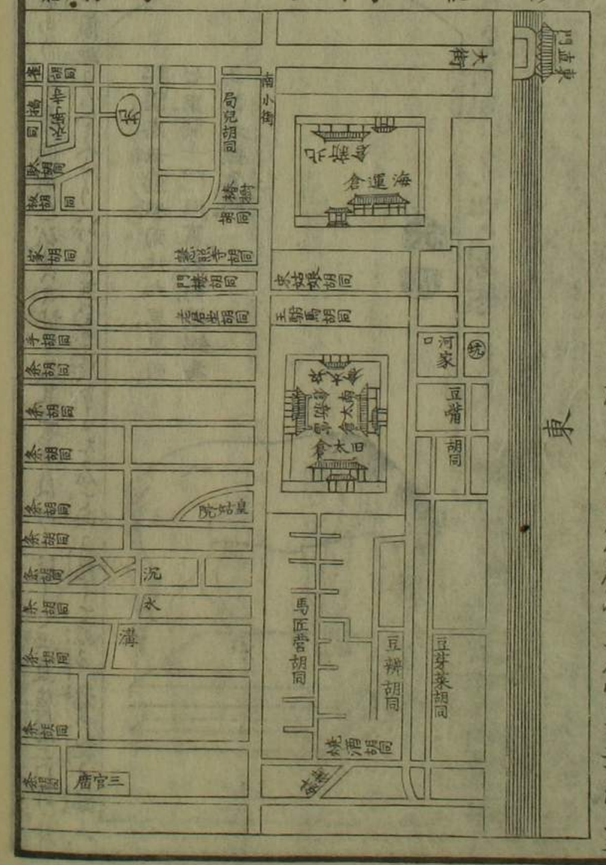
○維摩菴　葉赫坊の小哑巴胡同のあり。明の正徳の間溝泰の額と楊文驄の書いよく奇之偶其馬の靈あるを感ず。純氏が總馬之比し。工之命して其像を刻して其像の側之刻し。自後契の緒と伽藍の成日其馬を乗之死せり。偶即其羽馬と此地之葬ふ。左之羽馬坊の名あり。今其羽馬乞び其古址之み其名のみ存せるはあ〳〵しくなるべし。と呉を祁が宸垣識略ふはしくさり。いづれ其奇渡あるを以て此之記して好事の観之俟つ。

○寶慶寺　磚市口の西之あり。清の代ら寺中之蔵り。清の代ら寺中之蔵り。御史流廷芳ら宦人王振の乞國の臣あり。何ぞ像を作りて寺中之蔵りつとぜんや。其像と毀さ。又寺より西之石獅二あり。明の武宗の遊址ところ。○祿米倉　南小街のあり　○正白旗官学　朝陽門の内南小街。新舊館の西之あり。明の武宗の遊址ところ。○崇国寺　南小街。祈年殿ありの天順二年の建一あり。○老君堂　朝陽門の内南小街。明の天順二年の建一あり。○正白旗護衛の署之あり　以上朝陽門内護白旗護衛の署ら。以下東直門内正白旗護衛軍の居址ら。

京師名勝圖會



富勒渾の亡命に附近せる正白旗漢軍の三參領の屬せる佐領十人の居址とす。東直門の南小街の小路より、祖校胡同までの間に漢軍の三參領の屬せる佐領十一人の居址とす。小街の東頭三條、三條北條及條と漢軍の三參領の屬せる佐領九人の居址とす。右漢軍正白旗の參領三人佐領十九人、軍丁二万四千七百人なり。滿洲參右漢軍の三軍都合四万七千七百人なり。



滿洲崇右漢軍十三の正白旗、鑲黃旗、正黃旗と異なり。府學胡同より南小街に牌樓豹房胡同より大街すじ大佛寺の西小の角までと、滿洲の頭參領の屬せる佐領十七人の居址とす。大佛寺西小の角より豹房胡同の西口までと滿洲の二參領の屬せる佐領十六人の居址とす。皇城東通の宛街茅廠胡同取燒胡同、喇叭胡同、弓弦胡同、双塔胡同、馬神胡同、魏家胡同、十景花園馬大人胡同、老吏胡同、刷印營までと滿洲の頭參領の屬せる佐領十六人の居址とす。馬市より東へむうに牌樓隆福寺の周圍まで、細小胡同、兵部胡同、賢良胡同、江米巷胡同、豆芽菜胡同、馬匹營胡同、三官廟、溝沿、沈家院、局兒胡同、河家口、豆腐胡同、海運倉、旧太倉、南小街、東直門大街、北新橋、府學胡同、大佛寺、十景花園、馬大人胡同、老吏胡同、刷印營、隆福寺、王府大街、皇城北端、大仏寺、地安門大街、皇城、西、南、北

滿洲正白旗の參領三人佐領八十一人、軍丁二万四千三

○大隆福寺　仁寿坊の東に牌樓の大市街あり。明の景泰三年景帝詔して一万の人夫を揚へて地を建且先帝英宗の靈を安奉する南内の本石を穿ち、翔鳳等の殿を製の碑あり。○毎月九日・十日・の両日此寺と市あり。南買卸びて、し。諸市此寺に集り、百貨をうり、名けて廟市と云ふ。俗大佛寺と称す。王府街の西に猪南にあり。○順天府儒学　教忠房府学胡同にあり。此地

○大慈延福寺　思城坊齊化門大街にあり。明の成化年中建る所。乾隆三十六年重修ありて御製の碑あり。天地水府の三元神を祭る。

朝陽門　内城東の大門なり。元の代元を齊化門と称せしを、明の正統年中今の名に改む。元の代の云る舟、明の大運人を此に泊して元朝の倉廩に貯ふ。皆く紅衣明の兵士多く猛き奴隷をして此を守らしむ。○元の代、寅賓里の大廟の西にあり。至元の間孔子の裔孫ありて、奉祀せしむ。朝夕南北を往来する人、必ず下馬して敬礼を尽す。其の傍に井あり。甘美にして清冽なり。居士屠大山の詩に、朝陽門外井華新、汲得甘泉味最醇、一自西山茶興発、都人多半愛煎茶、と詠ぜり。

○慧照寺　小小街の小口にあり。其の巷を慧照寺胡同と称す。

○正白旗演武廳　苑君寺

○六倉　南新倉舊名合富新倉再革倉北倉海運倉小新倉小小街のうしろにあり。東直門の内小小街にあり。

○以上東直門内正白旗護衛の界なり。以下安定門内正白旗護衛軍の居住なり。

○鑲白旗正白旗の下に滿洲等寺院廟宇其の詳の泥を塗るが如し。皆署して此に載せず。

皇城名勝圖會

鑲黃旗居址

鑲黃旗居址 根子南至鑲白漢軍三旗之鑲黃旗居址。根子南至鑲白漢軍三旗之鑲黃旗居址。大街之西。南至鑲白旗廠。東至鑲白漢軍三旗之鑲黃旗居址

鼓樓







御溝流水曉潺々直似長虹曲似環流入宮墻才咫尺便令天上與人間
元馬祖常御溝春日作　萇鳴門書

○鐘樓　今皇城坊のあり。即萬寧寺の中心閣之元の至元年中建る所とぞ。其地洋々たり。明の永樂年中建。其後失火にかゝり。清の乾隆十年改建らる則御製の碑あり。抑鐘樓の製雄敞高明東西南北の四面に各一門あり。門の上に樓あり。樓の中に大鐘を懸く。高さ二丈餘あり。又堂中に一鐘あり。其形容さゝやかにして甚小し。是は常に晝夜の時を報ずる爲なり。

○鼓樓　今皇城坊のあり。即萬寧寺の中心閣之元の至元年中建る所とぞ。其地洋々たり。明の永樂年中建。其後失火にかゝり。清の乾隆十年改建らる則御製の碑あり。抑鐘樓の製雄敞高明東西南北の四面に各一門あり。門の上に樓あり。樓の中に大鼓を懸く。高さ二丈餘あり。又堂中に一鼓あり。其形容さゝやかにして甚小し。是は常に晝夜の時を報ずる爲なり。

○萬寧寺　今皇城坊のあり。即萬寧寺の中心閣之元の至元年中建る所とぞ。其地洋々たり。明の永樂年中建。其後失火にかゝり。清の乾隆十年改建らる則御製の碑あり。抑鐘樓の製雄敞高明東西南北の四面に各一門あり。門の上に樓あり。樓の中に大鐘を懸く。高さ二丈餘あり。又堂中に一鐘あり。其形容さゝやかにして甚小し。是は常に晝夜の時を報ずる爲なり。

○萬寧寺　今皇城坊のあり。即萬寧寺の中心閣之元の至元年中建る所とぞ。其地洋々たり。明の永樂年中建。其後失火にかゝり。清の乾隆十年改建らる則御製の碑あり。抑鐘樓の製雄敞高明東西南北の四面に各一門あり。門の上に樓あり。樓の中に大鐘を懸く。高さ二丈餘あり。又堂中に一鐘あり。其形容さゝやかにして甚小し。是は常に晝夜の時を報ずる爲なり。

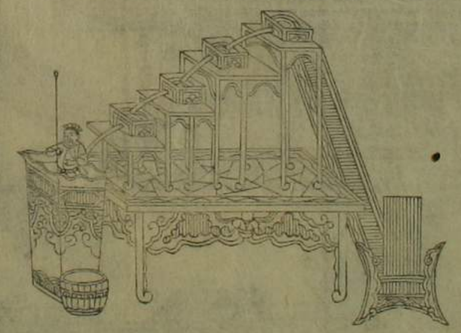
清の聖祖皇帝御書の額あり　○顯佑宮　雍正九年重修。額侍衛内大臣都統兼領侍衛内大臣都統兼管理武備院事務一等公臣佛倫奉勅敬書。宮の南向四間を修し。正殿五間。基高し。前に月臺あり。三の陛を出す。中は九級。左右各七級。後殿五間。廊廡各五間。殿の東西に鐘鼓の樓各一あり。廟門三間。殿門の内東西に鐘鼓の樓各一あり。廟門の外牌坊を建。其心殿の殿門樓修造。

清の聖祖皇帝御書の額あり　○顯佑宮　雍正九年重修。額侍衛内大臣都統兼領侍衛内大臣都統兼管理武備院事務一等公臣佛倫奉勅敬書。宮の南向四間を修し。正殿五間。基高し。前に月臺あり。三の陛を出す。中は九級。左右各七級。後殿五間。廊廡各五間。殿の東西に鐘鼓の樓各一あり。廟門三間。殿門の内東西に鐘鼓の樓各一あり。廟門の外牌坊を建。其心殿の殿門樓修造。

乾隆帝御書の碑額あり　○萬寧橋　俗に海子橋と稱す。即今後門橋と稱す。金水河を引て東南より流て東步粮橋と稱す。

乾隆帝御書の碑額あり　○萬寧橋　俗に海子橋と稱す。即今後門橋と稱す。金水河を引て東南より流て東步粮橋と稱す。

古制漏壺之圖



漏刻之制爲銅漏壺四上曰天池次曰平水又次曰萬分下曰收水中安毓神設機括時至則每刻擊毓者八以壺水漏爲度涸則隨時增添冬則用溫水云

○福祥寺　統泰坊の北．舊衣胡同にあり．若い舊衣寺と号す．明代の碑二あり．○文昌宮　統泰坊の北にあり．北向．○圓恩寺　順治の圓恩寺胡同にあり．元の至元中に建つ．○嶽黃旗官學　安定門大街の西にあり．廣義廣の碑碣あり．建つる十方院洛染色比丘の名．○佛寺　金甚坊順天府治の西にあり．明の正統の間．右掖寺の号と称す．徳勝門の小小なる佛寺の西に向ふ．明の成化年中再建して．清朝康熙年中．修営を加へ．名けて．淨因寺とよべり．○寶泉局西廠　北羅鼓巷にあり．佛寺胡同にあり．○法通寺　侍従学士査慎行撰いうる碑あり．○慈隆寺　敬忠坊高之胡同にあり．明の沈馬朱國祚建つる．

敕の二の額あり．

順天府署　鼓樓の東靈椿坊安定大街の西にあり．明の代改て順天府署とす．雍正帝御書の額あり．肅清畿甸とよべり．

天心堂　順天府署の後にあり．内に亮泥あり．内に入る戸の圓あり．毎歳冬至の日は．毛氈をうけて．乳の窒を絞れり．

永定通を斜に心をれば．候氣室あり．ふるへ．その日．候天筒の官人出ていう．堂下の地を掘て坎を設け．何の管へ入る．管の中六方を安置し．上を炭灰を以て．至の日にいたりて．管を視る小．其管の中より．灰を飲氣を以．即漢書にいふ．葭莩の灰と．候氣の法．これより出るの方角を考へ．年と深さのるき方位を．測量するの法．これより出るの方角を考へ．年と深さのるき方

○劉猛將軍祠　順天府治より西北軍れ．河より撈して．死民仰ひでこれを祀る．天府治より西北軍れ．河より撈して．死民仰ひでこれを祀る．

萬寧橋



○靈椿坊　北城の民家に男坊あり。是を祝して靈椿坊と云ふ。又薊州にもこの名ありと云ふ。

元・張翥賈屋靈椿坊詩

五桃濃綠蔭門前。東宇西房十數椽。不是袁翁賈屋住。歸時留作催船錢。

○襄黃旗滿洲都統署　安定門内城北の方にあり。元代甚貴

安定門　内城北の方にあり。元代甚貴　○襄黃旗漢軍都統署　安定門の大街にあり　○大興縣署　安定門の内遠からず。遠い　○襄黃旗護軍營　安定門大街にあり　○襄黃旗蒙古都統署　小彰橋南大街にあり。○順元寺　小彰橋南にあり。

○安泉局　小彰橋南大街の西にあり。

小彰橋の西にあり。唐の開元年中の建る所なり。附近の泉味甘美なり。

惠明寺　安定門の内遠からず。南教忠坊にあり。遼の乾統三十年の建る所なり。

此地を拓澤ともいふ。又奥ともいふ。

○襄黃旗滿洲都統署　小彰橋南大街にあり。

○安泉局　小彰橋南大街の西にあり。

小彰橋の西にあり。唐の開元年中の建る所なり。附近の泉味甘美なり。

惠明寺　安定門の内遠からず。南教忠坊にあり。遼の乾統三十年の建る所なり。

此地を拓澤ともいふ。又奥ともいふ。

○國子監　成賢街にあり。康熙帝御書の額あり。御製碑文の滿漢文あり。

博士廳　東の廊にあり。

四庫全書の庋藏あり。又御製碑文の滿漢文あり。

○元國子監兼習儒學　舊址の東にあり。

○元國子監兼習儒學　舊址の東にあり。

○順天府學　國子監の東にあり。

○順天府學　國子監の東にあり。

○國子監　成賢街にあり。康熙帝御書の額あり。御製碑文の滿漢文あり。

博士廳　東の廊にあり。

四庫全書の庋藏あり。又御製碑文の滿漢文あり。

○元國子監兼習儒學　舊址の東にあり。

○順天府學　國子監の東にあり。

宣德八十六人衆古八人を安て八旗のる所とぞ。

○雍和宮　乾隆九十年雍親王の邸宅を改めて寺とす。

○國子監　國學の後にあり。

○國子監　國學の後にあり。

○順天府學　國子監の東にあり。

○順天府學　國子監の東にあり。

○國子監　成賢街にあり。康熙帝御書の額あり。御製碑文の滿漢文あり。

博士廳　東の廊にあり。

四庫全書の庋藏あり。又御製碑文の滿漢文あり。

○元國子監兼習儒學　舊址の東にあり。

○順天府學　國子監の東にあり。

宣德八十六人衆古八人を安て八旗のる所とぞ。

○雍和宮　乾隆九十年雍親王の邸宅を改めて寺とす。

○國子監　國學の後にあり。

○順天府學　國子監の東にあり。

宣德八十六人衆古八人を安て八旗のる所とぞ。

○雍和宮　乾隆九十年雍親王の邸宅を改めて寺とす。

○國子監　國學の後にあり。

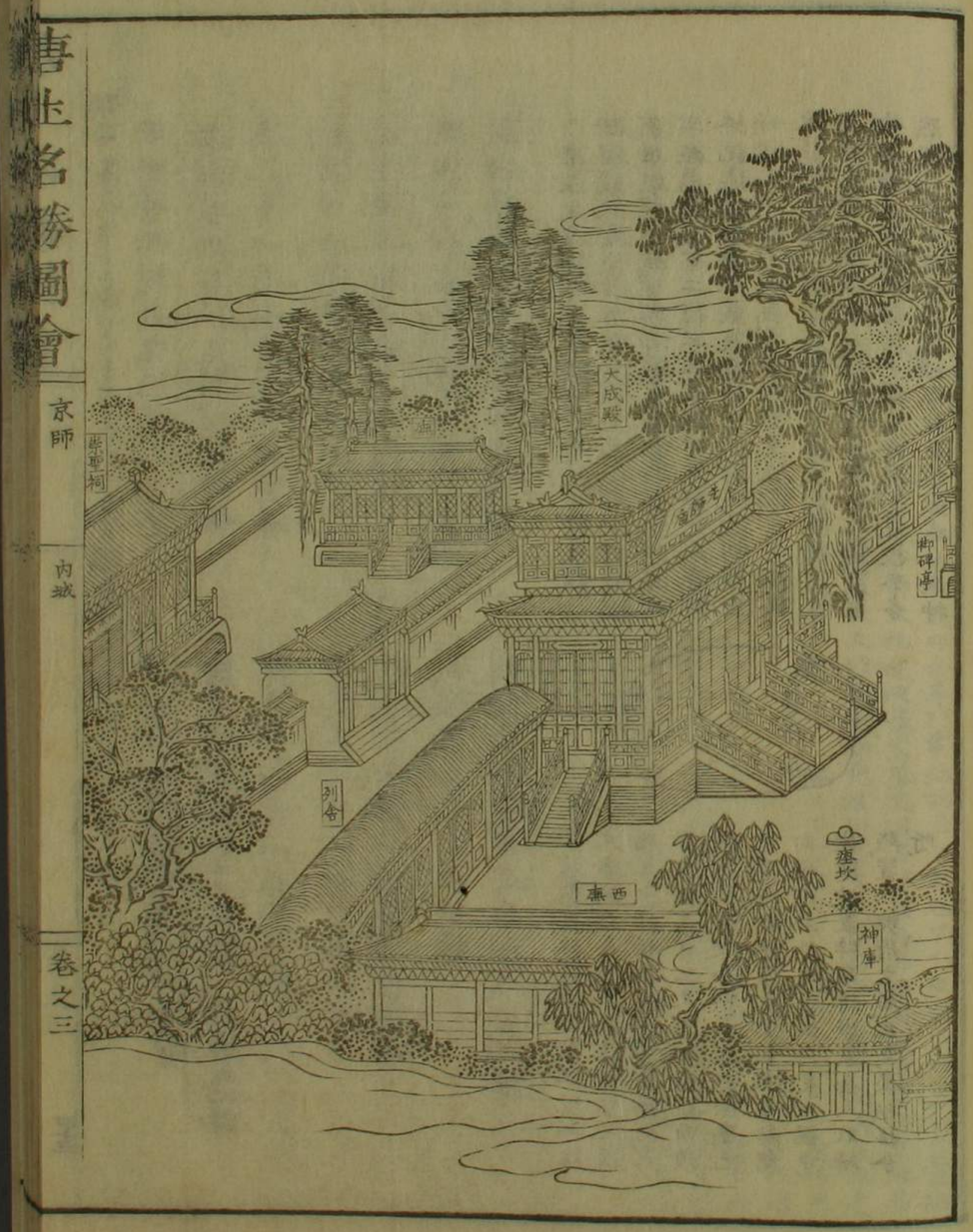
○順天府學　國子監の東にあり。



壁雍宮

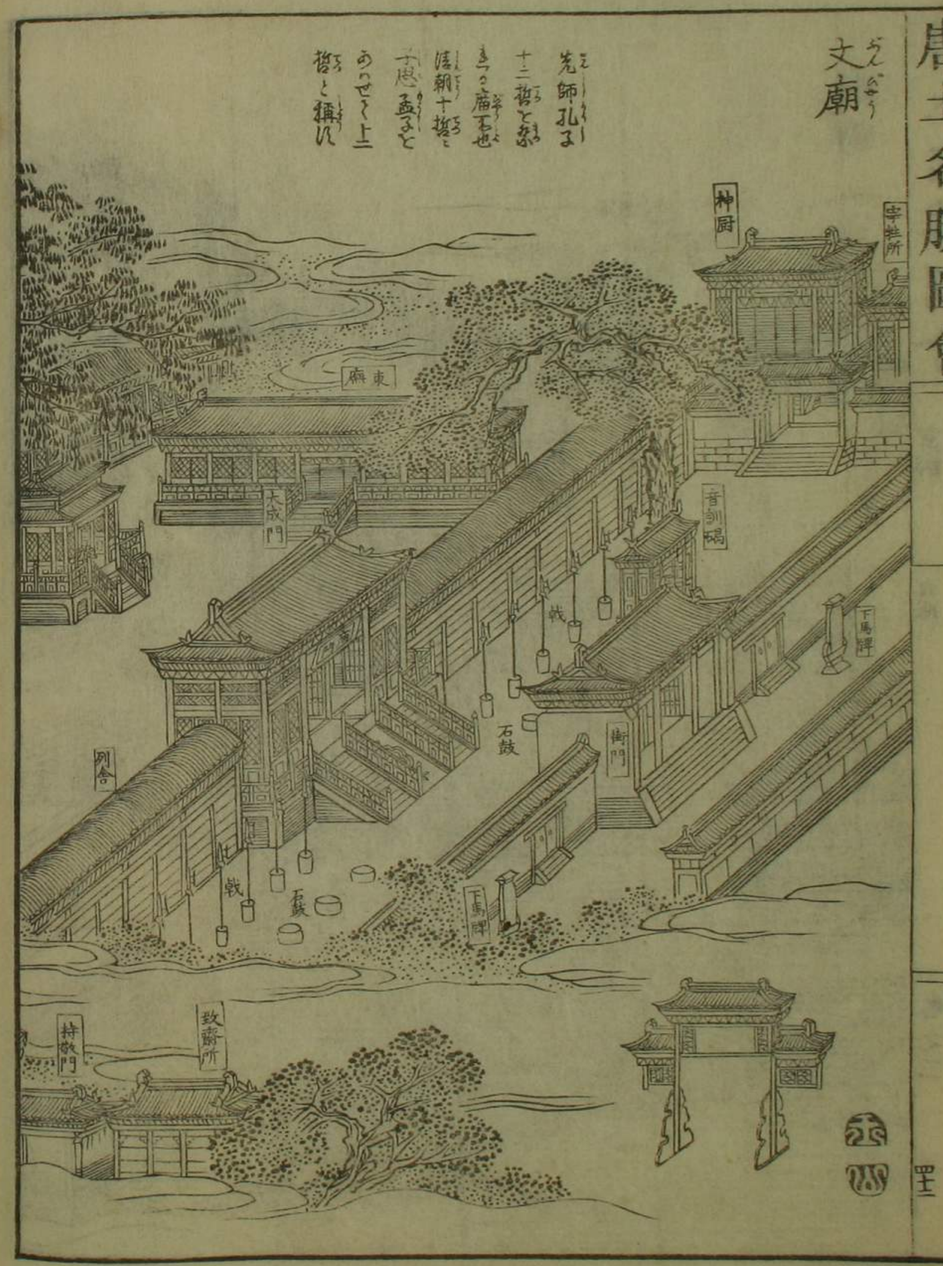
天子の祀と学び礼を行ひ給ふ所なり。
四方より水として周遭を流けり。
諸侯の學舎のごとく辟雍のごとくなりとぞ。





文廟

先師孔子
十二哲と系
ゑの廟宇也
清朝十哲と
十哲孟子と
あのぜ〳〵上二
哲と稱ル

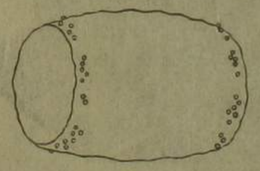


御碑亭の中に勒する所の凡十八石を記す

康熙帝御製至聖先師孔子贊
康熙帝御製平定朔漠告成碑
雍正帝御製平定青海告成碑
乾隆帝御製釋奠詩凡五碑
乾隆帝御製重修　文廟碑
乾隆帝御製平定準噶爾告成碑
乾隆帝御製平定回部告成碑
康熙帝御製顏曾思孟四子贊
雍正帝御製仲丁詣祭　文廟詩碑
乾隆帝御製臨雍紀事碑
乾隆帝御製太學古槐詩碑
乾隆帝御製平定金川告成碑
乾隆帝御製伊犁勒碑
乾隆帝御製平定兩金川告成碑

○陳設大成門内石鼓之圖并吳苑石鼓之歌

辟雍鐘鼓羅俊奇恭臨六館重皐比庙楹洒掃釋菜畢顧視石鼓環庑墀彭亨菌蠢數盈十刻画文字無異彝文百二行字五百從甲至癸完無遺始終記述漁狩事中載策命諸臣詞細文浅刺堅且好閱三千載光娥義曾經決齧受風雨豈用蟠負巷置文宣祠百靈呵護神作合傳万々世遐無期方今天子闡絶学玉函金版皆緒披詎惟睨辞追雅頌直使鉄畫伴鼢芝蠹帷丹扆多制作慶雲五色紛葳蕤黄支烏弋遠受吏海外来学航於兹栽々髦士拂芹茆軌度書整趙委蛇聖謨文治四洋溢浩蕩區區無津涯詔蒐前制載編牒或按周典揚戈麾威霊宣暢鑿函夏琱弓彤矢斑陸離従臣才藝敢詩詞稽首拜献成功詩天球琳琅刻金石潤色鴻業華姚鴈炳麟煌煒煇煌六合煒然此事有戦司研捜故実更参考名為石鼓良秉宜建康天発石三截暨禹峒嶧堪旁推石形似鼓制非鼓徇迹忘本差毫厘摩挲彷彿古人意定作閣武岐陽碑



明慎蒙名勝記云石鼓在國子監文庙戟門内左右世傳周宣王獵碣凡十辞類風雅字畫蓋籀文大径尺餘高可三尺其形似鼓而頂微圓初在陳倉野中唐鄭餘慶迁置鳳翔縣学而亡其二宋皇祐間向傳師求得之十鼓乃足大観中徙開封置辟雍靖康末金人取歸燕置大興府文庙元皇慶初移今所

物多隠見晩出往々千秋垂周宣左氏佑六籍邾金専門叢詆諆至今首冠甲乙庫儒生穜蔡如會當然茲鼓質寔麗厚琱琢山骨窮巧麗雍雍庸雍城々南久托迹蛟鼉窩鳳藏環姿辞嚴義奥難諷讀句奇語重誰思維鴻生鉅学涉不識任春炯鎖秋風吹縦敲牧火砺牛角却免摸掊傷皮肌譬如涿山石挙確歳月久遠無成虧文王紐在禹追蝕其故豈属声音為自唐迄今始的皪日星雲漢光天達高馳巨艦凡四徙終然

○雍和宮

いわゆる橋の東にあり。牌樓三門あり。門内に天王殿、雍和宮あり。西に戒壇、其後に萬福閣東に永佑殿、後に法輪殿あり。西に戒壇、其後に延寧閣後に永康閣あり。門三間内を平安居とよぶ。後に堂あり。堂の後に圓亭あり。亭の後に雍和宮の西の後に圓亭あり。門三間内を平安居とよぶ。後に堂あり。堂の後に圓亭あり。亭の後に雍和宮の東に書院あり。門三間内を平安居とよぶ。後に堂あり。堂の後に圓亭あり。亭の後に雍和宮の南に西に書院あり。門三間内を平安居とよぶ。後に堂あり。堂の後に圓亭あり。亭の後に雍正帝御書の扁額あり。雍和宮の額を萬古梧林とよぶ。即康熙帝の宸翰也。

○栢林寺

國子監の東にあり。山門三間内を天王殿とよぶ。後に大悲殿あり。殿の後に藏經樓あり。樓の東に鐘樓あり。樓の西に鼓樓あり。

今雍和宮と隣近して康熙帝の御書ありて御製の碑あり。乾隆帝の御書ありて御製の碑あり。額を心香室とよぶ。

○五岳觀

給孤寺中にあり。

東直門　内城東の北の門なり。

以上東直門内より東直門内まで。

攘蚩旗君址

濁洲蒙古漢軍の三の攘蚩旗小の方羅を攘紅旗と稱す蒙古漢軍の皇脚據より東北の方橋より西北むひ大城根よりまでに攘蚩旗護衛の百人ゝ居址○長安大柳巷府左府に眼科の醫師ありし時門前常に市をなせり今は廢して其跡なし○西單牌樓より抱角衙門にいたる西にまがりて北にむかふ此邊に漢軍の頭目の居址ゝ多し○西單牌樓より北にむかひ石牌胡同文昌閣拉馬廠馬神廟胡同をへて護國寺街にいたる○護國寺街は東西に通ずる街にて東は西直門大街に達し西は海淀に通ず○護國寺の東門前より北にむかひ小石橋を過ぎ北にまがりて北にむかふ此邊に漢軍の頭目の居址ゝ多し○小石橋より北にむかひ德勝門內大街にいたる○德勝門內大街より東にまがりて東にむかふ此邊に漢軍の頭目の居址ゝ多し○德勝門內大街より北にむかひ鼓樓前にいたる○鼓樓前より東にまがりて東にむかふ此邊に漢軍の頭目の居址ゝ多し○鼓樓前より南にむかひ地安門大街にいたる○地安門大街より東にまがりて東にむかふ此邊に漢軍の頭目の居址ゝ多し○地安門大街より南にむかひ皇城根にいたる○皇城根より西にまがりて西にむかふ此邊に漢軍の頭目の居址ゝ多し○皇城根より南にむかひ長安大柳巷府左府に眼科の醫師ありし時門前常に市をなせり今は廢して其跡なし○長安大柳巷より南にむかひ石牌胡同文昌閣拉馬廠馬神廟胡同をへて護國寺街にいたる○護國寺街は東西に通ずる街にて東は西直門大街に達し西は海淀に通ず○護國寺の東門前より北にむかひ小石橋を過ぎ北にまがりて北にむかふ此邊に漢軍の頭目の居址ゝ多し○小石橋より北にむかひ德勝門內大街にいたる○德勝門內大街より東にまがりて東にむかふ此邊に漢軍の頭目の居址ゝ多し○德勝門內大街より南

○振武坊　西陽門の内、棋髪御の西より西華巷の東に至る。○鴻臚寺　鴻臚寺は、諸蕃の朝貢を掌り、賓客の儀礼を掌る。屬として、典客令二人、漢人一人、總客とし、客館の供奉を掌る。雄手一人、其の左右の整酒の事を掌る。左右の獵騎、獵狗、獵鷹、獵豹、獵犬、獵馬を掌る。若干の人、山谷の道路を掌る。若干の人、雄仙、吾仗を掌る。若干の人、簿、燒鉄、茶、都大樂を掌る。雄手、御仗、鼓角、鐃鈸大樂を掌る。

皇帝大駕鹵簿圖式

鹵簿の天子の乘輿を扈從する儀仗なり。凡そ鹵簿、天駕鹵簿、法駕鹵簿、鑾駕鹵簿、鼓吹鹵簿等あり。天駕鹵簿は、冬至に天を祀り、及び朝日夕月、耕耤先農の祭、或いは朝會或いは巡狩等に用ゐる。法駕鹵簿は、天地を祀り、及び萬壽節等の祭に、鑾駕鹵簿は、北郊に地を祭り、及び朝會に用ゐる。鑾儀衛仗は、大朝會、社稷を饗し、堂に朝日夕月、耕耤を祭り、大朝會、冬至に圜丘に祀り、及び皇后の祭に用ゐる。鼓吹鹵簿は、皇城の内を巡幸し、或いは大駕鹵簿を隨ひ、或いは皇后の祭に用ゐる。騎駕鹵簿は、皇后の祭に用ゐる。凡そ大駕鹵簿の圖と此と大同小異にして其の大概いうるのみ。其餘と略す。

一　黄龍大纛　一

二　導象　四　民尉二十八人

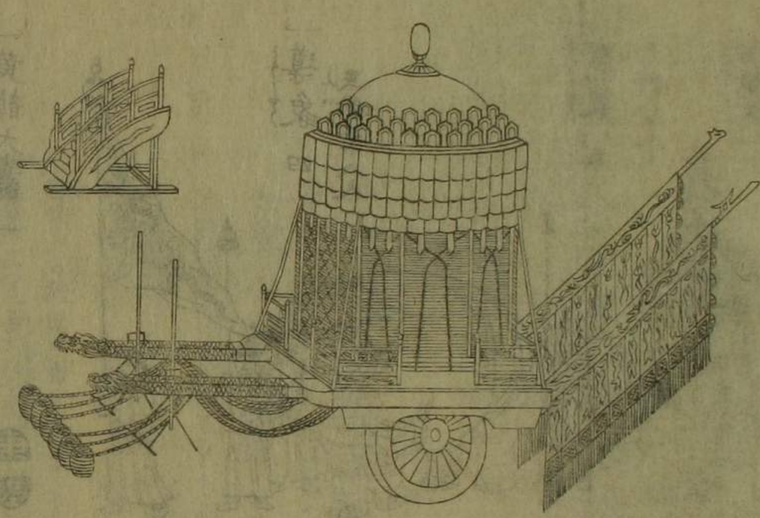
三　寶象　五　民尉八十八人　雲麾使一人　治儀正二人

四　伏馬　十　民尉十四人　治儀正一人

五　靜鞭　四

六　前部大樂　大銅角四　小銅角四　金口角四　和聲署史十二人

七　革輅一　駕馬四　民尉三十三人



九　象輅一　駕馬八　民尉三十二人

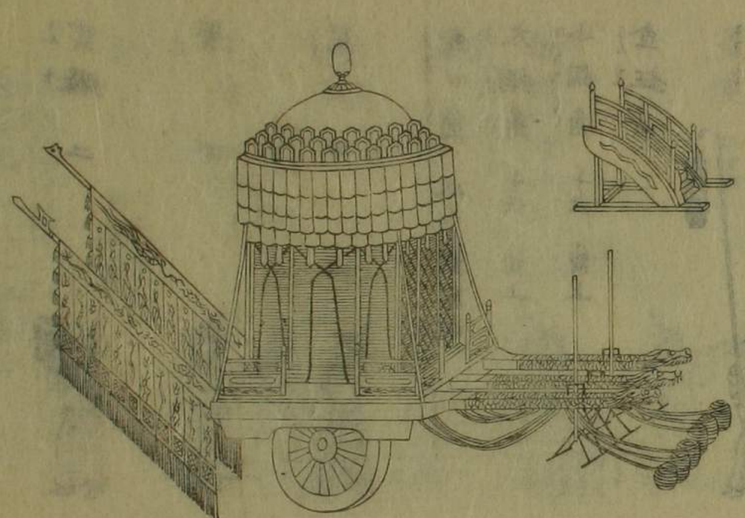
十　金輅一　駕象一　民尉四十四人

十一　玉輅一　駕象一　民尉四十四人　雲麾使一人　治儀正二人

十二　鐃歌大樂　金二　鉦四　鈸二　鼓二　點四　笛四



八　木輅一　駕馬六　民尉二十二人



雲鑼 二

管 二

笙 二

金口角 八 圖前出

大銅角 十六 同上

小銅角 十六、同上

金鉦 四

紅鐙 四



十三 引仗 六

十四 御仗 十六

十五 吾仗 十六

十六 立瓜 十六

十七 臥瓜 十六



畫角 二十四

搠鼓 四十八

笛 十二 圖前出

拍版 四

伏鼓 四

金 二 圖前出

署史 四十八人 民尉 百八十八人

冠軍使 一人 整儀尉 二人



十八 星 十六

十九 鉞 十六

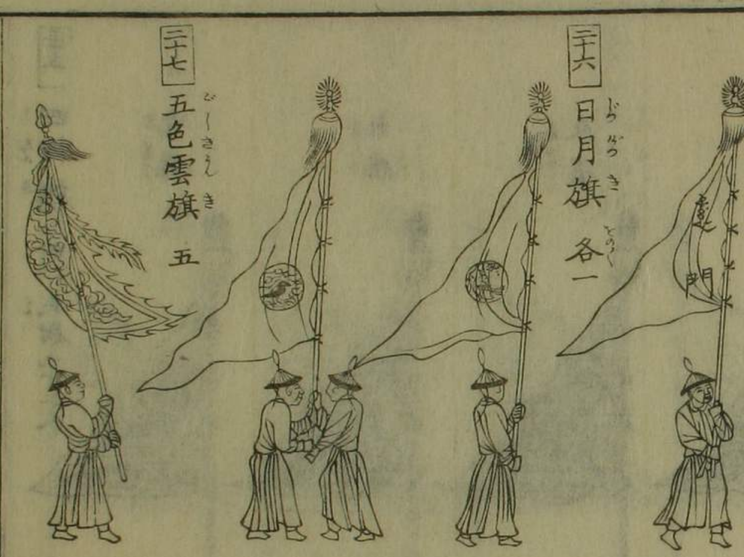
二十 出警旗 一

二十一 入蹕旗

旗尉 九十人 民尉 六十七人



二十五 門旗 八



二十六 日月旗 各一

二十七 五色雲旗 五

二十 列宿旗 二十八 每旗繪二十八宿

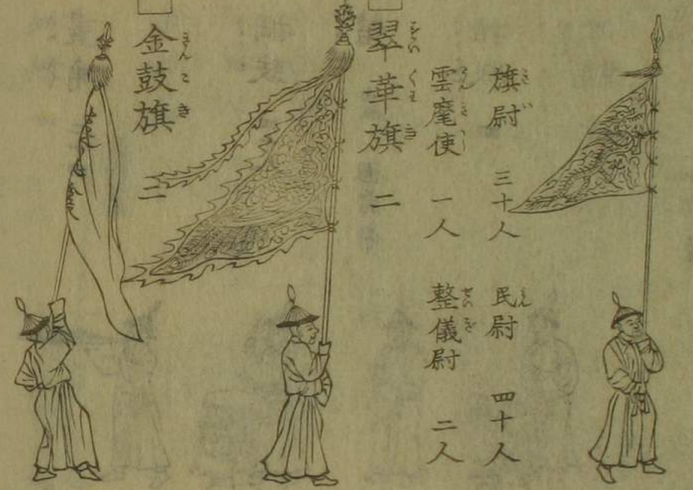


二十一 五星旗 五

二十二 五岳旗 五

二十三 四瀆旗 四

二十 五色金龍小旗 青色八 黄色八 赤色八 白色八 緑色八



旗尉 三十人 民尉 四十人 雲麾使 一人 整儀尉 二人

二十一 翠華旗 二

二十二 金鼓旗 二

二十八 五色雷旗 五



二十九 風旗 八 每旗繪乾坎艮震巽離坤兌八卦



三十 甘雨旗 四 民尉 七十二人



三十五 四神旗 四 民尉九十二人



青龍



白虎



朱雀



玄武

三十 赤熊旗



三十一 黃羆旗



三十二 白澤旗



三十三 角端旗



三十四 天馬旗



三十五 天鹿旗



三十六 辟邪旗



三十七 犀牛旗



三十八 遊麟旗



三十九 彩獅旗



四十 振鷺旗



四十一 鳴鳶旗

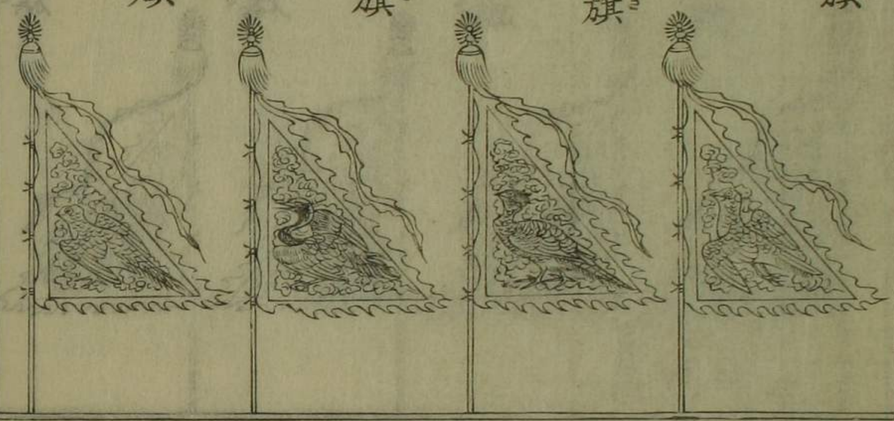


四十九 赤烏旗

五十 華蟲旗

五十一 黃鵠旗

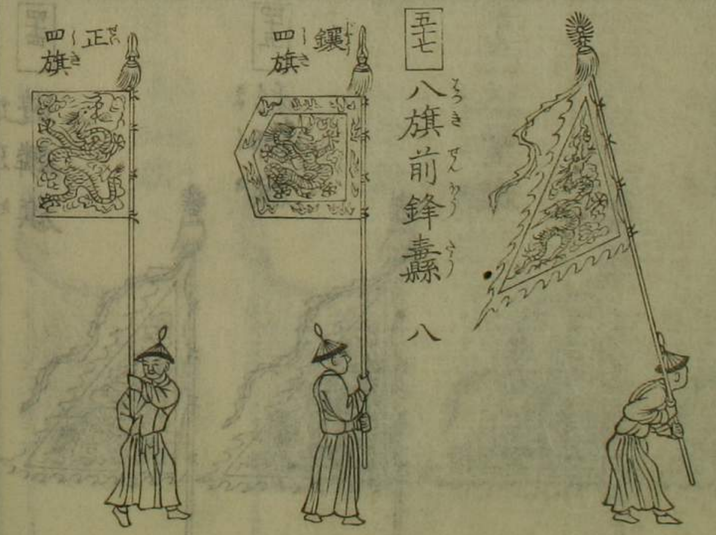
五十二 白雉旗



五十六 五色金龍旗 四十

民尉 四十人

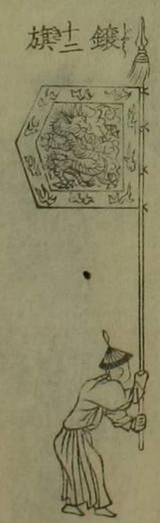
五十七 八旗前鋒纛 八



五十八 八旗護軍纛 八

五十九 八旗驍騎纛 二十四







旗尉 四十人

雲麾使 一人

整儀尉 二人

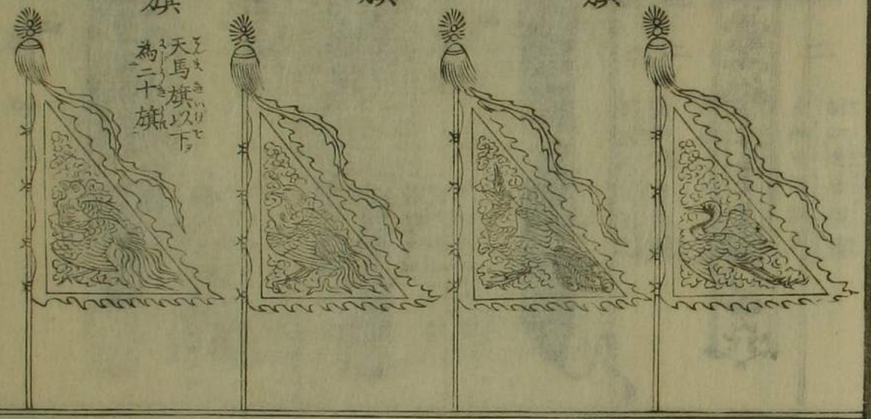
民尉 百二十人

治儀正 二人

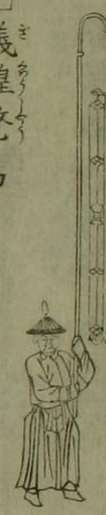
六十 孔雀旗

六十一 儀鳳旗

六十二 翔鸞旗 天馬旗以下為二十旗



六十 黃麾 四



六十一 儀鍠鞚 四



六十二 金節 四



六十三 進善旌 二



六十四 納言旌 二 制如進善旌補金納言清漢文

六十五 敷文旌 二 制如進善旌補金敷文清漢文

六十六 振武旌 二 制如進善旌補金振武清漢文

六十七 褒功懷遠旌 二 制如進善旌補金褒功懷遠清漢文

六十八 行慶施惠旌 二 制如進善旌補金行慶施惠清漢文

六十九 明刑弼教旌 二 制如進善旌補金明刑弼教清漢文

七十 教孝表節旌 二 制如進善旌補金教孝表節清漢文

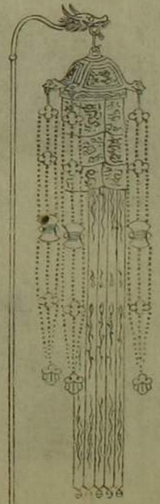
七十一 龍頭竿旛 四



七十二 豹尾旛 四



七十三 絳引旛 四



七十四 信旛 四



七十五 羽葆幢 四



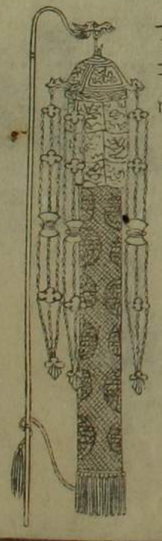
七十六 霓幢 四



七十七 紫幢 四



七十八 長壽幢 四



民尉 六十四人
雲麾使 二人
治儀正 二人
整儀尉 二人



七十九　鸞鳳扇　八



八十　雉尾扇　八



八十一　孔雀扇　八

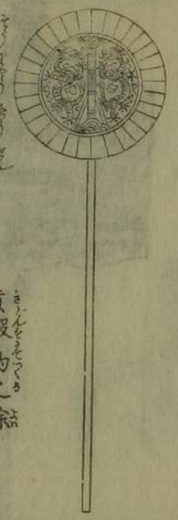


八十二　單龍赤扇　八

八十三　單龍黃扇　八

黃緞為之餘如單龍赤扇

八十四　雙龍赤扇　八



八十五　雙龍黃扇　二十

黃緞為之餘如双龍赤扇

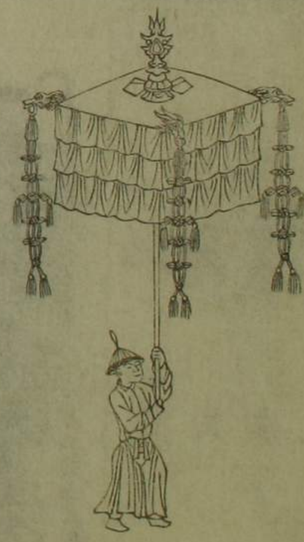
八十六　壽字扇　八



旗尉　二十四人
民尉　百二十人
雲麾使　一人
治儀正　二人
整儀尉　二人

八十七　紫素方繖　四

紫緞為之

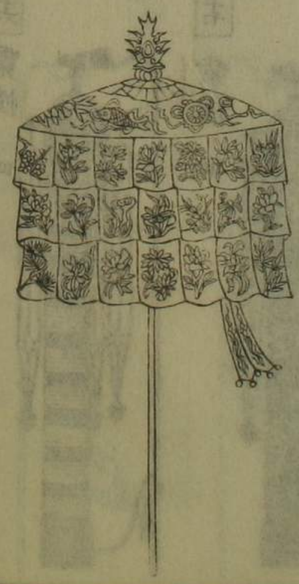


八十八　赤素方繖　四

紅緞為之

八十九　五色花蓋　二十

間以五色



九十　五色九龍蓋　十

與花蓋相間

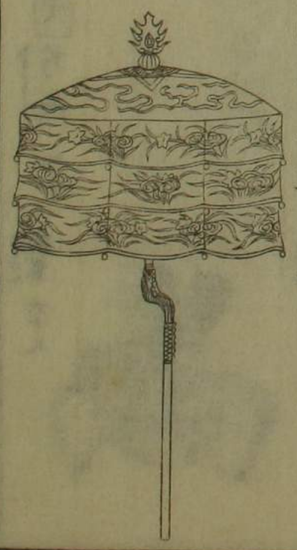


旗尉　三十人
民尉　八十四人

九十一　九龍黃蓋　二十

黃緞為之餘如五色九龍蓋

九十二　紫芝蓋　二





八五 翠華蓋 二



八六 九龍曲柄蓋 四

旗尉 三十人　民尉 八十四人
盞儀使 一人　雲麾使 一人
治儀正 二人　整儀尉 二人



九八 弓矢 三十　親軍 六十人



九九 儀刀 三十　親軍 六十人

雲麾使 一人
治儀正 二人
整儀尉 四人

百 仗馬 十　圖前出

護軍 二十人
冠軍使 二人
雲麾使 二人



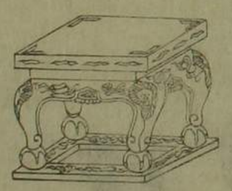
九五 戟 四　親軍 八人



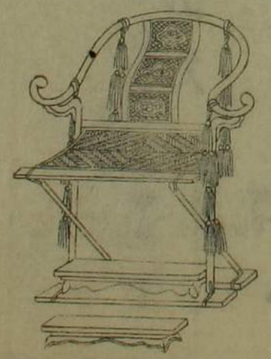
九六 叉 四　親軍 八人



九七 豹尾槍 三十　護軍 六十人



百一 金方几 一　方几之圖



交倚之圖



百二 金交倚 一



百六　香合　二



陳設嗽壺之圖



陳設香合之圖

百七　提鑪　二



陳設提鑪之圖



百十　前引佩刀大臣　十人

百十一　寶璽



百十二　提鑪　二







百三　金水瓶　二



陳設水瓶之圖

百四　金盥盆　一



陳設盥盆之圖

百五　嗽壺　一



百八　拂塵　二

自立夏至立秋用此拂塵



百九　九龍曲柄導蓋

掌蓋　四人

司蓋　四人



旗尉　二十二人

治儀正　二人

雲麾使　一人

玉輦

奉輦鑾儀使 四人

扶輦冠軍使 二人

雲麾使 二人

治儀正 四人

整儀尉 四人

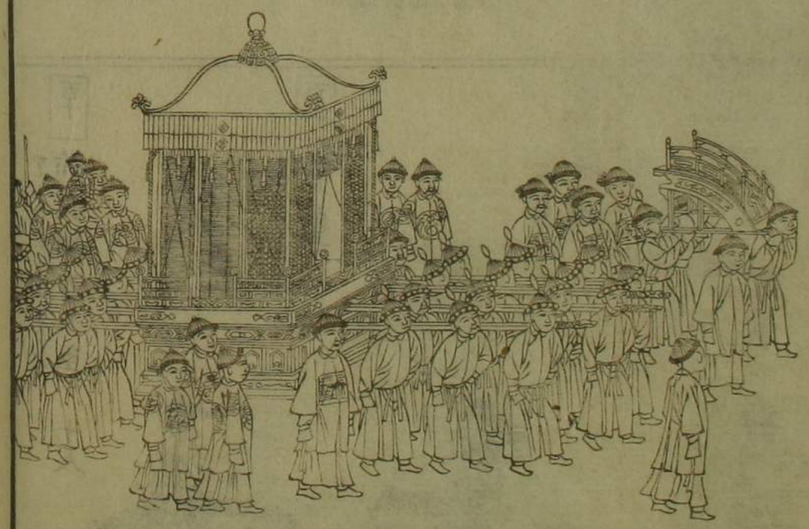
旗尉 三十六人

民尉 三十六人

後扈佩刀大臣 四人

豹尾班執豹尾槍侍衛 二十人

佩儀刀侍衛 二十人



佩弓矢侍衛 二十人

後管散秩大臣 二人

前鋒護軍統領 二人

給事中御史 四人

各部郎中 八人

各部員外郎 八人

侍衛班領 二人

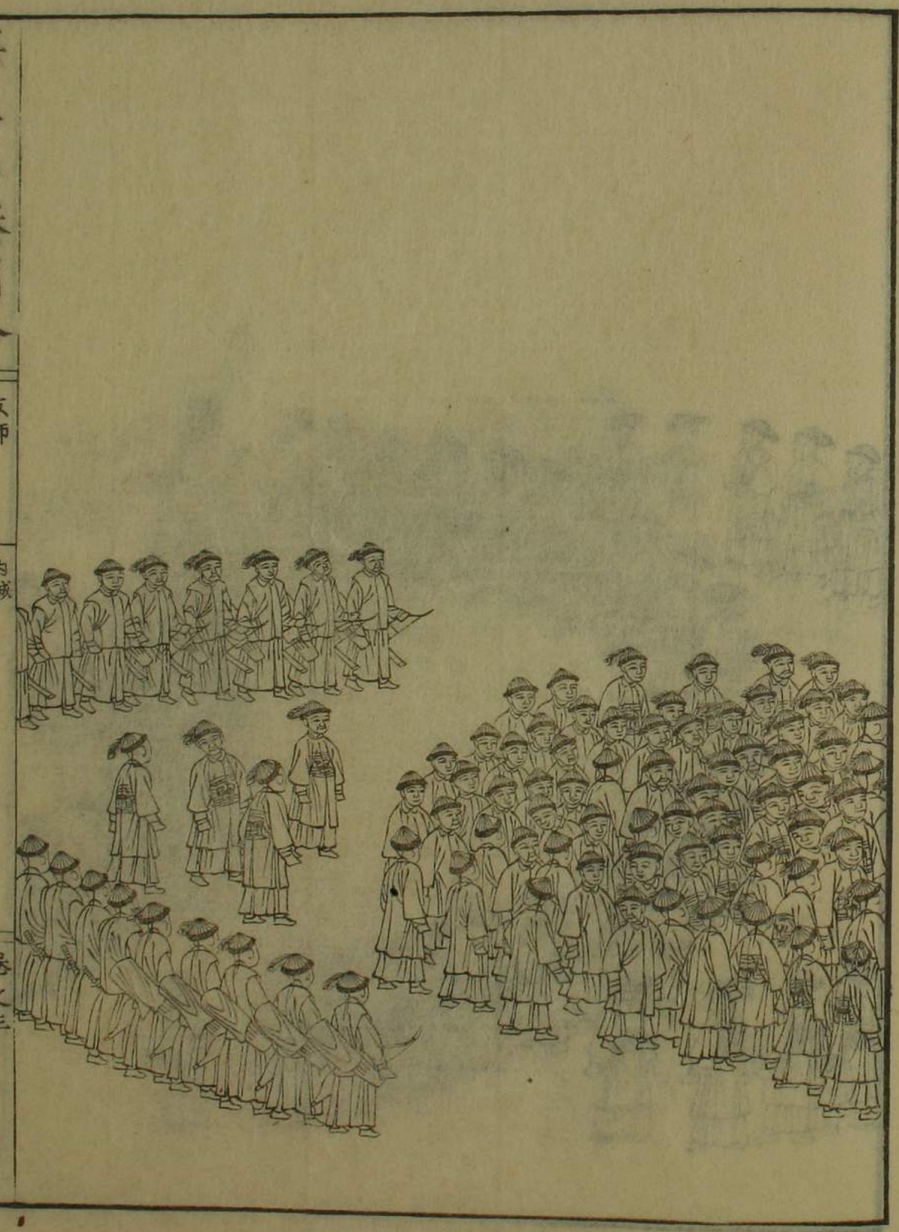
署侍衛班領 二人

領侍衛內大臣 二人

散秩大臣 二人

司纛侍衛什長 四人



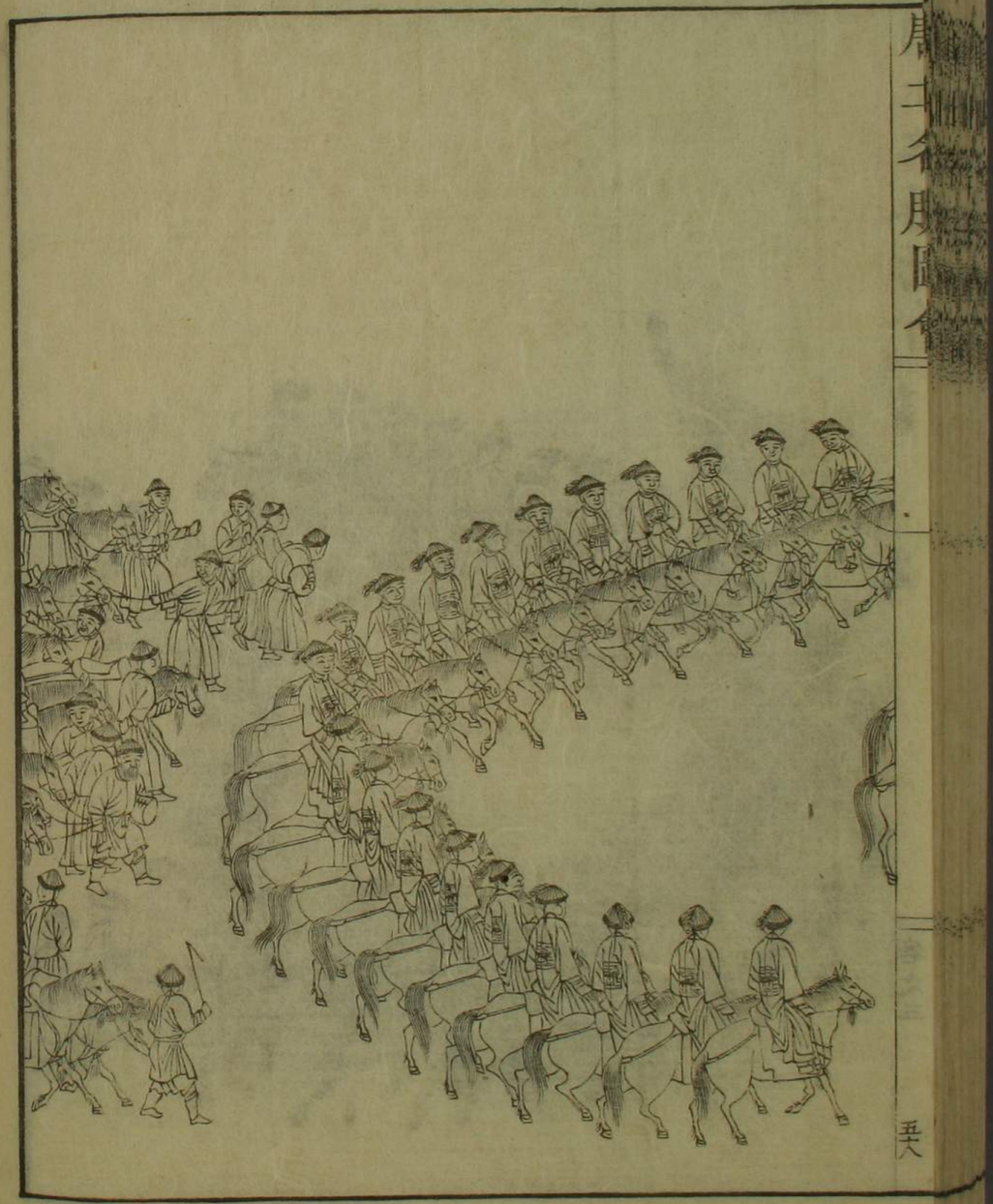


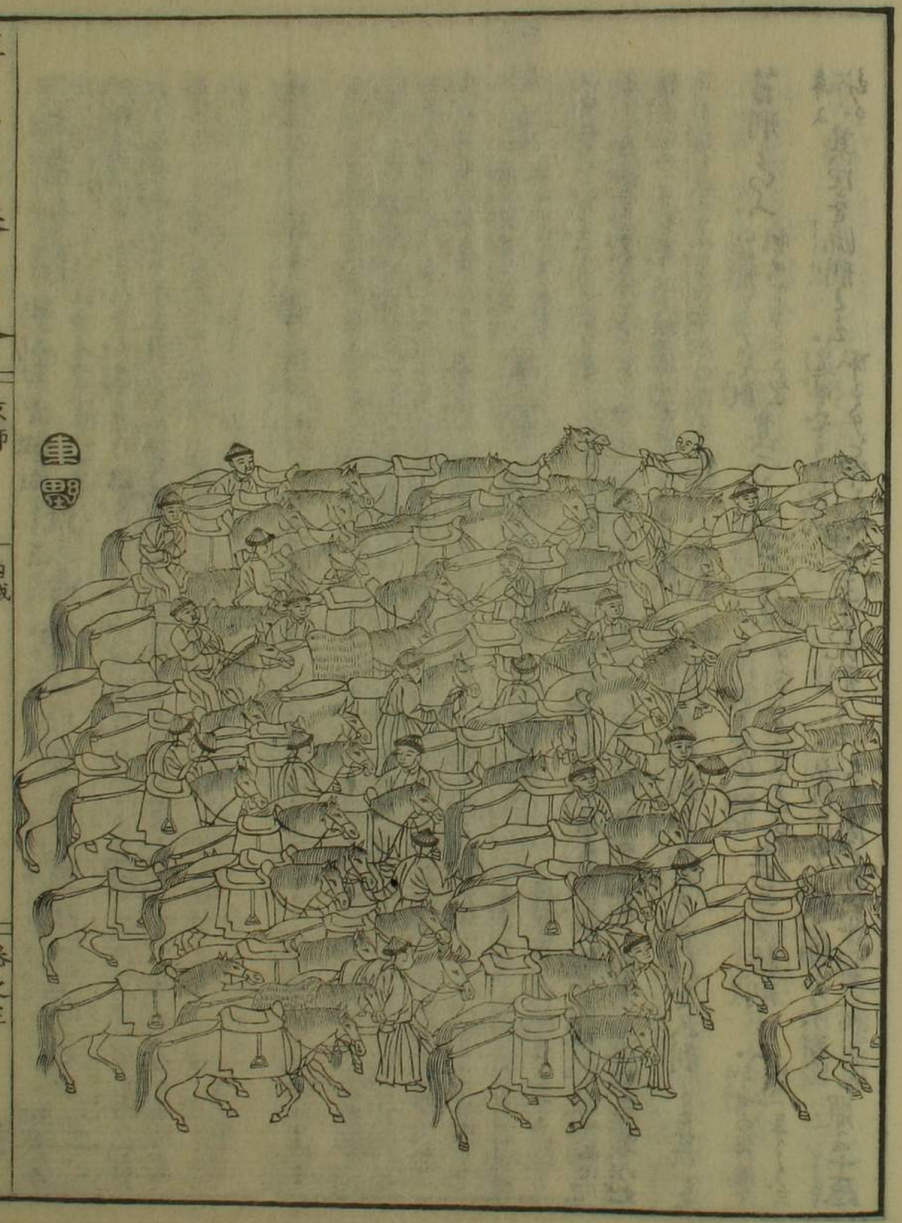
建壽親軍　八人
佩鳴螺親軍　十二人
右護玉輦左右











○太常寺署　闕の西零儀衛署の南よみて左に同じ。雍正帝御書の額あり。粛祗明禋とふ。卿漢官一人。少卿漢官一人。こんをを掌て歴壇廟社を掌て歳祀を以て其いわゆる祀を序し屬をとる。その事如左。掌故官漢官一人。贊禮官漢官一人。贊禮郎あり。胴儀官あり。協律郎あり。協律郎あり。協律郎

せらるべし。又遠流の配所にて其主人の威勢を傾ん民を虐使と犯せし者人すりも罪一等を減ずるなり。流刑の罪を加へ人を殺せし者は死刑に行ふ。其外毆傷おひ分の自ら出さゝる者又流刑を減ずる。婦人の罪ある者の續をうばひて嫁せんと嬲ひ

○大理寺署　紫の西刑部署の南にあり。執法持平となる。額あり。雍正帝乃宸翰なり。御滿人。漢人各一人ありて卿漢官一人大理寺署の總官として事を摠と雖も平反【以て邦の刑を忘れざるを掌る】之官なり。京師五城順天府直省より屬する府州縣の死罪の刑を覆するをつかさどる。

舊大理寺の廨舍は一の堠石あり。其高に八斗兩拳持ずと數あり。紋理の文樂找く締を纖なるが如し。滋き天壌の奇物なり。好事の者のるよし。按るに【其在るあたをもって】中ごろ今其在るあたを詳にせず。

○工部製造庫　刑部署の東。元府胡同より西長安街路の南にあり。雍正帝御書内にあり。

○通政使司署　南より北に向ふ。雍正帝御書乃額あり。通政司官滿人漢人各一人副使滿漢各一人參議滿漢各一人ありて天下の章奏を達じ。署中より發閲數となる故を以て即發閲數を掌りて其實否を察して奏聞し。明代別に登聞數院を設けしが今は通政司に併せ署事を掌る。

書乃慎司喉舌の任なり。額あり。

○辦理回人佐領事務處　附雍協西長安街路の南にあり。此地旧承徳通衢乃と呼ぶ。俗尚ほところと称す。後ち西來巷と名く。後禅寺と連なり。乾隆帝御製の碑あり。

○河南道署　刑部署の南胡同にあり。此地旧承徳通衢乃と呼ぶ。俗尚ほところと称す。後ち西來巷と名く。後禅寺と連なり。乾隆帝御製の碑あり。

○西城察院署　刑部署の猛高胡同にあり。

小城察院署　修ち西陽門の西城根道乃胡同にあり。俗朝内城外城を糸ふ。故に西來巷乃胡同にあり。

○東城察院署　宣武門の東。治城根の西にあり。故に西中。南北の二城を糸ふ。

○右翼宗学　宣武門の小城にあり。

○時憲局　天候を屬る。時憲書を作るをもって名く。

○欽天監　内城南の右にあり。元代順承門と称ふ。明の正統の初め今の名に改む。今も俗尚ほ順承門と称ふ。

都て三門あり。左右の門を各一座の牌樓を建つ。

○欽房　阜財坊宣武門の内。西城濠の弘法八年を建つ。欽房橋の側にあり。

欽天監十正。副。僉事。五官正。保章正。春官正。夏官正。中官正。秋官正。冬官正。挨星官。各一人。

○欽天監衙門　欽房の西にあり。

○欽天監觀象臺　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監漏刻博士廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監回回科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監時憲科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監天文科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監五官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監保章正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監春官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監夏官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監中官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監秋官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監冬官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監挨星官廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監觀象臺　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監漏刻博士廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監回回科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監時憲科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監天文科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監五官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監保章正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監春官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監夏官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監中官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監秋官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監冬官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監挨星官廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監觀象臺　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監漏刻博士廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監回回科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監時憲科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監天文科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監五官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監保章正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監春官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監夏官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監中官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監秋官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監冬官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監挨星官廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監觀象臺　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監漏刻博士廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監回回科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監時憲科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監天文科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監五官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監保章正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監春官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監夏官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監中官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監秋官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監冬官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監挨星官廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監觀象臺　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監漏刻博士廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監回回科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監時憲科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監天文科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監五官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監保章正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監春官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監夏官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監中官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監秋官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監冬官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監挨星官廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監觀象臺　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監漏刻博士廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監回回科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監時憲科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監天文科　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監五官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監保章正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監春官正廳　欽天監衙門の西にあり。

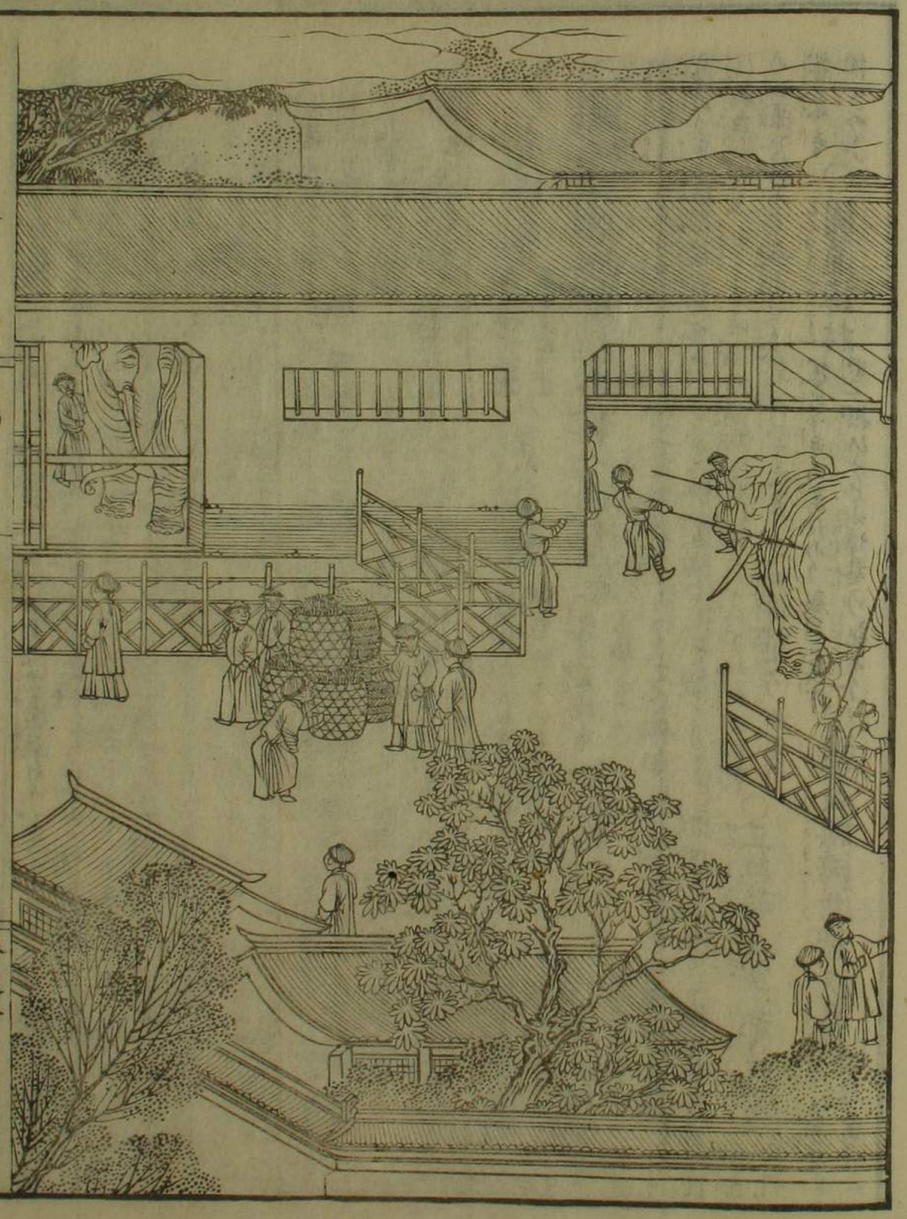
○欽天監夏官正廳　欽天監衙門の西にあり。

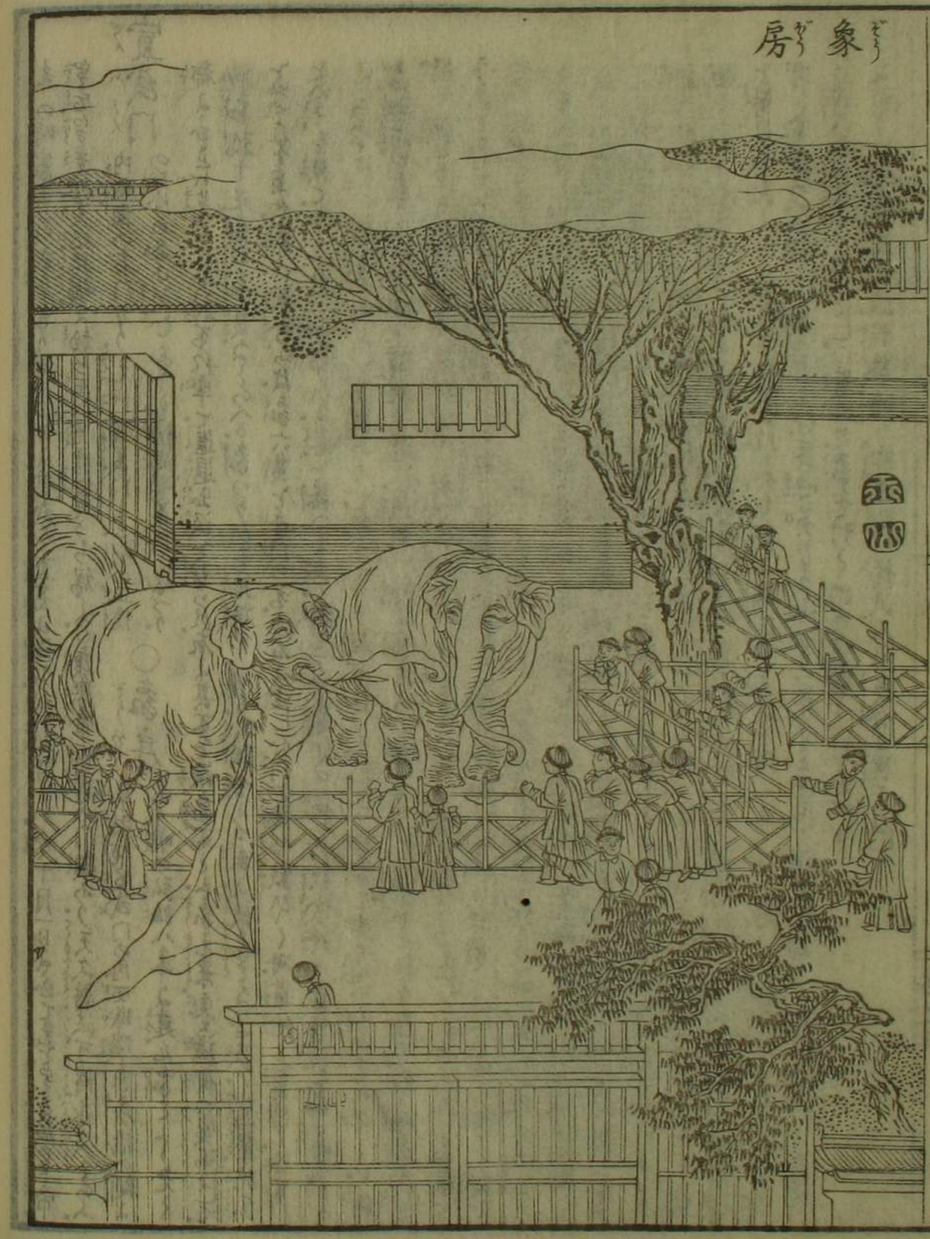
○欽天監中官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監秋官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監冬官正廳　欽天監衙門の西にあり。

○欽天監挨星官廳　欽天監衙門の西にあり。

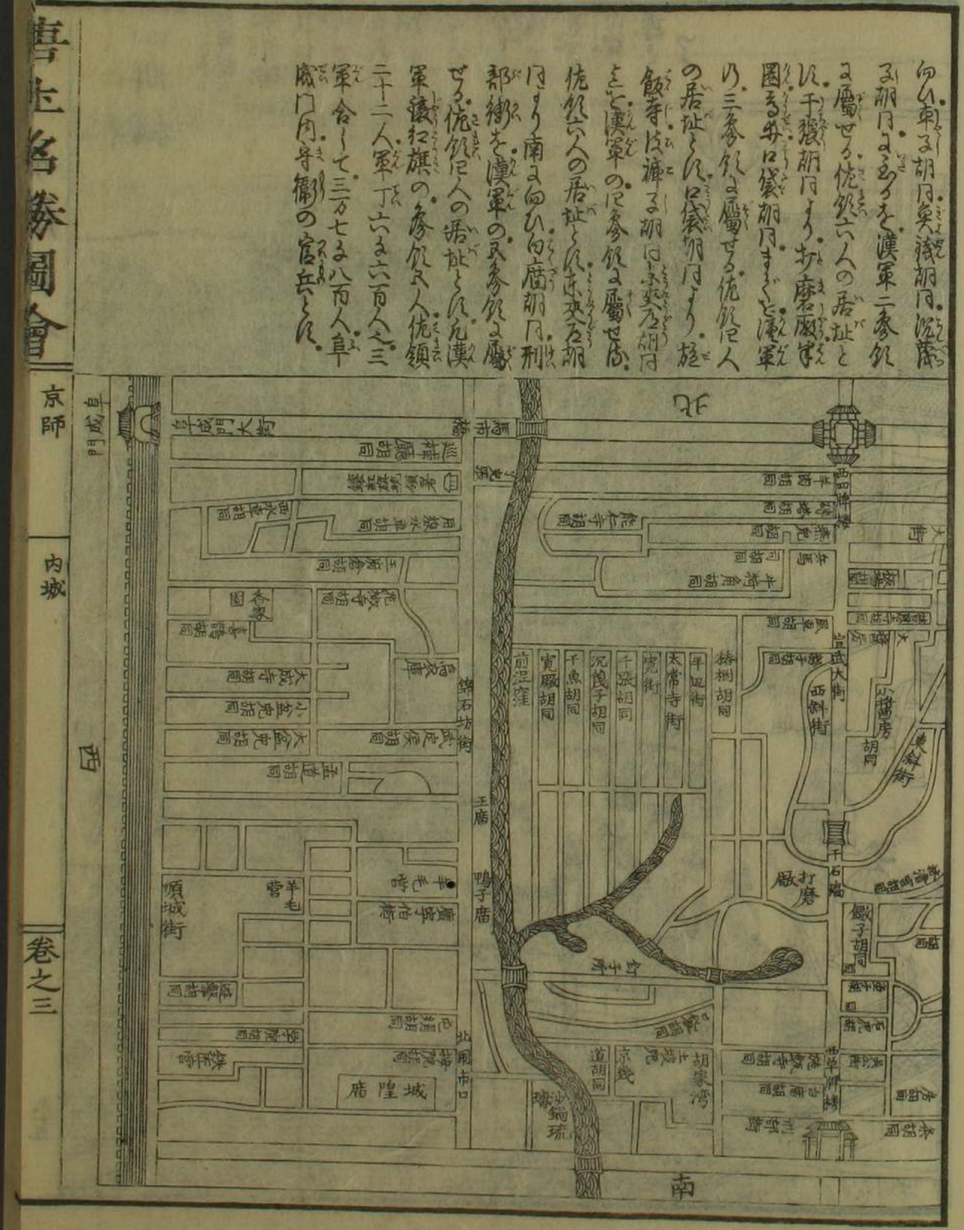




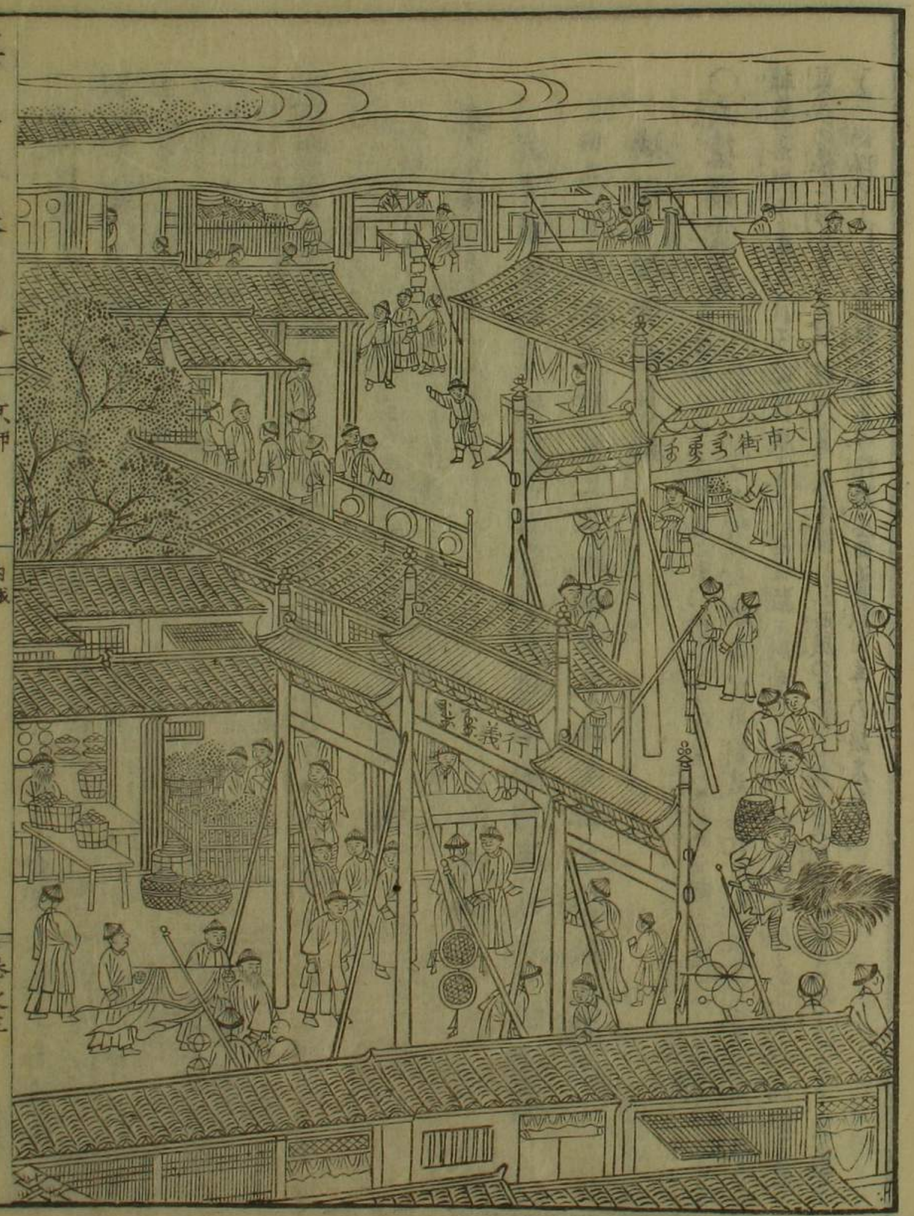
宣武門の西南の隅に王恭廠胡日有緣の地震の裂け來地湧り二の兒とう仏長三十步濶さ九二步深さ九二步ありし所代此に火藥廠ありしが今は廢せり。此の天啓六年六月初日の夕方より計其響雷の震ふがごく崩るる倒るる民家一万九百三十軒壓死とう男女六百三十七人此時一通の暴風吹來り風の内より一点の火光らくくと見るくに忽ち火藥廠を燒くく。煙焰を衝き火輪空中に轉ずるごとし」と。烟八隅より湧き百雷の震ふがごとく其衣裝を引奪ふごとく。衣服皆裂け飛ぶこと數百歩。此の時に當りて此邊の大木巨樹根より拔けさまに一里の外に飛ばされ或は十丈の高さ湧き上るもの或は人物のごとく其衣裝を引奪ふごとく。衣服皆裂け飛ぶこと數百歩。此の時に當りて此邊の大木巨樹根より拔けさまに一里の外に飛ばされ或は十丈の高さ湧き上るもの或は人物のごとく其衣裝を引奪ふごとく。衣服皆裂け飛ぶこと數百歩。

○兼恩律寺　都城の西南兼恩寺街にあり。○讓紅旗覺羅宗室　兼黑旗鄉にあり。○讓紅旗官學　宣武門の內西北にあり。○吉祥寺　猪尾胡同にあり。○天仙廟　南開市口にあり。○此寺もと元弘寺保安寺と號す。慈悲菴と稱せり。○兼恩律寺の右隣馬　○驚蟄寺　天衢にあり。

○讓紅旗滿洲步軍古漢軍三都統署　貞觀年中の建る古刹なり。唐代の佛像あり。其の體製隋代の物と見ゆ。心往あり。中に摸擬瑞相の佛像あり。其の體製隋代の物と見ゆ。其の體製隋代の物と見ゆ。其の體製隋代の物と見ゆ

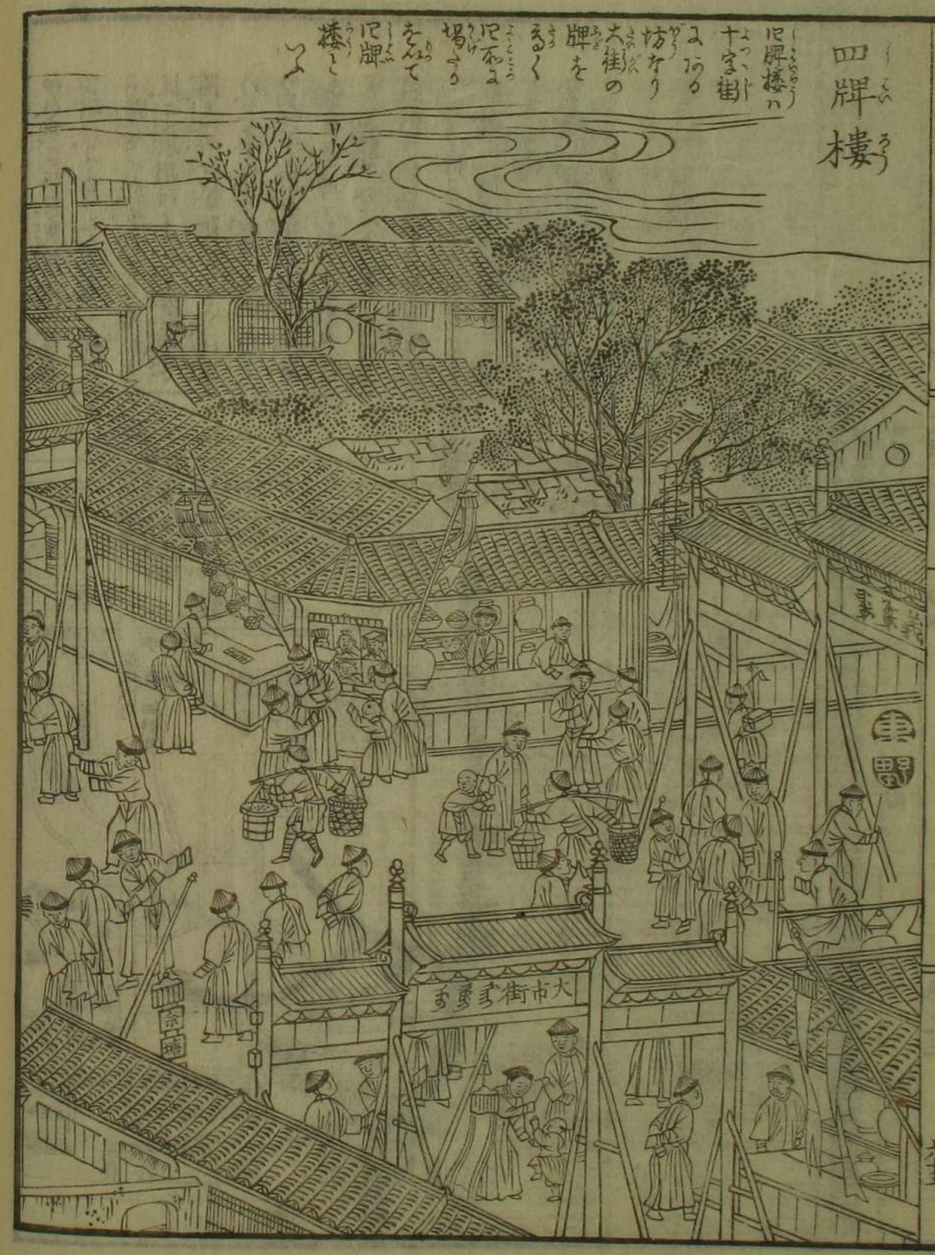


鑲紅旗居址　濱洲駐劄在漢軍三參領鑲紅旗內接壤之南北一帶西北臨樓東南至長安街之北一帶臨樓東至長安街之西一帶臨樓之南北一帶臨樓之東北一帶臨樓之西南一帶臨樓之東南一帶臨樓之西



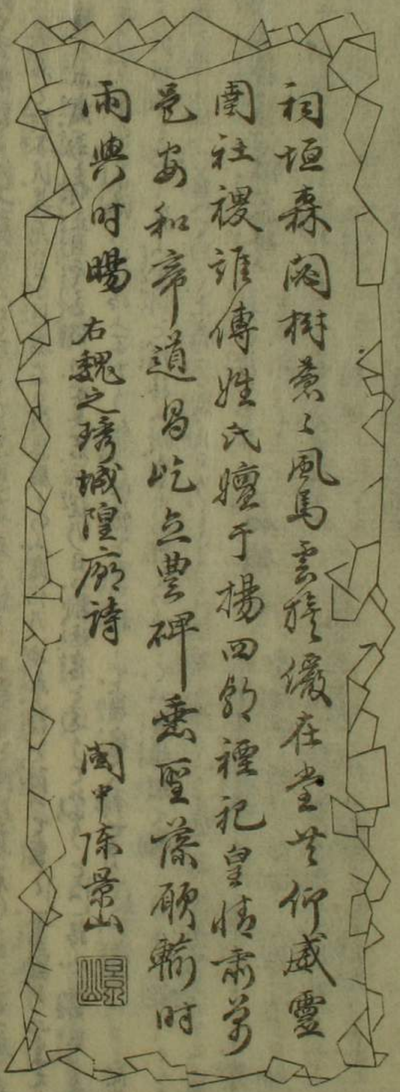
四牌樓

四牌樓ハ十字街ニ在る坊なり大街の牌をゑるく四面ニ門を開きて四牌樓をなす



○萬松老人塔　西北脚樓の南大御の西にあり。小き卽塔婆の形なり。萬松老人塔の事を刻む。そもそも老人名は行秀、字は文秀、萬松は其の號なり。又金正王耶律楚材ら、その若き老人を序位して參禪せる三年、老人卽ち示寂す。楚材居士の爲に撰く。卽ち老人の葬ひ不ありて、又正王ら、ひ孫玉汝の爲の墓を老人の遺命に從ひ、佛法を國以佛治心と

園係帝王之祀明の永樂中之を脩め又改て都城隍廟と稱す○祠殿の内に塑像の木偶二あり大きさ各十尺を越ゆ一は冠冕を戴き二は冕旒を垂れ尚ほ數十の神を侍らしめ一は冠を戴き二は冕旒を垂れ二の神を侍らしめ其服飾の制各異なり此祠を參る者又通士多此處に詣で祈禱をなす○廟の門に額あり曰く「顯佑通濟」と○祠殿の内に塑像の木偶二あり一は冠冕を戴き二は冕旒を垂れ二の神を侍らしめ其服飾の制各異なり此祠を參る者又通士多此處に詣で祈禱をなす○廟の門に額あり曰く「顯佑通濟」と

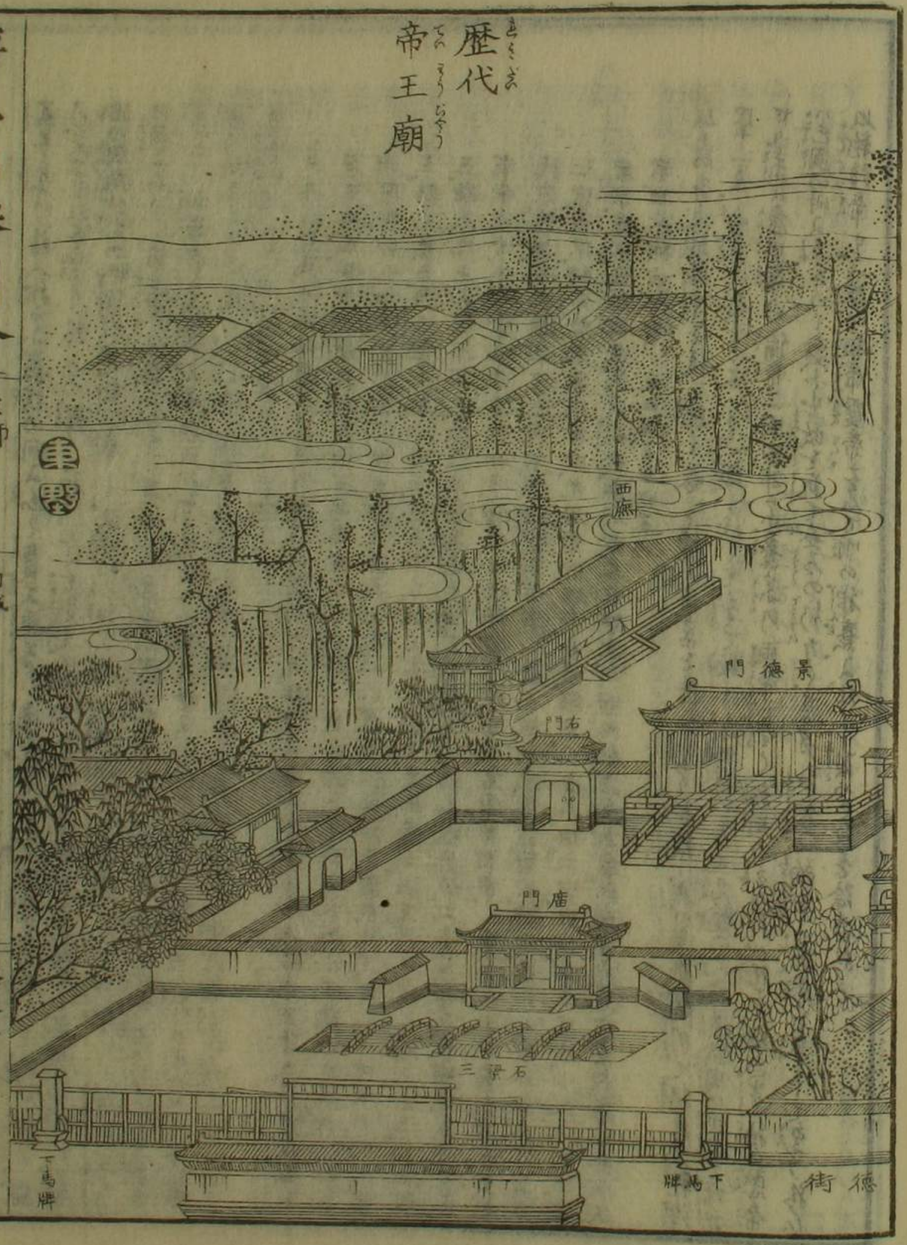


祠垣森阿樹蒼々風馬雲旗儼在望何威靈
園社禮誰傳姓氏壇于揚四方禮祀皇情崇
邑有和帝道昌此立豐碑垂聖藻願賴時
雨興叶暘　右魏之琦城隍廟詩

岡中孫景山

○關帝廟　都城涅廟の西にあり明代勅建の額を掲く此寺回郭の人都ゐ棄置く處なり清朝順治乾隆正二年帝親ら詣て祭祀を行ひ給ふ御製の碑文あり乾隆二十九年再び造営ありて祀を終ふ御製の詩文あり　廟門三間左右門各一あり石梁三あり内を系徳門と云門又下馬牌各一あり廟後三間崇基石闌あり　○正紅旗滿洲都統署　阜成門内西城にあり　○正紅旗蒙古都統署　阜成門内西城にあり　○護國關帝廟　此廟口のゆき平橋あり俗称る廟を呼ぶ　○鑲黃旗護軍統領署　阜成門内西城にあり　○右翼前鋒統領衙門　阜成門内都城にあり　○鑲黃旗滿洲都統署　阜成門内西城にあり　○鑲黃旗蒙古都統署　阜成門内西城にあり　○歷代帝王廟　阜成門大街にあり南向にして前に棨戟の門あり廟の後に殿あり歷代帝王及び名臣を祭りたまふ　○普壽寺　俗石坊衚衕にあり勅建の額を掲く此寺回郭の人都ゐ棄置く處なり　○正紅旗官學　日本の門に似たり　○正紅旗官學　日本の

歷代帝王廟





皇城名勝圖會

若を始め給ふ。然るに其後の間よろづ善悪の事共の有りしかども、天子ごとに其の世限りの祠を立て祭り給ふの例なれば、其の間再びその世限りの祠を奉仕し給ふの例なり。康熙六十一年勅して歴代帝王の後ふさわしき者悉く此南の地にて其の世限りの祠を立て祭らしむ。是又古の道なり。且蜀漢は西蕃の地、魏は後入代の偽天下一統の世なりといへども除きて祀らず。晋は五胡乱入の時なれば除きて祀らず。元は代帝王の祭祀曾て古の道にあらざるを以て除けり。

大昊伏羲氏　炎帝神農氏　皇帝軒轅氏　少昊金天氏　顓頊高陽氏　帝嚳高辛氏　帝堯陶唐氏　帝舜有虞氏　夏王禹　啟　仲康　少康　杼　槐　芒　泄　不降　扃　廑　孔甲　皐　發　○商王湯　太甲　沃丁　太庚　小甲　雍己　太戊　仲丁　外壬　河亶甲　祖乙　祖辛　沃甲　祖丁　南庚　陽甲　盤庚　小辛　小乙　武丁　祖庚　祖甲　廩辛　太丁　帝乙　○周武王　成王　康王　昭王　穆王　共王　懿王　孝王　夷王　宣王　平王　桓王　莊王　僖王　惠王　襄王　頃王　匡王　定王　簡王　霊王　景王　悼王　敬王　元王　貞定王　孝王　威烈王　安王　烈王　顯王　愼靚王　○漢高祖　惠帝　文帝　景帝　武帝　昭帝　宣帝　元帝　成帝　哀帝　光武帝　明帝　章帝　和帝　殤帝　安帝　順帝　沖帝　桓帝　霊帝　昭烈帝　○唐高祖　太宗　高宗　睿宗　肅宗　代宗　徳宗　順宗　穆宗　文宗　武宗　宣宗　懿宗　僖宗　○遼太祖　太宗　景宗　聖宗　興宗　道宗　○宋太祖　太宗　真宗　仁宗　英宗　神宗　哲宗　高宗　孝宗　光宗　寧宗　理宗　度宗　端宗　○金太祖　太宗　世宗　章宗　宣宗　○元太祖　太宗　定宗　憲宗　世祖　成宗　武宗　仁宗　泰定帝　文宗　寧宗　○明太祖　恵帝　太宗　仁宗　宣宗　英宗　景帝　憲宗　孝宗　武宗　世宗　穆宗　敬宗　熹帝　東西廡名臣位置此

以上の帝王殿庭中より後を祀し、春二月、秋八月、官を遣して祭らしむ。乾隆十一年、會典を載せ、また勅して曰く、歴代帝王廟の祭祀、歴朝これを重んじ、典礼備はれり。朕、心を致して敬謹し、東西廡名臣位置此を以て、康熙帝の倫肯を仰ぎ、歴代帝王の神位を正し、以て千古の聖賢を崇ぶの意を表せんと。

○弘慈廣濟寺　歴代帝王廟の南にあり。康熙年中、王圖斯らの奏請によりて建つる所なり。本尊は三世仏、左右に十八羅漢の像を置く。

○正紅旗護軍統領署　西北隅楼の小東にあり。

○鑲黄旗護軍統領署　西北隅楼の小東にあり。

○圓恩寺　紅羅廠の南にあり。

○開帝廟　西北隅楼の小東にあり。額に雙関帝廟とあり。関帝の像を安置す。

○拂擅寺　二世ノ呼ビ名ヲ忘レテ知ラズ。

○正紅旗護軍統領署　西北隅楼の小東にあり。

○白塔寺　河漕西坊皇城内にあり。遼の寿隆二年、釋迦佛舎利を安置せんが為に建つる所なり。何との代より建つるを詳にせず。元の至元八年、世祖帝此塔中より舎利の石函を得給ひて、其の地に寺を建立し給ふ。明の洪武七年、重修あ

正紅旗居址　直門大街留之觀の東より。南へ。正紅旗濁洲。鑲紅旗漢軍の正黄旗と界を接る。西の馬市橋の北より。南へ。石老胡同の東にまたがる。濁洲の鎮參領衙門。南へ。石老胡同の東にまたがる。濁洲の正參佐の屬せる佐佐十二人の居址。これ石老胡同の東にまたがる。南へ。馬市の東にまたがる。濁洲の二參佐の屬せる佐佐十二人の居址。これ石老胡同の東にまたがる。南へ。馬市の東にまたがる。濁洲の三參佐の屬せる佐佐十二人の居址。これ石老胡同の東にまたがる。南へ。馬市

治人之至元間宮中に誘引し帝駭ろいて宮人を至元間宮中に誘引し帝駭ろいて宮人を
見出せしに其の形大に異なり帝益々驚きて此を殺さんと欲せしに其の形大に異なり帝益々驚きて此を殺さんと欲せしに
て忽ち隠れ去りぬ後に此の塔を建て鎮壓せしと云ふ
宇内の名勝なり。九層の製いと高く上極きいと
節ごとに真珠り其上に羽蓋を設けて飛檐を
めぐり。幸未の年二月十三日雷火に燒る。

雷火焚故宮白塔

數聲起蟄乍聞雷驟雨來恐有怪
龍遭電取未應佛塔被魔災人傳妖鳥生誇
火誰覓胡僧話劫灰豈復神靈有遺恨冷烟
殘燼滿荒臺

十湖平光胤書

○朝天宮　阜成門の内朝天宮街にあり。明の嘉靖年中、道士邵元節の請に依て建立せらる。
此の兩帝御製の詩文あり。石刻の勅諭あり。宮門に武官下乗
西廊下等の名殘れり。○正紅旗営　阜成門の内。
阜成門　内城の西門なり。元代平則門と
明の正統同名の名ありしと。○柳巷　西直門内にあり。若冬岩徳宗淳師と
云ふ。都下に生れて法を玉泉明聴に受く。明の

萬暦の初年、御巷と稱せり。一日徳清未て冬岩淳師にみえ、
うるわ神を翹さまくの秘術とるに、て禅師と阿
即授けて、て教えり。冬岩曰く、吾師淳師は、
黎歌せしめ、嘗て雲棲の袾宏と、其の教を同じ
人の外教て訪人なく、其の徳に感ずるや、
澄昂潔、人の憂を修ふ西直門の外小西門より
ふり、其徳に仰きたまい、勅建ふ詔て祝聖
給名を賜ふ。今冬岩が塔、并に其の僧塔の
集あり。今世に絶る。○十方禅院　西直門小街
光水本同。慶安治岸寺、稍見菴、磯山、臧佛雑除、
雨菴留無不可、拂與幕務還、其風ふれるこの
○寶禅寺　宝禅寺、朝天宮の小
又菴此地を営んで居宅を建んとし、
恒出せり。寛ふ、て其寺址なるを知りて寺と造
ず。此の朝廷之を聞て即勅禅の額をたまう。
堰二あり。仏殿の前二像あり。光霊の額、
朱の衣と着さるこの二像あり。こんにゃく
市あり。百貨つどう。実に
康熙乾隆両帝御製の碑あり。

○崇國寺　西直門内大街の北にあり。元代永平崇国寺なり。
西にあり。元代永平崇国寺なり。
寺い其西崇国寺なり。鳥え朝廷元祝聖の
額石猴丹、大覚法王著肯菴ト名を改む。
寺、二像あり。光霊の額、
像と着さるこの二像あり。こんにゃく
市あり。百貨つどう。実に
康熙乾隆両帝御製の碑あり。
元代、明代の碑基あり。

○以上正紅旗受直門內護衛軍の署なり。

○大德真君廟　地安門の外、萬寧橋のかたはらにあり。元の天曆年中の建立にして、至元六年六月三日供養の記あり。廟制、廟門一間、南に向ひて立つ。正殿三間、南を向ひ、東西の廡各一間、制一内を脇坊門とす。正殿の後ろに三間の閣あり、廣三間、東西の廡各一間、南殿三間、其東西の廡各一間、の後ろに三間の閣あり、其後に祠樓あり、十文間、南向、廟門の内、南より後殿の東西に廊あり、流觴の亭と曲水とあり、亭の後に殿あり、其後に假山を築き、周圍に石欄を繞らす。後の園帝殿五間、周圍石欄を繞らす。乾隆帝御製の碑あり、其後の水直ちに地安門の外に流れ出づ。

地靜烟雲滿開軒水上樓泛封丹竈源竹護菜苗磨火遲時爲帝永日有齊馮客子古夢能指陟猶右李鍊師水竹軒詩　西河子出掌古

遊護國寺

宅接祇園毛百壽朱衣狀現掌皮冠笑他筆石山頭坐贏得吃宜望擊犢歸

宋光然　楼高文

正黃旗居址　濶洲蒙古漢軍三旗居址

濶洲蒙古漢軍三旗居址、濶洲の頸參領之屬せる佐領十九人の居址と、濶洲二參領之屬せる佐領十八人の居址と、八個灣の南にあり。東は護國寺胡同より、西は德勝門大街に至り、南は德勝橋より、德勝大街に至る。濶洲の三參領之屬せる佐領十八人の居址と、鼓樓大街より、德勝橋大街に至る。濶洲の頸參領之屬せる佐領十九人の居址と、八個灣の南にあり。東は德勝門大街より、西は德勝橋大街に至る。濶洲の二參領之屬せる佐領十八人の居址と、鼓樓大街より、德勝橋大街に至る。濶洲の三參領之屬せる佐領十八人の居址と、鼓樓大街より、德勝橋大街に至る。濶洲の頸參領之屬せる佐領十八人の居址と、松樹衚衕より、德勝橋大街に至る。濶洲の二參領之屬せる佐領十八人の居址と、松樹衚衕より、德勝橋大街に至る。濶洲正黃旗の參領之屬せる佐領十八人の居址と、松樹衚衕より、德勝橋大街に至る。濶洲の三參領之屬せる佐領十八人の居址と、松樹衚衕より、德勝橋大街に至る。濶洲の頸參領之屬せる佐領十八人の居址と、松樹衚衕より、德勝橋大街に至る。濶洲正黃旗の

○大覺寺　御製碑あり。東ある後殿あり。西廡あり。乾隆帝御製の碑あり。次に関帝・孫王両殿の額あり。乾隆帝より寵額あり。○火神廟　地安橋のゆあり。廟の後御あり。○三旗参領署　地安門の西にあり。

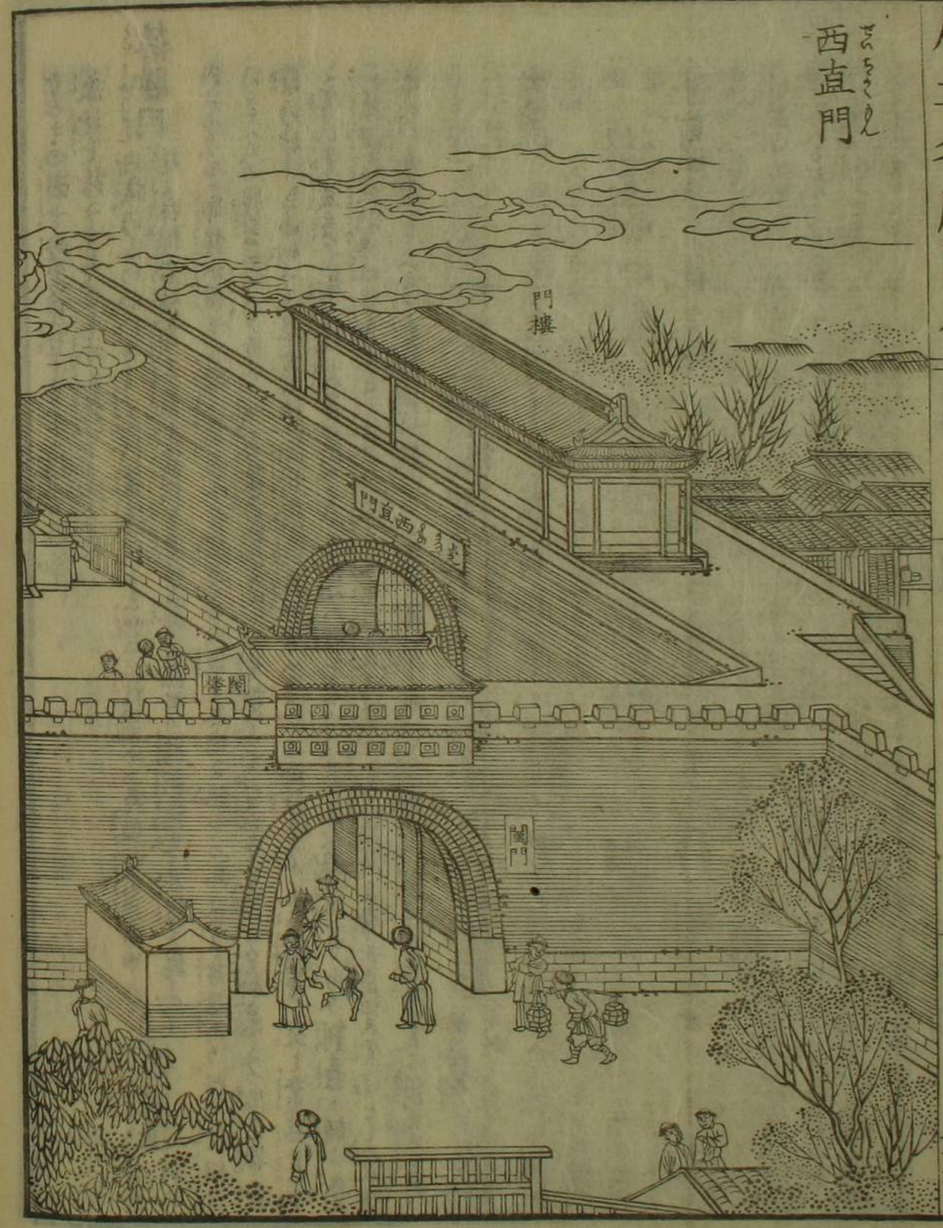
積水潭　蒙城の中外海をつうへの燕市の積水の源なり。其源西山一帯馬眼の湧泉・甕山の後滙と合して三流となり。一の都城の水門より入て積水潭に注ぎ。一は高梁河より入て玉河橋より外濠に入り。一は西直門の水門より入て積水潭に注ぎ。会して東流して通恵河に入るなり。その外通恵河を開て運河に注ぐ。これ皆て積水潭覚苑寺より通ずるなり。○薬王廟

龍興寺看新竹　高士奇

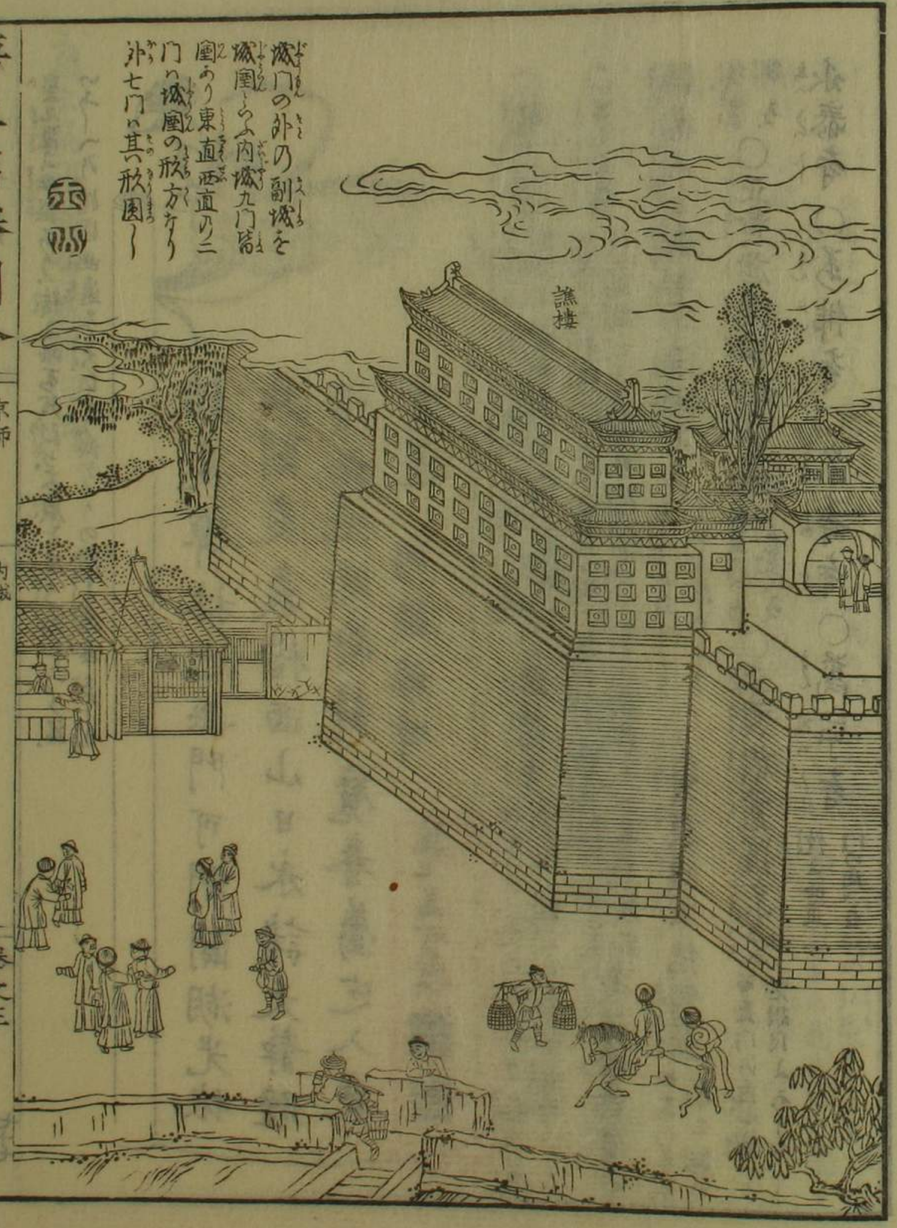
拂檻清陰細窺筜綠影深露香生靜夜風聲
散移山解籜抽條已滿林渭川千畝意
知日按襟

○心華禪寺　龍華寺の西にあり。一名小龍華寺とも。俗呼の即御園田なり。内にの名あれども。其の詳ならず。内にの名あれども。其の詳ならず。○十利海　龍華寺の西にあり。俗の即御園田なり

西直門



城門の外の副城を甕城といふ内城九門皆甕あり東直西直の二門は城圍の形方なり外七門は其形圓し





結夏禪林迥無門可閉鄰湖光依
北閣爽氣借西山日永諸天靜鐘
清初地閒新辭魔眷屬空入夜
雲還 明顧錫疇

荏土高雲溟

七七

○龍王廟 影御口ありて勅して建。○廣濟寺 日本ありて明の正德九年、梵樂禪師ありて勅して建。明碑二あり。乾隆十八年奏請して修。○崇元觀 西直門内、影御口ありて勅して建。明碑二あり。俗曹公觀と稱す。明の時曹化淳の建る所、乾隆帝御書の扁額并に詩碑あり。乾隆二十三年重修。○正黃旗漢軍都統署 西直門の内、後寬街の北。○正黃旗護軍統領署 西直門の内、崇元觀の南。○正黃旗覺羅宗學 西直門の内、小街の北にあり。（）○永泰寺 ○萬安寺 俗に西直門の内、北

西直門 内城西の北門なり。元代、和義門と呼ぶ。明の永樂の間改め建。○明の弘治十年の圖一の舊都に、路陽の馬ところ〴〵の如く跨駕の人何萬ともなく人口列の若き描て曰く、舊城中頻年もべ〳〵ところ〴〵に舊都の署も燬くべき。

内城之概右之記をとゞし、且親王公侯勅賜の府第悉くこゝを略せり。又廟祠寺觀の屬も、事實の記をべきものをとりて除きて載せたり。

阿波國文庫

356
2
3